

---

# そして時は廻る

砂那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そして時は廻る

### 【Nコード】

N35550

### 【作者名】

砂那

### 【あらすじ】

異世界トリップファンタジー。

普通の会社員だった二十歳の里香子は、運命の女性、王の花嫁として異世界に召還された。

けれど手違いで王都から離れた場所についてしまい、親切な人に助けられて近くの村で働いていた。

そして、自分の運命も知らずに別の相手と恋に落ちてしまう。

彼女を愛する二人の男。

ひとり理想を掲げ、それを実現させるべく戦う高潔な王。

もうひとり、虐げられている仲間を守る為に戦う盗賊。  
そして里番子に秘められていた、この世界との関係は。

## 序章 銀髪の魔導師

湿った石畳の廊下に、カッソ、カッソと足音が響いていく。

術衣を纏ったひとりの青年が、暗い地下道を足早に歩いていった。

闇の中でも鮮やかな、朱色のローブ。その合間からこぼれ落ちるのは、銀色に煌めく髪。

視界を覆う暗闇の中。洞窟を掘り進めたかのような荒い造りの壁には、地下水が天井から滴り落ちている。ぽつん、ぽつんと時折、彼の足音に混じって聞こえる水音。独特の湿った空気。その中を彼は躊躇いのない足取りで進んでいく。その手元に灯りはない。けれど彼の歩みにきっちりと合わせて、その周囲だけが明るく照らされている。身に纏っている衣装が示すように、彼は魔導師なのだろう。

長い石畳の廊下の奥には、木製の小さな扉があった。背の高い者ならば屈まなければ潜れないだろう。扉には魔方阵のような物が刻まれ、淡く紫色に光っている。魔法によって施錠されているようだ。彼はその魔方阵に手を掲げて小さく解呪の言葉を呟く。言葉は魔方阵に吸い込まれ、扉はまるで溶けるように消滅した。その後に見えたのは白い霧のような靄。

銀髪の魔導師は何の躊躇いも残さずにその中へと入っていく。彼がその中に消えた後には、また何の変哲もない木の扉が出現した。紫色の魔方阵もまた甦る。

その扉の向こうは魔力のない者にとっては、ただの岩壁でしかない。白い霧のようなものさえ見えないだろう。けれどその扉を正しく解除した魔導師が通れば、別の空間へと繋がる扉となる。

それはあの暗い地下道からは想像も出来ないほど広い部屋へと繋がっていた。四方を本棚で囲まれ、古びた本が上から下まで整然と並んでいる。中央には大きめの机があり、そこにも数冊の本が、こちらは無造作に積み重ねられていた。

この部屋には窓も入り口の扉もない。

他者の侵入を防ぐために入り口を別の場所に作り、魔力で道を繋げているのだろう。

彼はその部屋の中央まで進むと、目深に被っていた術衣のローブを外す。長い銀髪がさらりと流れた。白い肌に、深い緑色の瞳。整った容貌だが、その表情は晴れやかではなかった。何か重大な秘密を背負っているかのような、憂いを帯びた表情。

慎重に、机の上に一枚の古びた紙を広げる。そこには複雑な魔法文字が書き込まれていた。

何度も頭の中で繰り返ししてきた呪文を辿るように、彼はその翡翠色の瞳を閉じる。緊張しているのか、机に置かれていた掌が震えている。

どのくらいの時間が経過したのだろう。彼は瞳を閉じたまま、心を惑わせる迷いが消えるまで、そのまま佇んでいた。外界から隔離されたこの部屋では、太陽の沈む様子もわからない。やがて彼は、覚悟を決めたかのように瞳を開き、両手を前に掲げた。

「必ず」

必ず成功させる。彼はそう言いたかったのだろうか。

だが魔導師の発する言葉には、強い意志が宿っていた。もう迷いは微塵も感じさせない。高まる魔力。慎重に、次元の扉を構築していく。

異世界へと通じる扉を開く。それが彼の使命だった。

この魔法を構築したのは、彼の父だった。偉大なる魔導師であった父が、成し遂げられなかったこと。それを達成させるには、まだ力不足なのは自覚していた。けれど、もう猶予はない。だからこそ、絶対に成功させなければならない。

魔力はまるで吸い取られるように、この扉へと引き込まれていく。けれどまだ足りない。まだ安定していない。

（……失敗する訳にはいかないんだ）

唇を固く噛み締め、すべての魔力を出し尽くそうと意識を集中させる。まるで命までも吸い取られていくような極限の中、ようやく

掴んだ確かな手応え。異次元への扉が構築されていく。

たくさん人間。何十億もの命の気配を感じる。その中からたったひとりを探し出さなければならぬ。慎重に気配を探っていく。固く閉じた瞳。彼の白い額に、汗が滲んでいる。

探しているのは、ひとりの女性。

この国にとって、国王にとって、そして自分自身にとっても特別な存在である女性だ。

何度も途切れそうになる意識を必死に繋ぎ止め。持てる魔力をすべて出し尽くし。そしてとうとう、運命の娘を見つけ出す。

その足元に魔方阵を構築し、次元を越える扉を作り出した。そして彼女が確かにこの世界へと移動するのを感じた。あとは、きっと吉報を心待ちにしているだろう、王の元へと彼女を移動させるだけだ。

あと少し。だが気力も魔力も、そこまでが限界だった。途切れそうになる意識を必死に繋ぎ合わせようとするが、限界を超えた身体は急激に闇に沈んでいった。

「……、……」

何故父は、これを実行しなかったのだろう。

魔力も体力も自分よりも勝っていた父ならば、自分よりも成功率は確実に高かっただろう。

それなのに、何故。

意識を手放す瞬間に感じたのは、途中までとはいえ目標を達成したのだという満足感ではなく。何故か、取り返しのつかないことをしてしまったかのような、罪悪感だった。

## 1 - 1 異世界の朝

今までの二十年の人生の中で、鳥の囀りで目が覚めたことなどあっただろうか。

窓から差し込む太陽の光。

眩しいその光を感じながらゆっくりと瞳を開けて、窓の外を見る。朝を司る、少し冷たいけれど清々しい空気。

とても爽やかな朝だった。

「……さ、爽やかすぎる」

窓辺にあるベッドに転がったまま呟いたのは、ひとりのまだ若い女性。

小柄で、肩までの黒髪が寝癖でやや乱れている。目を奪われる程の美女ではないが、やや幼く見える顔立ちはとても可愛らしい。しばらく目を閉じて何度か寝返りをしていたが、やがて覚悟を決めたかのようにえいつ、とかけ声をかけて起き上がる。

木造の小さな家だった。窓が大きく、光が存分に差し込む明るい室内。ひとつしかない部屋に、ベッドと机と棚が置いてある。質素だが部屋の中はとても綺麗に整頓してあった。

窓を開けて早朝の新鮮な空気を取り入れると、冷たい風が室内に入ってくる。太陽が明るく照らしていても、その風はもう秋の気配を帯びていた。窓の外に見えるのは、綺麗に色付いた深い森。太陽の位置からすると、そんなに寝坊をした訳でもなさそうだ。

「さて、と。今日は誰のお手伝いをすればいいのかな」

寝癖のついた髪を丁寧に櫛で梳いてきっちりと纏め、着替えをする。浅黄色のスカートに全身を隠すゆったりとした淡い色のローブ。フードをすっぽりと被ると、顔どころか性別さえわからなくなるだろう。かなり怪しい姿だと思うが、この家を貸してくれた恩人の言葉だから従わなければならぬだろう。

「これを着ないと外に出たら駄目って言われてるんだもの。仕方な

いよね」

この世界では、黒は不吉な色だから。

そう言われたことを思い出し、ふと身支度をしていた手を止めて、窓硝子に映った自分の姿を見つめる。

黒髪に、茶っぽい色の瞳。生まれた場所ではこれが当たり前だった。ほとんどの人がそうだった。けれどこの村では黒髪の者はひとりもない。

（ここは、何処なんだろう。私、どうしてここに来たんだろう……）

それは今まで何度も繰り返してきた疑問だった。

彼女の名前は中島里香子。

春に就職したばかりの、普通に暮らしていた新社会人だった。

何度も繰り返し返してきた朝のように、あの日も都心から少し離れたアパートで目を覚まし、大急ぎで駅までの道を走っていた。

「ち、遅刻しちゃう。今度遅刻したらもう駄目かもお」

息が苦しい。朝食も取らずに全力疾走をするのはつらかったが、五分後に発車してしまう電車に乗らなければ、もう間に合わない。

今度遅刻したら何を言われるかと、必死だった。そのせいで前方不注意だったのかもしれない。けれどなんの警告もなく道の真ん中に穴が開いていたなどと、他の誰も予想していないに違いない。

（まさかマンホールの蓋が開いていたなんて。しかも朝の、あんな時間に……）

通勤ラッシュの時間帯で、周りにも多くの人が居た筈だった。それなのに、自分だけが落ちてしまった。悲鳴を上げ、暗いトンネルにも似た狭い穴の中を落ちていく。不思議な浮遊感。命の危険が迫った時、一瞬の出来事もまるでスローモーションのように感じる場合があるという。今がまさにその状況なのかもしれない。

（私、死ぬのかな？ 通勤途中で、マンホールに落ちて死ぬってなんて間抜けな。今までの人生がまるで走馬燈のように……って、走馬燈ってどんなのだっけ？）



うーん、と頭をひねって考えてみるが、わからない。

（帰ったらインターネットで調べてみるかな。って、私死ぬんだっけ。疑問を残したまま死ぬってなんかもやややるね。もしかして地縛霊になっちゃったりして）

夜な夜な、マンホールの蓋から顔を出して、走馬燈って何だっけ、などと聞く幽霊にはなりたくない。

だが、いくら思案していても決定的な時間は訪れなかった。

「……いくらなんでも長すぎない？」

まさか都会のだ真ん中に、こんな深い穴がある筈がない。けれどもう空は見えず、どのくらい落ちていたのかもわからない。

いつのまにか、気を失っていたらしい。気が付けば見知らぬ森の中で倒れていた。そこを助けてくれたのが、この小屋も貸してくれた恩人の老夫婦だった。

（まさかこんな見知らぬ世界に来ちゃうなんてね……）

けれど戸惑ったのは最初だけだった。見知らぬ世界だというのに、何故かとても懐かしい感じがしている。それにここは、とても綺麗な世界だった。緑豊かな美しい光景。勤勉で優しい人たち。

住まわせて貰っている家は恩人達がいる村からは少し離れていて、森の入り口に一軒だけある小さな山小屋だった。

最初の日は照明のない夜のあまりの暗さに、その静けさに恐怖を覚えた。毛布を被ったまま朝まで眠れない日もあった。けれど今ではすっかりと慣れてしまい、鳥の囀りで目が覚める生活って素晴らしい、とすら思っている。

「でもまさかこの年になって、不思議な国に迷い込んでしまうとはね……」

どうせなら、まだ夢を見ていられる若い頃に来てみたかった、と溜息を付く。

大人になってしまった今、たぶん無断欠勤になってしまった会社や、明日振込みをする筈だった家賃が少し心配だ。

「でも帰れる方法も今のところ見つかってないし。しばらくはここ

で頑張るしかないもんね」

長所は前向きな所。そして短所は、深く考えない所だった。きつちりと身支度を終え、森の近くにある小屋から近くにある農村へと向かう。

毎日誰かの手伝いをして、食べ物や生活に必要な物を分けて貰っていた。貨幣のない生活にも随分早く慣れたものだ。

村に入ると、まず恩人の老夫婦の家へ行く。まず最初の仕事は水汲みだった。川までは少し距離がある。ふたりとも高齢なので、かなり重労働だろう。

近くの綺麗な川へ向かい、木の桶に水を入れて、こぼさないように気を付けながら何回か往復する。川は底が見えるくらい透明で、朝陽に反射してきらきらと煌めいていた。水辺独特の冷たい澄んだ空気。小さな川魚が水音に驚いて素早く岩の影に隠れていく。

里香子は陽気な気分になって、小さく唄を歌いながら往復し、家の中にある水瓶をいっぱいにした。

「うん。これでいいね。後は何すればいいのかな？」

すると、パンを焼く良い香りが漂ってきた。きっと老婦人が朝食の支度をしているのだろう。

（この世界のパンって少し固いけど、小麦の香りが良くてとっても美味しいのよね）

柔らかいパンに慣れていた最初の頃は固くて食べられない、と思ったが、今となっては元の世界のパンは物足りないと思うかもしれない。

「おはようございます。他に何か手伝うことありますか？」

挨拶をして台所へ入る。里香子よりも更に背の低い、小柄な老婦人が振り向いた。

「おはよう。庭に行つてリコーンを採ってきてくれないかい？」

元々は猟師だったという老夫は厳しい顔をしていて、年を感じさせない強靱な体つきをしていたが、彼女はとても優しく温厚な人柄だった。素性の知れない自分にも、とても優しくしてくれる。

## 1 - 2 漆黒の盗賊

「わかりました。すぐに採ってきますね」

リコーンと聞いてにつこりと笑いながら、里香子はすぐに外に出る。

（やったあ。リコーンのスープだ。あれってすっごく美味しいのよね）

リコーンとは、元の世界のとうもろこしに似た植物だ。向こうでは夏に収穫するか、こっちの世界のリコーンは秋に実る。味もとうもろこしによく似ていて、スープを作るとまるでコーンスープだった。老婦の作るそのスープは、素材の甘さがとてもよく出ていて、本当に美味しかった。

一人暮らしだったが料理は好きで、休日には色々な料理を作ったりしていた。この世界でも見たことのない食材を見るたびに、その調理法などを聞いて勉強をしている。

焼きたてのパンに、美味しいスープ。美しい自然に綺麗な空気。

そして善良で優しい村の人たち。

（ずっと、この世界にいるのもいいかな）

ふと、そんな考えがよぎる。

この世界に来てから、何度夜を過ごしただろう。けれど帰る方法は検討もつかなかった。どうやってここに来たのかもわからない。それにもしかしたら、向こうの世界ではもうマンホールに落ちて死んでいるのかもしれないのだ。

ここならば引越し資金も土地の購入代もかからない。両親はすでに亡く、兄弟もいない。気になる程の親しい友も、恋人もいない。そう思うと、結構寂しい人生だったのかもしれない。

背よりも高いリコーンの畑を歩きながら、溜息を付く。二十年間の人生。ただ義務のように淡々と、周囲の人たちと足並みを揃えて暮らしてきた今までの人生よりも、こうして好きな料理を学びなが

ら、自然豊かな森で暮らす方が幸せなのかもしれない。

「あ、これ美味しそう」

溜息を付きながらも、見事に実を付けた房を選び出して、採ろうとしたその時。

「……ん？」

村の中心で何やら悲鳴のような声が聞こえた。何だろう、と背伸びをしてそちらの方向を見る。それはこんなに平和でのどかな村には似つかわしくない声。いったい何があったのだろう。

「どうかしたのかな？」

様子を探るかのように、耳を澄ませてみる。そうするともう一度、今度ははつきりとした悲鳴が聞こえた。

「大変！」

何か事故でもあったのかもしれない。里香子は、思わず採りたてのリコーンをその場に置いて走り出した。

この世界の草は、秋になると金色に染まる。

それは秋になると木の葉が紅に染まるように、この世界では自然なことだった。

金色に染まり、太陽の光に反射してキラキラと煌めく草原の中を、里香子は走っていく。リコーンの畑は森の近くにあったから、村の中心までは少し遠い。息を切らしながら駆けつけた。そして、慌てて村の中央に駆け込んだ里香子が、目にしたのは。

村に乱入している複数の男達。目的は、食糧なのだろう。収穫されたばかりの、外に並べられていた野菜を、押し入った男達が無造作に袋に詰め込んでいる。彼等はすべて黒髪で、それぞれ腕や手の甲、頬などの場所に不思議な紋様の入れ墨をしていた。

（黒髪だわ……）

思わず足を止めたのは、この世界では今まで一度も見かけることのなかった馴染み深い色を見たからだ。瞳の色は様々で、茶色や青、緑などもいる。だがこの村に住む人たちが皆、背が高く色も白いの

に比べて肌も黄色っぽく、身体つきもそんなにがっちりしていない。

けれど親近感を覚えたのは、ほんのわずかな時間だけだった。どう好意的に見ても、野菜を回収しに来た業者には見えない。

「泥棒！」

どれもみな、この村の人たちが一生懸命に育てた貴重な食糧だ。とつさにその場にあつた外用の箒を手に、大声で叫んだ。

「人の物を盗むなんて、最低なんだから！」

相手は複数の男たち。にも関わらず強気で叫んだのは、声を聞きつけて村人が集まってくるだろうと予想したからだ。けれどそれに反し、響き渡るのは里香子の声のみ。

「……」

村には、決して少なくない人数の村人がいる。それに皆、里香子よりもずっと早起きなのだ。それなのに。

（な、なんで誰も出てこないの……）

泥棒と叫んでも誰も出てこないということは、相応の理由があるのかもしれない。例えば、相手にしたくないほど、残忍な盗賊たちだったとしたら。複数の男たちの前に、ひとりで飛び出した自分の軽率さを後悔するが、もう遅い。

「勇ましいな」

まだ若い男の声が、背後から響く。振り向く暇もなく腕を取られ、箒が地面にからんと転がった。村の外を警戒していたらしいその男は、里香子の腕を引いたまま仲間の元へと歩き出した。

「警備団が来ると厄介だ。急げ」

男たちは無言でその言葉に頷き、手の動きを早めていく。この状況から察するに、一番若く見える彼がリーダーなのだろうか。

「は、離してよ」

何とかその手から逃れようと、彼の進行方向に逆らって力を入れるが、一見細身に見える彼は、里香子の力ではよるめくこともない。

それでも必死に抵抗が続けていたが。

「あつ」

暴れた拍子にフードが外れ、纏めていた黒髪が解けて流れた。見られてはいけない。そう言われ続けていた里香子は慌ててフードを被り直そうとするが、腕を掴んでいた彼がそれを押し止める。

「お前、その髪。本物か？」

驚愕に彩られた声。先程までの雑な扱いとは違い、そつと髪に触れた腕に戸惑いを感じ、思わず顔を上げる。

そして里香子が目にしたのは、まるで紫水晶のように透明で美しい瞳だった。その瞳に魅入られ、里香子は抵抗することも忘れてしまう。

### 1 - 3 紫水晶の瞳

(……綺麗)

宝石のような煌めきに気を取られて、その時はどうして彼がそんなに驚いているのか、と疑問に思うこともなかった。

「その黒髪に肌の色。この国の女じゃないな。フォスターの血を引いているのか？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる。

フォスターって？ と聞き返すと、彼はほんの少し、その宝石のような瞳を細めた。

「その髪と肌をしていながら、フォスターを知らない？ この村で生まれ育ったのか？」

「……私は」

何と答えたらいいのだろう。里香子は首を傾げる。さすがに初対面の男、しかも盗賊の頭らしき男にすべてを正直に話すのは躊躇われた。

「話したくなければそれでいい」

その里香子の戸惑いを彼はどう解釈したのだろうか。掴んでいた里香子の腕を、解放した。

「何処で生まれたのだとしても、その髪を持つ以上、お前は同胞だ。危害を加えたりはしない」

同胞。そう告げた彼の声の優しい響きと穏やかな視線に驚いた。

「だがこの国の人間にとって、黒髪を持つ者は忌むべき者。どういった経路でこの村に住んでいるのかはわからないが、このままだとお前も、匿っている者も危険だ」

彼は手を差し伸べた。その時になって初めて、里香子は瞳以外の彼の姿を見る。

里香子よりも頭ひとつ分くらい、高い背。肩まで伸びた黒髪。その漆黒の髪が無造作にかかっている右の肩には、不思議な紋様が刻

まれている。細身で着ている物も質素だが、腰に下げている剣は見事な細工をしていた。そしてそれが飾りではないことは、彼の精悍な雰囲気を見ればわかる。

「俺たちと一緒に来い。共に生きる同胞は、俺が必ず守る」

力強い言葉だった。

きつとその手を取れば、言葉通りに彼は必ず守ってくれるのだろう。

「でも」

里香子は荒らされた村に視線を走らせる。

「あなたたちは盗賊じゃないの？ 私、犯罪者にはなれないわ」

「……生きる為だ」

犯罪者という言葉に彼が怒り出すかもしれないと、言ってしまった後に里香子は後悔して身を固くした。

けれども返ってきたのは、深い悲しみに満ちた声だった。

「フォスターとは、今はもう存在しない国の名前だ。戦争に敗れて国を亡くし、住む場所も失った。迫害され、作物も実らない土地に追いやられ、フォスターだというだけで仕事にも就けない。山にはまだ幼い子どもたちがいる。俺は、どんな手段を使ってもあの子たちを守らなければならないんだ」

見れば、男たちはみんな痩せていてあまり健康的には見えなかった。

「ごめん、なさい」

祈るように両手を組み合わせ、里香子は俯く。

生きる為。

その重い言葉に、それしか告げることが出来なかった。

犯罪が良いことだとは思えない。

だが彼のその言葉には、何をしてでも子どもたちを守るという深い覚悟が見て取れたから、もうそれ以上何も言えなくて。

それに何処から来たかもわからない自分を受け入れてくれた、この村に迷惑は掛けられない。



里香子はそつと差し出されている彼の手を握った。

「行くぞ」

彼は里香子の手を握り締めたまま、周囲の男たちに声を掛ける。彼らはその指示で一斉に走り出した。里香子も手を引かれたままそれに続く。

（おじいちゃん、おばあちゃん。リコーン届けられなくてごめんなさい）

少しずつ遠ざかる村。森に近い離れの家。きっともう二度と戻ることはないだろう。

あの二人に助けられなければ、どうやって生きていけばいいかわからなかった。もしかしたら不吉な黒髪だということでも誰にも助けて貰えず、もう野垂れ死にしていたかもしれない。命の恩人と、こんなに簡単に別れてしまつて良いのだろうか、と思う。

けれど、自分の存在のせいで迷惑をかけてしまう可能性があるのだと聞かされてしまえば、もう居座ることは出来なかった。

離れてしまう。感謝を告げることも出来ずに。でも、忘れない。

この見知らぬ異世界に飛ばされても何とか生きてこれたのは、この村の人が自分を受け入れてくれたお陰なのだから。

荷物を持った男たちは、離れた場所に待機していた幌馬車に次々と乗り込んでいく。手を取られたまま、里香子もそれに乗り込んだ。馬車の中はかなり広いが、それでも多くの男たちと荷物が乗り込んだせいで、隣同士密着してしまつほど狭い。

（……うう）

しかも馬車が動き出すと、周囲の男たちの視線がいつせいに集まつてきた。その気まずさに、里香子は俯く。

「お前、名前は？」

すぐ隣にいるのは、里香子を連れて来た紫色の瞳をした男。馬車の揺れる度に触れ合う腕を気にしながら、尋ねられるまま名前を口にした。

「里香子、か。珍しい名前だな。いくつだ？」

「二十歳よ」

そう答えると、周囲にざわめきが広がった。里香子は溜息を付く。年齢を告げて驚かれるのは初めてではない。

染めていない真っ直ぐな黒髪。痩せていて、女性らしいボリユームにやや欠ける。大きな瞳は黒目がちで、高校生に間違えられることも多かった。

（な、何よ。どうせ子どもっぽい外見だけださ……）

確かにコンビニでお酒買おうとして、身分証の提示を求められたこともあった。年齢を確認した店員の申し訳なさそうな態度は、かえって居心地を悪くする。

「二十歳、だと？」

だがその言葉に目を見開き、そう呟いた彼の驚きは普通ではない気がした。

「わ、私が二十歳だと何か問題があるの？」

おそるおそる、そう尋ねて見る。だが返答はない。思案している彼の表情からは僅かに苦悶すら感じられる。良くない事を聞いてしまった。そんな罪悪感が胸に芽生え、里香子は返事を諦めて口を閉ざした。

## 1 - 4 隠れ村

「おい、シユカ」

だがその気まずい沈黙を打ち壊すような、大きな声が馬車の中に響く。

「不安にさせてどうするんだ。それじゃなくても無理矢理拉致してきたようなものなんだ」

紫の瞳をしている青年の隣に座っていた大柄な男が、里香子を見て安心させるように笑顔を向けた。

「ちよつと特異な環境だね。成人している女性は、もうひとりもないと思っていたから驚いたただけだ。君は何も悪くない。俺たちの家に着いたら、ちゃんと全部説明するよ。俺たちの状況も、そして何故、連れてこられたのかも。だから心配しなくていい」

短く刈った黒髪に、日焼けした浅黒い肌。背は、彼がシユカと呼んだ紫の瞳の青年と同じくらいだが、身体の厚みはその倍もあるだろう。逞しい身体をしているが、その茶色の瞳に宿る光と口調はとても優しくかった。

「はい。ありがとうございます」

その優しさに安堵して、ようやく笑みを浮かべることが出来た。不安が少しだけ解消する。

「俺はルーパリー。里香子って呼んでもいいか？」

「もちろん」

気さくな彼の態度に好感を覚えながらも、視線はまだ険しい顔をして黙り込んでいるシユカへと向かってしまう。何がそんなに彼を悩ませているのだろう。

「きゃっ」

考え事をしてしまったせいか。馬車ががくんと揺れ、バランスを崩す。

「危ない。ここからはちよつと道が悪くなるから、気をつけて」

肩を支えてくれたのはルーパリーだった。

「うん……」

揺れて危ないから、と肩に置かれたままの手がとても気になった。男性とこんなに近くで触れ合ったことなど一度もなかったから。

けれど彼に他意はない。揺れると危ないからと、親切から言ってくれているのだから。それに揺れはだんだん酷くなってきた。

「ところで」

肩を抱いたまま、ルーパリーは話し掛けてきた。

「里香子は料理とか裁縫とか、得意か？」

「うん。一人暮らしが長かったからね。料理ならちよつと自信があるよ」

そう答えると、周りの男達から歓声が上がった。

今まで無関心だった彼らの反応に少し驚きながらも、少し疎外感が和らいだ気がして安堵する。

「そいつは随分と助かる。女は子供ばかりでな。大所帯だから大変だろうけど、頼むよ」

それからどのくらい走っていただろう。馬車はゆっくりと速度を落とし、やがて止まった。

「ここからは歩いて行く。少し険しい山道だから、気をつけて」

ルーパリーはそう言つと、辺りに散乱した荷物を集めている。見ると、周囲の男たちも担げるだけの荷物を背負っていた。里香子も、傍にあった袋をひとつ手に取った。

男たちは次々に荷台から降りていく。時計がないので正確な時間はわからないが、村を出てから一時間程経っただろうか。ルーパリーに手を取られて馬車の外に出る。少し冷たい空気が里香子の黒い髪を靡かせた。

馬車が止まったのは、深い森の中だった。生い茂った木々は太陽の光を遮り、まるで夕方のように薄暗い。

（こ、ここを登っていくの……？）

目の前にあるのは、山道というよりはほとんど崖のような斜面。里香子の身体ほどもある岩がごろごろと転がっている。それに山頂まで届こうかという距離だ。

呆然と上を見上げていると、背後から声を掛けられた。

「大丈夫か？ 荷物は俺が持つよ」

ひとりの男が、里香子が持っていた荷物を引き受けてくれる。

「あ、ありがとう」

「俺の後ろから来るといいよ」

また別の男が、歩きやすい道を教えてくれる。

「抱いていってやろうか？ 里香子は軽そうだ」

「いや、手を貸そう。掴まれよ」

「え、ええ。あ、ありがとう……」

たくさん男たちが親切にしてくれた。今までこんなに異性に親切にされたこと経験はまったくない。嬉しさよりも戸惑いを感じて、里香子は助けを求めるようにルーパリーを見上げた。

「お前たち、ちゃんと自分の荷物を持て。働かないヤツは追い出すぞ！ 里香子は、俺と行こう」

彼の一喝で、男たちは散っていった。彼はこの中でもリーダー格らしい。

「すまないな、里香子。女は子どもばかりって言っただろう？

若い女が珍しいんだよ」

「はあ……」

それが本当ならば、若い女は何処へ消えたのだろう。女がいなければ子供もいない。それに男ばかりがあんなに大勢いる筈がない。けれどそれを聞くのは躊躇われた。ほんの少しの会話で、もう彼らの生活が列して幸福なものではないと知ってしまったから。彼らの話を聞いても、どうしようもない悲しみに、胸を掻きむしられるだけだろう。

それにどんな事情があつたとしても、もうあの村には戻れない。彼らと生きるしかない、里香子はシュカの手を取ったときからも

う覚悟を決めていた。

(せめて、喜んで貰えるように美味しいご飯を作ろう……)

## 1 - 5 若き君主の苦悩

三年前に即位したばかりの若き王、カインサー・ロド・セリドリは、目の前の貴族の報告に、眉をひそめた。短い金色の髪。肌の色は白いが、軟弱な感じはしない。若さを感じさせない威厳を身に纏っているからだ。顔形も整っていて、まるで血の通っていない彫刻のような冷たい印象を受ける。蒼い瞳は、目の前に跪く男に向けていた。

謁見の間である。

二十人くらいは入れるだろう大きさの、広い部屋だった。

床は白く美しく磨き上げられ、真ん中には豪華な刺繍が施された緋色の絨毯が敷いてある。

部屋の四隅に建てられた柱には、見事な彫刻。

窓がないのはきつと警護の関係だろう。そして入り口には、五人の衛兵が微動だにせず立っている。最奥には重々しい緋色のカーテンが下がり、その前には金で作られた豪奢な椅子。

カインサーは、その玉座に座っていた。

「……見つけられなかったというのか。我が国最高の魔導師が、間違はなく召還に成功したと言っているのに、それらしき者はいなかったと帰ってきたのか」

口調を荒くして叱咤するが、その貴族はただ形式的に頭を下げるだけだ。

（……どうせろくに探さなかったに違いない）

カインサーはそう思ったが、顔色も変えずに彼を下がらせた。

彼は決して愚王ではない。むしろ国内を良くしようと考え、色々と改革を進めていた。だがそれが変化を嫌う古くからの貴族たちには受け入れられず、反感を買っていた。王といえど、思うがままには動けない。それがこの国の今の状況だった。

「イドを呼べ」

彼が完全に姿を消した後に、衛兵にそう命じる。

ほどなく、高価なローブを纏った魔導師が王の前に進み出て、頭を垂れた。彼もまた若い。背を覆う銀髪はひとつに束ねられている。顔や背格好は王によく似ていたが、緑色の瞳は彼ほど鋭い光を放ってはいない。少し体調が良くないのか、肩で息をしていた。

カインサーは、手を振って人払いをする。誰もいなくなると銀髪の魔導師はすつと立ち上がった。

「イド。調子はどうだ？　まだ魔力が戻っていないのではないのか？」

先程の貴族には欠片も見せなかった、柔らかい声で気遣う。

「少し大きい魔法を使ったからね。でも、大丈夫だ。すぐに回復する」

イドと呼ばれた魔導師は、親しげに笑みを浮かべるが、その顔色は白い。

「……すまない。お前がそうまでして召還してくれたのに、見つけれなかった」

「いや、俺の力不足だ。転移の魔法さえ成功していればこんなことには……」

孤高の王が、自らの王国の中で心を許せるのはただひとり。

血の繋がりがあり、この国の中でも最強とも言える力を持つ魔導師、イドだけだ。彼がいれば、他に味方など必要なかった。

何よりも力が欲しかった。

自らの利益ばかりを守り、改革を拒絶する貴族たち。

まだ若い王と侮り、国境付近で不審な行動を繰り返す隣国。

彼らを黙らせることの出来る力が、欲しかった。

そんな時に亡き父である前王の隠された日記を見つけたのは、果たして偶然だったのだろうか。そこに記されていた、顔も知らぬ母の遺言。そこには、願ってやまなかった力、すべてを従える力を得る方法が書かれていたのだ。

ひとりの女性を得たからといって、そんな力が本当に手に入るの



だろうか。そんな疑問は、他国が呪術師を使ってまでそれを妨害したという記述を見つけた途端に霧散した。それに亡き母は優れた魔導師であり、予言的中率もかなり高かったと父は書き遺している。相談したのは、もちろんイドひとりにだった。だが彼はすぐに、彼の父が遺したという魔法書を持ってきた。彼はずっと父の遺したその魔法を研究していたのだ。それには、異世界からその運命の女性を捜し出す方法が記されていたのである。

これは本当に偶然なのだろうか。

亡き父が、母が、導いてくれたのではないだろうか。

すぐにカインサーは、イドと二人だけでその計画を実行に移した。そしてその女性を見つけ出し、召還にも無事成功したのである。

だがイドは優れた魔力を持っているが、生来頑健ではない。

命を削る程の大きな魔法に、身体の方が耐えられなかったらしい。その女性をカインサーの元に転移させる前に力尽きてしまったのだ。成功しなかったとはいえ、もう異世界から探し出すのではなく、この国にいる筈の彼女を捜し出すだけ。それはそう難しくないと思っていた。だが。

二人の計画を何処かで聞きつけた貴族の協力という名目の妨害に遭い、未だにその女性を捜し出すことが出来ないのだ。さすがにこれ以上日数が経過してしまうと、探し出すのは困難になってしまうかもしれない。相手は動かぬ物ではなく、生きている人間なのだから。

「ドリカを呼んで、探索させよう。貴族たちでは信用出来ない。お前はしばらく休んで体調を元に戻してくれ。無理をさせてすまなかった」

ドリカは近衛騎士のひとりであり、カインサーが信頼している男だ。王命は絶対、という生真面目な男である。きっと彼ならば徹底的に調べ上げるだろう。

「わかった。ならば少し、休ませて貰う。……カインサー」  
「何だ？」

何故父は、この魔法を実行しなかったのだろう。

あの魔法を実行したその時から、この疑問が頭から離れない。

父の魔力ならば自分よりも確実に成功させたに違いないのだ。それをしなかったのには、何か理由があったのではないか。この召還を実行すると決めた時から感じる、意味のない不安。それを打ち明けるべきかどうか。

「いや。……何でもない」

イドは結局何も言えずに退出した。形にもなっていない想いをどうやって伝えたらいいのだろう。それに、もう魔法は実行された。見つからないだけで、運命の女性は今確実にこの国に存在しているのだ。今更何を言おうというのか。

王の間を出て、長い王宮の廊下を歩く。

磨き上げられた床はまるで鏡のように、その影を映していた。廊下には大きな窓がある。その窓枠は美しい装飾が施されていて、大切な芸術品を飾っている額縁のようだ。ほんの少し開いていた窓からふわりと風が吹き、イドの銀の髪を揺らした。

## 1 - 6 アクシデント

結構体力には自信があるつもりだった。

学生の頃は陸上部だったし、今までだって毎日駅までの道のり一キロを早足で歩いている。

けれど彼らの言う山道というものは、想像以上に困難な道のりだった。

整備された道がないのは想像していたが、獣道のようなものすらない。切り立った斜面。ほとんど崖とも思える道を岩に手を掛けて体を持ち上げて登っていくしかない。

それでも、もうここまで来たらついて行くしかない。里香子は息を切らしながらも必死に登っていた。

「……大丈夫か？」

そんな様子を見て、ルーパリーが手を貸してくれる。

「うん。大丈夫。ちょっと手とか足とか腰とか痛いけど……」

茶色の瞳が心配そうに見ている。周囲の男達も、手を止めて声を掛けてくれた。

「ほんとに大丈夫よ。ありがとう」

そんな彼らに、里香子は礼を言っただけで微笑んだ。本当に彼らはこまめに気遣い、声をかけてくれる。

「……」

感謝を示しながら、背後を振り返った。

最初に里香子をつれてきた張本人であるシュカは、最後尾にいた。背後を気にしながら登っている彼は、手に抜き身の剣を持っている。

剥き出しの刃が陽の光にきらりと反射して、その冷たい光に背筋がぞくりとするのを感じた。あれは、脅しや見せかけだけの武器ではない。彼の手に、その身に馴染んでいる雰囲気。幾度となく、その剣を振るってきたのだろう。

彼の瞳もまた、今は冷徹な光を浮かべている。冷たい紫色の瞳。温かさを感じさせない鉱石のように。

危険な男だ。わかっている。

それなのにどうして、こんなに彼が気になるのだろう。

「里香子、気をつける。足元が」

不意に声を掛けられて、はっと正面を見る。気が緩んでしまった。手が滑ったのだ。踏み止まろうと慌てて足に力を入れる。が、その足元が崩れた。

「きゃああつ」

落ちる。

この世界に来てしまった時のような、ふわりとした浮遊感。

斜面はもう半分くらいまで登ってきていた。岩だらけの斜面を転がり落ちるのは、どれくらい痛いだろう。打ち所が悪ければ、怪我ではすまないかもしれない。

（こっちでも落ちて死ぬなんて、嫌だあ……）

痛みを覚悟して、瞳を固く閉じる。けれどその瞬間はなかなか訪れない。痛みの代わりに温かい腕が、しっかりと里香子の背を支えてくれた。

「あ、あれ？」

誰かが落ちる里香子を抱き止めてくれた。だが、あの急な斜面を転がり落ちようとしていた里香子の勢いはかなりのものだったのだろう。支えきれない。

（や、やっぱり落ちる！）

助けてくれようとした人まで巻き込んで、里香子は転がり落ちていった。

「チッ」

すぐ耳元で、舌打ちの声。

けれどそれだけで、里香子には自分を抱きかかえてくれている人が誰なのかわかってしまった。

（……助けてくれたの？）

疑問はすぐに悲鳴に飲み込まれていく。

こんな大きな岩だらけの斜面を転がり落ちれば、ただではすまない。

里香子を抱えたシユカは体を捻って方向転換をした。

咄嗟の判断だったのだろう。

二人は岩に叩き付けられるのだけは逃れたが、代わりに泥だらけの斜面を滑り落ちていった。

崖崩れの跡なのだろう。あちこちに倒木が倒れ、岩地のような大きさではないが、転がっている石も見える。濡れている土は滑りやすく、踏み止まるうとしてもどんどん滑り落ちていく。恩人の老婦人から借りた、ふわりとした浅黄色のスカートがたちまち泥に塗れる。倒木に捕まろうと手を伸ばすが、里香子の力では落ちるスピードに負けてしまい、手に擦り傷を負うばかりだ。どうしよう、と考える間もなくどんどんと景色が遠のいていく。

「……あ」

ふいに、落下が止まった。

里香子を片手に抱えていたシユカが、上手く倒木に捕まったようだ。

彼は自分と里香子の体重を片手で支え、体勢を整える。里香子を左腕に抱えたまま、倒木と岩の間に身を潜めた。

「大丈夫か？」

庇ってくれていたのだから当然、里香子はしっかりとシユカの腕に抱かれている。

「う、うん。ごめんなさい。私のせいで……」

その状態に、突然恥ずかしさを感じてしまう。事故とはいえ、男の人にこんなにもしっかりと抱かれた事は今まで一度もなかった。けれどこんな不安定な体勢では、身じろぎするのも危険だ。見ると、ここはまだ斜面の中腹。運良く倒木と岩の間に身を置いているだけなのだ。こんなにぬかるんだ泥では、上に登るのも困難だろう。

「助けてくれて、ありがとう……」

「助けるって言うか、お前が俺に向かって落ちてきたんだ」

な、なんてこと。

里香子は今度こそ恥ずかしさに俯く。彼は巻き添えになったのだ。  
「ここから登れるか？」

恥ずかしくてどうしようもなくとも、今は彼から離れる事は出来ない。里香子は斜面を見上げる。

「ごめんなさい。無理かもしれない……」

泥だらけの斜面。手は擦り傷だらけだし、靴もなくなっていた。登ってもまた落ちるだけだろう。

シユカは、上を見上げ、下を見て、それから最後に里香子を見た。その視線。表情は、やはり冷たい。余計な荷物を背負い込んでしまったと思っっているのだろうか。ここに打ち捨てられても仕方ないのかもしれないと、里香子は覚悟をした。迷惑をかけてしまっているのだから。

「少し遠回りになるが、登るより降りた方がよさそうだ。歩けるか？」

けれど里香子の決意とは裏腹に、シユカは捨てていく気はなさそうだ。

## 1 - 7 フォスターの少女

その言葉に安堵して、頷く。優しさや気遣いもない声だったが、何故か安堵感が心に広がる。

そしてそろそろと右足を踏み出し、地面につけた。だが体重をかけようとした瞬間、足首に激痛が走る。

「いたっ……」

捻挫したのだろう。痛みにバランスを崩し、また転がりそうになる。間一髪、シユカが支えてくれた。

「無理なら無理と言え。そんなに転がるのが好きなのか」

「特別好きって訳じゃ……。まあ、あの浮遊感はちよつと癖になりそうだけど」

元の世界に戻れたらバンジージャンプを試してみようか。ふとそんな考えが浮かぶ。けれど、帰り道なんてあるのだろうか。

まだそんなに日数は経っていない。それなのにもう、あの世界はこんなにも遠い。まるで忘れかけた夢のようだ。

「お前……。変なヤツだな」

里香子の返答に、彼は呆れたように笑った。ほんの少しだけ、彼の冷たい印象が薄れる。もしかしたらそんなに年が離れていないのかもしれない。

いくつなのだろう。里香子は、気付かれないようにそつと彼を見上げた。冷たく無機質な、だからこそ宝石のような透き通った瞳。けれどこの人が、自分を連れてきたのだ。必ず守る。そう言って。そう、守ると言ってくれたのだ。ここに捨てていくなど、彼は思ってもいないに違いない。あの真摯な瞳は、彼の言葉が決して嘘やごまかしなどではないと語っていたではないか。

ふと、空を見上げた。なんだか暗くなってきたようだ。ぽつり、と天から水が滴る。

「あ、雨が……」

さつきまで、目が痛くなる程の青い空だった。けれど、山の天気は変わりやすいというのは本当のようだ。急に温度も低くなった。里香子は、寒さを感じて自分の肩を両腕で抱く。背中に触れている、彼の体温がとても温かった。

その温もりに縋るように頬を寄せた。寒い。それに、頭がぼうつとして急に目の前が暗くなったような気がする。雨の音だけが、消えることなく響いていた。

（寒い。寒いけど、熱い……）

突然、訳のわからない異世界へと連れてこられて。慣れない環境で、ひとりで必死に頑張っていた。それに加えて、今日は色々な事がありすぎて。里香子はすっかり疲れ切っていたのだ。

「おい、大丈夫か？ ……里香子？」

彼の声が聞こえてくる。

（だめ。また迷惑をかけちゃう……）

そう思っても、途切れていく意識を繋ぎ止める事は出来なかった。

「…あれ？」

どのくらい経ったのだろう。

里香子には、瞳を閉じたのはほんの数瞬にしか思えなかった。けれど、目を開けたらすっかり周囲は暗くなっていた。

（ここ、何処？）

ふわりと体を包む暖かい空気。見上げると、木造りの天井がある。建物の中らしい。

「あ、目が覚めたのね」

軽やかな声。振り返ると、ひとりの少女の満面の笑みが目に入った。

（黒い髪……）

長い黒髪をひとつに編み上げ、シンプルな白い服を着たその少女



は、里香子に近寄ってきた。少し体を起こし、周囲を見回す。里香子が住んでいたあのログハウスのように、何もない部屋。その窓際に置かれた固い木のベッドの上に寝かされていたらしい。両手の擦り傷と足首にも治療が施されている。

「あの、ここは？」

寝かされていたベッドの前に、看病用の椅子が置いてある。黒髪の少女はにこにこ人懐っこい笑みを浮かべながら、そこに座った。「ここはフォスターの隠れ村よ。だから大丈夫。もう心配ないからね」

里香子を安心させようとしたのだろう。大丈夫、ともう一度繰り返し、少女は微笑む。とても可愛らしい少女だ。痩せていて小柄だが、里香子とそう年が違わないように見える。

（年は高校生くらいかな？ 若い子、いるじゃないの）  
もっと小さい子どもばかりだと思っていた。

「私、どうやってここに来たの？」

斜面の下で意識を失った筈だった、と思い出す。

「お兄ちゃんが連れて来たの。怪我をして、熱もあったから心配だったけど、下がったみたいで安心したわ。……ここ、あんまり薬がないから」

お兄ちゃん。それが言葉通りだとすれば、この少女はシュカの妹だ。よく見ると、彼のように透き通った色ではないが、少女も紫っぽい色の瞳をしている。

「あ、自己紹介もしてなかったね。私はミリー。フォスター族のリーダー、シュカの妹よ。よろしくね」

ミリーと名乗った少女は、親しげに笑みを浮かべた。

「こちらこそ。私は里香子。手当してくれたのよね。ありがとう」  
「ううん。あの岩場から落ちたんでしょ？ 大変だったね。ルーパリーが真っ青な顔をして駆け込んできたから驚いたわ」

ルーパリー。確かあの茶色の瞳をした大男だ。山道でも何かと気遣ってくれていた。後でお礼を言った方がいいだろう。

「……若い女の子がいなくて聞いたんだけど、ちゃんといるのね」  
多分年下だと思うが、気の合いそうな可愛らしい子がいた事に安堵した。けれど、ミリーは寂しそうに笑う。

「……他には誰もいないのよ。同世代の子はみんな、殺されてしまった。私ひとりだけなの」

「……」

殺された。なんとなく想像はしていたものの、そうはっきり聞くとやはり衝撃的だった。

「だから、あなたが来てくれてとっても嬉しい。ここに住むんでしよう?」

憂い顔になった里香子を慰めるかのように、明るい声だった。

「ええ。もし、いいなら」

「もちろんよ!」

ミリーは嬉しさのあまり立ち上がった。これほど歓迎されるとは思ってもみなかった里香子も、つられて笑みを浮かべる。

「ここがあなたの部屋になるわ。あとでルーパリーに、扉に鍵をつけて貰うといいかもしれない。私は大丈夫だけど、ここはほとんど男ばかりだから。もちろん、乱暴な人はいないよ。でもその方が安心でしょう?」

それから何色が好きかとか、服のサイズ、そして好きな花など、ミリーは無邪気に尋ねてくる。こんな風に年の近い女の子と色々と話したのは本当に久しぶりだった。思いがけず、楽しいひととき部屋がすっかり暗くなり、ランプに火を点した後に、ミリーは名残惜しそうに立ち上がった。

「……そろそろ夕飯の支度をしなきゃ。ごめんなさい。あんまり楽しくて、つい長居しちゃった」

「私も手伝うよ」

そう申し出たが、怪我をしているから休んでいてと言われ、それに甘える事にした。確かに立つのはまだ少し無理かもしれない。

「今日は里香子さんが来てくれた日だから、頑張って作るね」

そう言って笑顔で部屋を出て行ったミリーだったが。

数十分後。里香子は料理が得意だと言った時の、彼らの歓声の意味を知るのだった。

姿はあんなに可愛らしく、手料理が得意そうに見えたミリーだったが、出てきた料理は豪快そのものだった。

魚の丸焼き。焼き魚ではない。丸焼きだ。茹でた野菜と肉。本当に茹でただけ。しかもかなりの大きさ。スープは少し塩辛い。パンは、固くて顎の運動に適しているだろう。

だが、それでも男たちは文句も言わず、黙々と食べている。

里香子は、ここに来る前に迎えに来てくれたルーパリーに頼んで、建物の中を一周して貰った。

深い森の中だった。

道もないような場所に、大きな木の間に隠れるようにして二階建ての建物がある。建物はそんなに小さくはない。けれど三十人程いるフォスターが全員住んでいるから、それなりの大きさはある。里香子は学生の頃、林間学校で行った自然の家を思い出した。古い木造の建物で、隙間風が入り、床はぎしぎしと鳴っていた。そんな感じの建物だ。

食事は一階の広めの部屋で、全員で食べるようだ。けれど、これだけの男達に対して少し量が少ないように感じる。

(……こんな場所だもんね)

自分達で充分に食糧を調達出来るのなら、きっと盗んだりはいだろう。その少ない食事を、自分にも分けて貰える事に感謝しなければ、と石のように固いパンを手についた所で、ふと気が付く。彼がいない。

意識を手放した自分を、ここまで連れてきてくれたのも彼だろう。女ひとりの体重とはいえ、あの悪路だ。容易ではなかっただろう。

(お礼を言わなきゃ。あと、お詫びも)

そう思い、目の前でにこにこ茹でた野菜を食べているミリーに尋ねる。

「ミリーさん。お兄さんは？」

「……お兄ちゃんは見廻りをしてると思う」

その時のミリーの瞳が少し翳っていたのに、里香子は気付かなかった。それなら仕方がない、と頷いた。

それから、里香子が動けるようになるまでは五日くらいかった。

あの村で過ごしていた頃は、毎日早朝に起きて畑仕事をして、夜遅くまで村の人たちの手伝いをしていた。それなのにここに来てからは、毎日寝てばかり。歩くと治りが遅くなる、と言って、食事に行くにもルーパリーが抱きかかえてくれる。寝ていては暇だろう、とミリイーも針仕事を持ってきて話し相手になってくれるし、男たちも暇を見つけては訪ねて来てくれた。だからこの部屋は、お見舞いで貰った花だらけ。花といっても、店で売っているような豪華で美しい花ではない。道端に生えているような、小さな花だ。

（でも、嬉しいな……）

小さな可愛い花は、素朴で愛らしい。部屋中に咲き乱れている花を見ると、心が安らいだ。

しかも部屋の窓の下には、小さな花畑がある。貰った花が枯れてしまふと嘆いていた里香子の為に、ルーパリーが植えてくれたのだ。白い可憐な花。

（こんなに私、大事にされていいのかな？）

両親が生きていた時でさえ、こんなにも大切に守られていたことはなかった。みんなとても優しく、部屋に鍵などいらなかったと思うくらいだ。

けれどひとりだけ、一度も里香子を訪れない者がいた。  
シュカだ。

最初はここにいないのかと思った。食事の時も会わない。だが夕方頃になると、外を歩く彼を見かける時がある。自分は彼に歓迎されていないのだろうか、とも考えたが、ここに連れて来たのは彼なのだ。

（別に会いに来て欲しい訳じゃないけど。ただ、これだけみんな来てくれるのにいないと気になる、って言うか……）

歓迎してない訳ではないのだろう。けれど、気に掛けてくれるでもない。彼にとって自分は、どうでもいい存在なのだろうか。そう思うととても悲しくなる。たくさんの綺麗な花を見ても、癒されない心の影のようだ。

自分の心を偽っても仕方がない。

里香子は溜息をつく。彼に会いたいのだ。そして気に掛けて欲しいのだ。

大切にしてくれる彼らの中の誰でもなく、シユカに。

どうしてこんな感情が沸き起こるのだろう。恋ならばきっと、華やかで胸が躍るようなもの。心に刺さった棘のような。こんな苦しい感情が恋である筈がない。そう何度も胸の内で繰り返した。それに自分は彼のことをまだ何も知らない。子供が自分に歓心のない者の気を引こうとしているような、そんな感情に過ぎないのかもしれない、と。

## 1 - 9 悲哀

今日も針仕事を持って部屋を訪れてきたミリィは、色々な話をしてくれた。

この山での暮らし。そしてフォスターのこと。彼女の口から語られたのは、悲しい歴史だった。

「戦争があつたのは随分昔のことみたい。負けてこの国に取り込まれてからも、私たちはそれなりに伝統を守って暮らしていた。でも、今から五年くらい前からかな。この辺の領主が変わつたのは。新しい領主は魔法が使える人みたいでね。急に私たちへの弾圧が強くなつてきて。魔法も使えない蛮族。そう呼ばれて、差別されているみたい」

この世界には、魔法という力があるらしい。

それは物語の中でそうだったように、超能力のような強い力。

「私たちには、魔法の力を持っている人はいないの。それだけじゃなく、魔法に抵抗力もない。だから大昔の戦争でも、勝てる筈がなかったのよ」

まるでおとぎ話のように、美しい世界だと思っていた。

けれどこの世界にも、苦しみや悲しみ、痛みは当たり前のように存在していて。同胞は必ず守ると、そう強く言っていたシユカの決意に満ちた顔を思い出す。もうこれ以上、仲間を失いたくないという、彼の思いがそこに込められていたのだ。

「私たちも五年前までは、こんな山の中じゃなくて里の方に住んでいたのよ。でも、あの日。男たちが獵に出ている間に、女性たちは畑仕事をしていた。そこに、あの男が。領主となった男がやってきて。……魔法で、みんなを」

針仕事をしていたミリィの手が止まる。

「ごめんなさい」

里香子は思わず彼女の背を抱いていた。

「つらい話をさせちゃったね……」

「うっん」

けれど淡い紫っぱい瞳に涙を溜めたまま、ミリィーは首を振る。

「私たちがどうしてこんな山奥で暮らしているか、知っていて欲しいから。私はその日、小さい子どももの面倒を見る為に家に残っていたから、私と小さい女の子たちは無事だったの。けど子どももの母親と、まだ未婚の若い女性。母親の手伝いをしていた男の子どもたちは全員、殺されたわ」

帰ってきてその惨事に憤り、抗議の為か、それとも復讐の為だったのだろうか。領主の元へ向かった壮年の男たちもそのまま帰らなかった。残されたのは、青年たちとミリィー、そして幼い子どもたちだけ。

「私たちは深い山の中に隠れて住むことにしたの。ここはね、ちょっとした探知魔法除けが設置されているから安全なのよ。冬は厳しいし、食糧の確保も難しいけれど。それでも、人がいる所よりは安心だわ」

盗賊行為をしているのは、生きる為だと言っていた。

黒髪をしている自分も、そして匿っている者も危険かもしれないと。

彼が言っていたのはすべて、悲しいほど真実だったのだ。

もう何も言えずに、里香子は俯いた。

そして、数日後。

ようやく足の痛みがなくなって起きられるようになると、里香子は自分で歩き、下の料理部屋へと向かった。

親切にしてくれたみんなの為に、美味しい料理を作ろう。そう思っ

「パンはサンドイッチみたいにしようかな。あとはリコーンのスープと、鶏肉もあったかな？」

食糧は限られている。なるべく材料がかからないように。それで



もポリウムもある料理を。

（節約生活とか、ああいう番組大好きだったのよね）

大人数の食事を作るのは初めてだったが、とてもやりがいがありそう。

狭い調理場は物が散乱していて、片付けるだけで結構時間がかかってしまった。それらを綺麗に磨き、使いやすいように分類して並べる。手間はかかったが、綺麗好きの里香子にとっては結構楽しい作業だった。鼻歌を歌いながら小麦粉を練っていると、こんこん、と扉が控えめに叩かれた。

（ん？ 誰だろう？）

手が離せなかったから、はい、と返事だけした。

「里香子。大丈夫か？ 何か手伝う事があれば……」

そう言つて、狭い調理室に窮屈そうに姿を見せたのは、ルーパリーだった。

「……綺麗になったなあ」

周囲を見渡し、感嘆の声をあげる。里香子は、得意そうに笑つて見せた。

彼とはこの数日ですっかり打ち解けていた。親切で話しやすい彼は、とても頼りがいがある。けれどあまりにも真っ直ぐに示される好意には、少し戸惑いもあった。それにその好意は、自分が里香子だからではなく、数少ない異性だからなのだろう。どうしてもそう考えてしまう。

「じゃあ悪いけど井戸から水を汲んできてくれる？」

「ああ、もちろんだ」

彼は快く引き受けると、桶を持って外へと出て行った。

けれどその後ろ姿を見送りながら、里香子が考えたのはシユカのことだった。

結局、ここに着いてから一度も彼と言葉を交わしていない。会ってもいないかもしれない。毎日、二階から外を歩く彼を見送るだけだった。

「お姉ちゃん」

背後から可愛らしい声がした。子供達だ。みんなまだ七歳から十二歳で、すべて女の子だった。

「お手伝い、するの」

「私にも何か教えて」

「お姉ちゃん、私がお皿洗うね」

自然に顔が綻ぶ。みんな素直で可愛らしいが、ここにいる子供達はすべて母親がいない。ミリーはあの若さで、母親役を頑張って続けてきたのだろう。でももう、最年長の女性は自分なのだ。しっかりとこの子供達を守らなければならない。

「みんなありがとう。無理しなくていいから、少しずつ頑張ろうね」  
朝食もとても好評だった。美味しい、と何度も繰り返してそう言ってくれた。

（でもやっぱり、量が足りないのよね……）

育ち盛りの子供たち、働き盛りの男たちだ。もっとお腹いっぱい、食べさせてあげたい。それに冬になれば、食糧事情はもっと厳しくなるだろう。今のうちに対策をしておかなければならない。

突然訪れた、事情をまったく知らない自分を優しく受け入れてくれた。だから今度は、自分が恩返しをしたい。

「里香子さん、本当に料理が上手なのね。私にも教えて欲しいな」  
小さい子どもに自分の分のパンを分け与えていたミリーは、リコーンのスープを飲んで感嘆した様子だった。きっと彼女は誰にも料理を教わることが出来なかったに違いない。裁縫をしているのを見る限り、器用そうだしきつとすぐに上達するだろう。

「私にも色々教えて欲しいな。この国のこととか、フォスターの伝統を」

厳しい状況の中、必死に助け合って生きている人たち。この世界で、この場所で生きよう。里香子はもう決意していた。

「うん。もちろん」

ミリーは嬉しそうに微笑んだ。

シユカは、何処かに出かけていたらしい。

みんなの食事が終わり、ミリーとふたりで後片付けをしていた時によやく帰ってきた。顔を合わせるのは、あの時以来だ。

「お、おかえりなさい」

思い切って声をかけると、彼は振り向いた。久しぶりに見つめた、透き通るような紫色の瞳。

「あの、まだお礼を言っていなかったから。ここまで連れてきてくれて、ありがとう。あと、迷惑かけちゃってごめんなさい」

「もう大丈夫なのか？」

彼は手にしていた荷物を、狭い調理台の上に置いた。ころころと荷物が転がり落ちる。林檎のような果物だった。

「あ、リツカの実だ」

それを見たミリーが嬉しそうに駆け寄る。

「リツカの実？」

「うん、そう。甘酸っぱくて美味しいの。子どもたちも大好きなんだ。でも、山の険しい所でしか採れないの」

まるで宝物を手にするかのように、大事そうにその実を拾い集めた。

「みんなで分けるんだぞ」

シユカはそう言つて、そのまま部屋を出ようとしている。まだ返事をしていない。それに、作った料理も食べて貰っていないのに。

「待つて」

思わず、彼の服の裾を掴んでいた。シユカは振り向く。

「どうした？」

他の優しい男達とは違い、近寄りがたい雰囲気、冷たそうな男だ。里香子を無視するような事はしないが、特別関心があるようには見えない。

それなのに、どうしても彼が気になる。もっと話がしたい。

「今日は私がご飯を、作ったの。あの、食事まだだよね？」

「ん……」

彼は何故か、ちらりと妹の方を見た。どうしたのだろう。里香子もミリーに視線を移す。すると。

「大丈夫。里香子さんが、少ない材料ですごい料理を作ってくれたの。みんなお腹いっぱい食べたよ。私もちゃんと食べた。だから、お兄ちゃんも食べて」

その言葉に、里香子は悟った。

他の人たちに比べて、ミリーはとても小食だと思っていた。いつも食事の時にシユカの姿がなかった。そして二人とも、他の人達に比べると細身だと思っていた。すべてに、理由があつたのだ。彼ら兄妹は、自分たちの分の食事も仲間に分け与えていたのだろう。

不意に、涙が溢れた。

なんて優しい、人達なのだろう。

虐げられ、罪を犯し、そして憎しみを背負いながらも、慈しむ心を捨てていない。

人を憎むのは、きつととても辛い。里香子には、そこまで人を憎んだ記憶はなかったけれど。怒りは、憎しみは人をとて消費させ

る。それでもその憎しみを捨てきれなかった時、人は愛を捨てる。優しい心を捨てる。そうすればもう心は消費しないからだ。罪を犯すのは、そうしないと生きていけないからだ。そして大切な家族や仲間を殺されて、人を憎まずに生きていける程、人間は清らかではない。

けれど、彼等は愛を捨ててはいない。手を取り合い、支え合って生きている。

涙を拭って、里香子は微笑んだ。

「私、料理は本当に得意なのよ。それにね、節約にも結構自信あるんだ。だから、頑張るよ。任せてね」

彼は少し驚いた様子だった。ミリーがその耳元に何か囁く。それは、里香子にも聞こえた。本当に、上手なの。すごく美味しいのよ。彼女はそう言っていた。

「そうか」

その時シユカは、笑みを浮かべた。それは苦笑でも、失笑でもなく。初めて見た、柔らかな優しい笑みだった。

（ああ……）

今度こそはつきりと、里香子は自覚する。

（私は彼が、好きなんだ……）

出逢ってからまだ数日。それに、決して穏便な出逢いではなかった。けれど世の中には、一目で恋に落ちる人もいるくらいなのだ。きっと困難な恋になる。こうして想いを自覚してみても、これくらいなるかまったくわからないくらいだ。周囲にはあんなに優しくしてくれる男性がいるのに、どうして彼なのだろう。そう思ってみても、もう自覚してしまった気持ちは、確かに自分のものなのに、もう自分の自由にはならない。まるで魔法にかけられてしまったかのように、急速に育っていつてしまう。

どうしたらいいかは、まだわからなかった。けれど、ひとつだけ

確かなのは。

（私は、ここで生きていく。フォスターとして。あの子供達を育て、あの人達の世話をして。そして……）

この決意をいつか、彼に伝えることが出来るだろうか。

## 1 - 1 1 魂の宿る場所

彼の為に食事を用意して、そしてミリーと一緒に子どもたちの所へ行き、リツカの実を切り分けて食べた。林檎のような歯触りと甘酸っぱさ。お菓子が作れるかもしれない。子供達はきっと、甘い物も欲しいに違いない。

（明日、ミリーと一緒に作ってみよう）

きつと試行錯誤の日々になる。けれど恐れはなかった。好きな人と一緒に暮らすことが出来るのだから。

「……」

シユカはひとり、調理室に残っていた。里香子とミリーは、ふたり揃って子供たちの所へ行ってしまった。目の前には、里香子が用意してくれた食事が置いてある。

柔らかなパン。そして、温かいスープ。鶏肉を香草で焼いたもの。これほどきちんとした食事は、どのくらい久しぶりだろう。確かに妹のミリーは料理が得意ではなかった。けれど、仕方ない。他の誰が作ってもきつと同じなのだ。母親に覚えなかったのだから。

けれど里香子の料理はとても美味しくて、そして優しい味だった。きつと愛情のこもった手作りの食事を食べて育ってきたのだろう。

見た目はまったくフォスター族と変わりのない女性。彼女は何処で生まれ、どうやって育ち、そうしてこの土地に流れ着いたのだろう。保護する者がひとり増えただけ。そう思っていたシユカだったが、里香子に対する興味が沸いてきた。

（あの涙……）

何故彼女は泣いたのだろうか。最初は自分達に同情したのだろうか、と思った。

だがきつとそうではない。あの涙は、そんな安っぽいものではなかった。もっと透明で、とても綺麗なものだった。

暖かい陽差しが窓から入り込んでくる。

窓から見える山の風景は、少しずつその色を変えようとしていた。金色に染まっていく世界。向こうの世界ならば、もう紅葉の時期だろう。今はまだ、朝晩少し冷えるだけだ。でも冬は確実に近付いている。食糧の備蓄を、急がなければならぬだろう。

（この辺って雪、かなり降りそうだよねえ。寒さ対策もちゃんしないと……）

調理室の隣にある食堂で、里香子はミリーと六人の少女たちと一緒にリツカの実の皮を剥いていた。

「半分はジャムにしましょう。パンにつけて食べるととても美味しいのよ」

器用な手つきでくると皮を剥く彼女の隣で、悪戦苦闘している少女たち。里香子は少女たちが手を切らないように気をつけながら、どんどん作業を進めていく。

「ジャム？」

「うん。甘くてとても美味しいの。きっと大好きになるわ」

そして今日の授業は、ジャム作りだけではない。皮を剥きながら、ミリーにフォスター族のことを色々と聞いていた。

「この入れ墨はみんなにあるけど、場所はそれぞれ違うの」

ミリーの入れ墨は、右腕の甲にあった。薦のような紋様で、とても美しい。少女達にもそれぞれ足首にだったり、頬にある者もいる。

「場所は誰が決めるの？」

「フォスターの巫女が産まれた子供を見て決めるの。魂の宿る場所よ。そして同じ場所に魂が宿る者同士で結婚する。それがフォスター族の掟」

「同じ場所に……」

もし好きになった人が違う場所に入れ墨があった時は、どんなに思ってもその恋は成就しないのだろうか。自由に恋愛することが出



来た国で生まれた里香子としては、それはとてもつらいような気がする。

「ちなみにみんなもう、結婚する人は決まっているのよ。女の子は、私を含めて七人だけだから、身内同士で争いにならないようにちゃんと決めたの」

けれどそう告げるミリイーは、つらそうでも寂しそうでもなかった。ただの事実を告げるような、何でもない口調。

（こんなに小さい子が、もう結婚相手が決まっているっていうの？）少女たちを見つめる。

一族の未来を担う者として、大切に大切にされている彼女たち。結婚するのはまだまだ先とはいえ、もう将来が決まっていることに不満はないのだろうか。

だが、彼女達は嬉しそうに自分の相手の名前を、里香子に教えてくれた。

「二十歳にならないと結婚は出来ないし、それまで気持ちが変われば解消も出来る。決定権は女の子にあるからね。私もあと三年あるから、今の人とそのまま結婚するかはわからないわ」

ミリイーはそんな事まで言った。

（な、なるほど……。決定権が女の子にあるなら、選び放題だしねえ）

しかし七歳の子が二十歳になる頃には、男たちはいくつになっっているのだろうか。

呑気にそんな事を考えていた里香子は、少女たちから告げられた名前にシユカの名がなかった事に気付く。彼はフォスター族のリーダーだ。本当に、彼にはいないのだろうか。

「里香子さんは、いくつ？」

不器用な手つきでリツカの実の皮を剥きながら、ミリイーは尋ねる。彼女は本当に話し好きだ。人懐こくて、明るくて、とても可愛いらしい。

「二十歳よ」

「じゃあ結婚出来る年だね。里香子さんは入れ墨がないから誰とでも結婚出来るかもしれないね。うーん、争奪戦が起きそうよねえ」

「お姉ちゃん、入れ墨ないの？」

「私にはないの。私はこれから遠く離れた場所で生まれたから」

ひとりひとり、少女たちに視線を移しながら里香子は答えた。確かにシユカと同じ右肩に入れ墨のある少女はいないようだ。

「でもお姉ちゃんもフォスターなんだよね？　だって同じだもん」  
そうだね、と里香子は笑った。

元の世界への執着がほとんどないことに、自分自身でも驚いている。けれど祖父母も父母もすでに亡く、兄妹もいない。学生時代の友人とも年を追うごとに疎遠になっていった。付き合っている彼氏もない。ここで生きていく。そう決心することにも躊躇いはなかった。

（そうかあ……。あの人には、運命の相手がいないんだ……）

素直にそれを喜ぶことが出来た。今はまだ伝えるべきではないけれど、少しでも過酷なこの山の暮らしの手助けをすることが出来たら。

（まず大切なのは食糧よね）

里香子は熱心にジャム造りの講習を続けた。

その日の午後から、男たちは七人を残してすべて外出していった。食糧の調達に行くのだろう。残っていたのは、昨夜少女たちに相手だと教えて貰った男たちだった。相手の決まっている者は危険なことをしないのが、彼等の掟らしい。子孫を絶やさないようにする為なのだろう。

いたたまれない気持ちで、里香子はそれを見送る。

けれどここで過ごした数日間で、彼らも何も思っていない訳ではないとわかってきた。それに人が立ち入らない程の山奥では、作物もろくに育たない。フォスターを雇う者はおらず、例えお金を持っていたとしても売ってくれる店などないという。

（生きる為……）

この国の王は、この現実を知っているのだろうか。里香子が暮らしていた村では、町は治安が悪いと嘆いている者も多かった。こんな状況では良くなる筈がない。

建物の外では、ミリィと二人の少女が大量の洗濯物を干していた。風に乗って、笑い声がこまで聞こえてくる。それを聞いた里香子は、夕飯の支度をしながら優しく微笑む。

（国の事情なんて、私には関係ないしね）

大切なのは、ここに住んでいる仲間たち。

国の事情など関係がなかった。ただ、みんながいつまでも一緒に平穏に暮らせれば、それでいい。

「ああ、一度向こうに帰れたらなあ……」

そうすれば、缶詰やレトルト商品、カップラーメンなどを大量に持ってくるのに。

ふと、考える。

自分はどうしてここに来たのだろうか。何か理由があるのだろうか。

里香子は自分の右肩を見る。ここに、あの入れ墨があればいいのに。そうすれば、彼に会う為にこの世界に来たのだと、言えるのに。「……なんて、ね」

何言っているんだろう。恥ずかしい。里香子は勢いよく包丁を振り下ろす。

恋はどんな女をも乙女にしてしまうのだろうか。だとしたら恐ろしい。

（こ、こんな私が運命とか、やだな。恥ずかしい……）

赤くなった頬で、野菜を切り刻む。

でも、そうだったらいいのに、と思う。

彼に会う為にこの世界に来たんだと、そう言えればいいのに。

トマトスープに、刻んだ野菜を入れて煮込む。固形コンソメだけでもあれば、料理はもつと楽になるに違いない。けれど、シユカはこのスープが好きだった。自然、作る回数が多くなってしまう。

「はやく帰ってこないかな……」

だがその夜が更けても、男たちは帰ってこなかったのである。

セリドリー国王カインサーの命を受けた近衛騎士ドリカは、部下を何名も使って指定された場所を中心に、徹底的に探索をしていた。真面目な男だった。

体格が優れている訳でもなく、剣が格別に得意だという訳でもない。

一応貴族の出身だが、一番数の多い下流貴族。両親も既に他界している。短く刈った茶色の髪に、薄い緑色の瞳。外見も平凡な彼だったが、その真面目さが王に買われ、側近として傍近くに仕えていた。

今回の王命も、かなり困難な人捜しだ。わかるのは、女性だということだけ。名前も年齢も、外見の特徴も何ひとつわからないのだ。

だが、王命は絶対だ。

まるで水の中に落とした宝石を探すかのように、ひとつひとつ、村を廻っていった。だが今日もまた、何の収穫もないだろう。そう思っていた矢先だった。

フォスター族の盗賊と、遭遇したのは。

この辺りで盗賊が出るとの噂は耳にしていた。全員黒髪ของフォスター族らしいとも。荷物や食糧を奪うだけとはいえ、この辺の農村の暮らしも厳しい。確かにこの国では彼らは随分と生きにくいかもしれない。先代の王は民族によって差別することを禁止したが、それは根強く染みついていて、容易には解決しない問題だろう。しかもそれを取り締まるべき貴族たちは、自分たちだけが特別だと思っている差別意識の塊のような存在だ。カインサーもこの状況を見ないふりをしている訳ではないが、そこまですぐ手が回らないというのが実情だった。

彼らの暮らしには同情するが、だか遭遇した場合は別だ。目の前で起こった犯罪を見逃すことは出来ない。

「全員戦闘態勢を取れ。盗賊たちを逃がすな」

鮮やかな緋色のマントを翻して、ドリ力が部下に命じる。こちらは十人にも満たず、それに対して相手側は二十人以上はいるだろう。だが、所詮盗賊だ。訓練された騎士団には適うまい。そう考えた。だが。

盗賊達は騎士の姿を見ると、まるで軍隊であるかのような機敏な動きをした。

退路を確保する者。奪った荷物を運ぶ者。そして、騎士達に挑んでくる者。

まるでこの時を想像して、役割を決めていたかのようなだった。いや、実際そうなのだろう。ただひとりも捕縛出来ず、荷物ひとつ取り返せないまま、彼らは驚くべき素早さで去っていった。

盗賊に遭遇したのにひとりも捕縛出来なかったでは、王宮に帰れない。王に合わせる顔がない。

ドリカは、戸惑う部下達に直ちに追撃を命じた。

## 1 - 13 王国の騎士

「シュカ」

最後尾を走っていたルーパリーが、目の前にいる彼に鋭い声で告げる。

「奴ら、追ってくるぜ」

「……王国の騎士にしてはなかなか根性あるな」

シュカは立ち止まり、続いてルーパリーも立ち止まった。

「お前たちはいつものように、山の反対側から登れ。あの場所に帰るのは夜明け頃だ。夜は動くな。わかってるな？」

ルーパリーの言葉に、男たちは声を出さずに頷いて答える。

「よし、行け」

その言葉が合図だった。男たちはそれぞれ荷物を担いだまま、まったく異なった方向にばらばらに走り出した。誰ひとり、山へと向かっている者はいない。

「魔導師はいたか？」

腰に下げていた長剣をすらりと抜き、シュカはルーパリーを隣の見上げる。その彼が手にしているのは、背中に担いでいた身の丈程もある大剣だ。

「いなかった。俺ひとりでも平気だぞ」

相手は十人。しかも騎士だ。だが二人は顔を見合わせる。いかに騎士といえど、平和に慣れきった彼らに負ける気などしない。

追っていた盗賊たちが分散し、戸惑っていた騎士たちは、突然反転してきた二人に急襲されて次々に倒されてしまう。

力でなぎ倒すルーパリー。そして素早さで相手を翻弄するシュカ。  
「くっ……。何をしている！」

ドリカが叱咤の声を上げて、もう遅かった。目の前の従者が大剣によってなぎ倒され、紫の瞳の男の鋭い剣が間近に迫ってきていた。だがドリカは素早く剣を抜き去ると、シュカの剣を弾き返す。

「ちつ。さすがにあらは強いな」

「緋色のマント。正騎士だ。気をつける」

十対二だったのが、瞬間に一对二になっている。たかが盗賊。ドリ力はそう侮っていた気持ちに完全に捨て去る。彼等は、強い。シュ力を弾き返し、すぐに大剣の襲撃に備えたが、大男はドリ力に攻撃するよりも仲間の傍に駆け寄っていた。

「どうする？ シュ力」

「まともに相手する必要はないな。もう時間は充分に稼いだだろう」

「……了解」

二人で頷き合うと、先程の男たちのように別々の方向へと走り出した。

「……っ」

打ち込んでくると思い身構えていたドリ力は、すぐに反応することが出来なかった。

今からでも追うべきか、否か。躊躇いは一瞬。遅れを取ってしまった以上、地の利がある彼らに追いつけるとは思えず、倒れ伏した仲間たちを放っておくことも出来ない。それに盗賊を追うよりも大切な王命があるのだ、と思い出す。一刻もはやく異世界から来たという女性を見つけないならならぬのだ。

ドリ力は剣を納め、倒れた従者を抱き起こした。彼は完全に気を失っていた。

（……どうするか）

取り敢えず、近くの村の手を借りよう。これから行くはずだった村の方向を見る。ドリ力は近くを通りかかった旅人に礼金を払って言付けを頼み、倒れた者たちを介抱した。

程なくして、数人の村の者が駆け付けた。手を貸して貰い、倒れた騎士達をある老夫婦の所有する森近くの小さな小屋へと運び込む。部屋を開けると、ふわりと甘い匂いが立ちこめる。まるで、若い女性がいるかのようなだった。

（……誰か住んでいたのか？）



荒れた様子はまったくない。殺風景だが、小さな鉢植えに可愛らしい花が咲いていた。

案内してくれた老婦人は、寂しそうな瞳で部屋の中を見渡している。娘か、もしくは孫娘の部屋なのだろうか。

「どうぞこの部屋をお使い下さい。町には連絡しましたので、治癒を専門とした魔導師がすぐに来ると思います」

「……助かる。だが、良いのか？ 大切な部屋なのではないか？」

あまりにも寂しそうな様子に、思わず尋ねた。

「……娘のように思っていた子がいたのですが、もういないのです。ですから、どうぞお使い下さい」

もういない。亡くなったのかもしれない。ドリカはそれ以上聞けずに、礼だけを述べて部屋の中へと入る。そして、この部屋にいたのはどんな女性だったのだろう、と考えた。まだ部屋の中には、優しい霧囲気が残っていた。きっとあの老婦人によく似た、儚く美しい娘だったに違いない。

だがその娘が死んだのではなく、盗賊に拉致されたのだと聞かされたのは、その晩遅くになってからだった。

「たまに一晩くらい帰ってこない事があるよ。だからそんなに心配しなくても大丈夫」

リツカの実を煮詰めながら、ミリィはそう笑った。

窓の外はもう闇に満たされている。夕食の時間になっても彼らは戻らなかった。こんな山道では、もう戻って来られないだろう。

「警備の者に見つかったりすると、ここが知られないようにすぐには帰ってこないの。そう決まっているから。もし何人が帰ってきているのに、戻ってきていない人がいるのなら、それは心配だけど、全員が帰ってきてないなら、明日の朝にはみんな揃って帰ってくるわ」

「そっか……」

心配で何度も外の様子を伺っていた里香子は、ミリーイの説明にようやく椅子に座る。机には、下拵えがまだ終わっていない野菜が置いてある。

「それより明日の朝は大変かも。みんなお腹すいてるだろうしね。いっぱい用意しておかないと」

「そうね。だったらシチューにしちゃいましょう。たくさん作れるし」

心細そうにしていた里香子が、ようやく笑う。

（……よかった）

ミリーイは里香子に気付かれないように、そっと安堵の溜息を漏らす。

里香子が落ち込んでいると、なんだか周りの雰囲気まで暗くなってしまう。

（不思議な人だな……）

彼女に好意を持っている男はたくさんいる。相手のいない男たちは全員、彼女を好きだと言っても過言ではないだろう。でもそれは、単に彼女が誰とでも結婚することが出来る女だからという訳ではない。同性のミリーイでさえ、彼女が傍にいととても安らぐのだ。自分のすべてを許して貰えるような、不思議な安心感があった。

## 1 - 14 未来を思う

野菜を下拵えしている彼女の傍に、小さな子供たちが集まり、手伝おうと手を伸ばす。それを里香子はどんなに忙しくても、邪険にしたりしない。

特に懐いているのはナリンだった。子供たちの中でも最年長のナリンはとても難しい年頃で、ミリーから見ればまだ子供なのに、大人のように振る舞おうとして言うことをあまり聞こうとしない。料理の腕はナリンの方が上だったので尚更だった。

けれど里香子には初対面からとても懐いている。

里香子が大人だからなのだろうか。けれど、自分とそう年も変わらない筈だ。二十歳だと言っていたが、小柄な体はそれよりも幼く見えるのに。

（誰と結婚するのかな……）

二十歳ならばもう結婚をする年頃だ。彼女と結婚したい男はたくさんいる。何人の男が彼女にプロポーズするだろう。そして、誰の申し出を受け入れるのだろう。

誰でもいい。はやく結婚して欲しい。そうすれば、何処で生まれながらも彼女はもう一族の者だ。ずっとここに居てくれる。

（やっぱり、ルーパリーさん、かなあ？）

今の所は彼が一番親しいように感じる。

ルーパリーは兄シユカの親友で、力が強くて頭もいい。兄の代わりを務める事が出来る唯一の男だ。彼が里香子にプロポーズすれば、他の男たちは遠慮するかもしれない。それにいつまでもフリーの女性がいるのはあまりよくない。争いの元となってしまう。

（帰ったら聞いてみようかな。いつプロポーズするのかって）

里香子が切った野菜を下拵えしながら、ミリーは近々あるだろう結婚式に思いを馳せていた。

近年は悲しい事ばかりだった。もう自分たちの未来には死と憎し

みしか、残されていないように感じていた。

けれど、里香子がやってきてから、この隠れ村には、笑い声さえ聞こえるようになってきたのだ。

彼女がずっといてくれるならば、きっとこれからは良い事ばかりある。そんな気さえする。

（美味しいものも食べられるようになったし……）

綺麗に片付けられている調理室に、視線を巡らせる。

少ない材料で美味しい料理を作る里香子は、まるで魔導師のようだった。結婚するまでには、彼女のような料理上手になりたい。

残された時間はあと、三年。

少し前までは、先の事を考えるのがとても嫌だった。

どうなるかわからない不安だけが渦巻き、何も見えない暗闇を手探りで歩くかのような心細さだけ。けれどミリーは今、三年後をとても楽しみにしている事に気が付く。その頃には、里香子にはもう子供だっているかもしれない。結婚する自分に、先輩として色々と助言してくれるかもしれない。

どうか、神様。

ミリーは静かに祈る。

どうかこの幸せを、彼女を、私たちから取り上げないでください、と。

闇が、ゆっくりと遠のいていく。黒から白へと変わっていく空。

夜が明けていく。一番好きな時間帯だった。

澄み切った少し肌寒い空気も、すべての者が眠りにについているかのような、この静寂も。

シユカはひとり、夜が明けるのを見つめていた。どんな事があっても、こうして朝は来る。

「……シユカ」

白くなつていく空をぼんやりと見てみると、背後から声を掛けられる。振り向かなくとも、誰かはすぐにわかった。この場所を知っているのは彼だけだ。

「ルーパリー。どうした？」

薄暗い山道は危険だ。出発は、もう少し辺りが明るくなつてからと決めていた。だから彼がこんなに早起きなのは珍しかった。

「……ちよつと、寝られなくてな」

「お前が？」

例え野外で大雨が降つていようと、平気で寝ている彼の言葉にシユカは笑う。だが、続いた彼の言葉にその笑みはたちまち消え去った。

「昨日、リンザとカイルがちよつと揉めてね。……考えていた」

「……原因は？」

数少ないフォスター族。身内同士の争いは、シユカとルーパリーが一番気を遣い、防ごうとしていた事だ。

「里香子だ。いつかはこうなるかと思つて心配していたが……」

「……」

里香子に入れ墨がないとわかつてからは、シユカもルーパリーが言うようにトラブルになつてしまふかもしれないという予感はある。極端に女性が少ない所に、誰とでも結婚することが出来る妙齡の女性が飛び込んだのだから。

「彼女には選ぶ自由がある。だから強制は出来ないって言つて来たが、俺はみんなの為に彼女の為に、はやく相手を決めた方がいいんじゃないかと思う。それに里香子は二十歳らしい。適齡期だ」

「……」

シユカはまだ、無言だ。

その様子はいつも彼ではないように見えた。ルーパリーは彼の傍に寄り、その隣に座る。いつもの彼ならば即座に決断する。フォスター族の為にはどうしたらいいか。それだけを考へて生きている

ような男だ。

周囲は少しずつ明るくなっている。もうすぐ他の男たちも起きてくるだろう。その前に、これだけは聞いておきたい。ルーパリーは、空を見上げているシユカの横顔に問いかけた。

「里香子のこと、お前はどっ思っている？」

「……」

長い沈黙だった。答えはすぐに返ってこない。だが、何も思っていないのならすぐに返事をしただろう。シユカの戸惑いも理解出来る。仲間は幼い頃から知っている顔ばかりなのだ。そこに今まで会ったことのない成人した女性が、突然現れたのだから。

「ミリーはもう懐いてるようだな。毎日、里香子の後を付いて回っているみたいだ。自分より年上の女性の存在が嬉しくて、そして心強いんだろうな」

沈黙を破るように、ルーパリーは言葉を続ける。

彼もまた彼女の傍にいと、心が安らいだ。

近寄りがたいほどの美人ではなく、むしろ年齢に比べると幼いくらいだが、彼女の傍にいとまるで子どものように安心してしまうのだ。あの包容力はどこから来ているのだろうか。それは自分だけではなく、他の男たちも一緒のようだ。だが二人きりになると、彼女はどの男にも、いつも一歩引いて接している。最初こそ里香子に夢中だったルーパリーだったが、周囲を見渡す冷静さを持つ彼にはそれがわかっていた。

そしてひとりだけ、彼女が気にしている男があるということも。

「まあ、選ぶのは彼女自身だ。俺たちには強制出来ない。でももし、里香子がこの先もずっと俺たちと一緒に暮らすのだと決めてくれたなら。俺は、お前がいいと思う。お前なら誰からも反対意見が出ないだろうってのが理由だ」

もし里香子が誰かひとりを選んだとしたら。

他の男たちはそれに納得するだろうか。諦めきれず、何とか自分を選んで欲しいと懇願する者が出るのではないか。相手が決まらずに争いの元になるのと同じくらい、相手が決まったときの混乱も心配だった。

だが里香子を選んだのがシユカならば、きっと誰も何も言わない。自分もシユカならば仕方ない、とそう思うだろう。それだけ彼を信用していたし、その苦勞も知っていた。

フォスター族を存続させる為に休む日もなく懸命になっているシユカには、支え手が必要だ。彼女ならば、シユカに安らぎを与える事が出来る。いや、きっと彼女にしか出来ないだろう。

返答は、なかった。

その腕は、無意識に入れ墨のある右肩に触れている。

五年前、多くの者が経験した痛み。

魂の共有者を失う痛みを、彼は知らない。シユカには生まれた時から、半身となるべき存在がいなかったのだ。

一般的に同じ場所に魂を宿す者は、複数存在する。その中から気の合う者を女性を選ぶことになっていた。それなのに彼には、元からその相手が存在しなかった。

稀にそういう者が、過去にも存在したらしい。

そして彼らはすべてフォスターのリーダーになっていた。皆を率いるリーダーには、時として危険も伴う。魂の共有者がいない者は率先して危険を引き受け、他の仲間を守ってきた。

今の彼のように。

「仲間を守らなければならない。それが俺の役目だ」

ようやく彼が口にしたのは、固い決意の言葉。きっと彼はフォスターの守護者として己の人生を捧げると、もう遙か昔に決めていたのだろう。

考え方、生き方を変えるのは容易ではない。

けれど。

「シユカ。お前は考えたことはないのか？ もし同じ場所に魂を宿す者がいたら、どんな人生を送っていただろう、と」

自分は何度もあった。

ルーパリーも五年前、少し年上だった婚約者を亡くした。彼女が生きていたら、どんな人生だっただろうと、何度も繰り返し、考え



た。彼女を失った痛みはまだ癒えることなく残っている。きっと他の誰かを愛したとしても、きつと消えることはないのだろう。

シュカはゆっくりと首を横に振る。

「ない。一度も考えたことがないんだ。俺の思い描く未来に、共有者の姿は一度も浮かんだことはない。だから俺は、これからもリーダーとして生きていくべきだと、そう思っている」

毅然とした声。けれどルーパリーは思う。本人も気付かないところできつと、シュカは迷っている。あの沈黙がそれを物語っている。今はもう少し、時間が必要なかもしれない。

「そうか。だかシュカ。もしこれから先に、一族よりも里香子の姿が先に思い浮かぶようなことがあれば、今日の俺の言葉を思い出し、てくれ」

焦る必要はないのかもしれない。まだ出逢ったばかりの二人なのだから。

辺りが明るくなる頃を見計らって、男たちは山に向かった。仲間が待つ場所へ。

最後尾を歩くシュカはずっと無言だった。何かを深く考え込んでいるかのように、時折その足が止まる。こんな彼を見るのは初めてだった。まだ安全な場所には入っていない。ルーパリーは先頭を別の男に任せ、後方へと移動をする。

「シュカ」

声を掛けると、紫水晶の瞳が真っ直ぐにルーパリーを見つめた。

「俺が後ろに行く。お前が先に行け」

きつと里香子は待っている。

ミリィーたちにとっては何度もある夜だが、里香子にとって仲間が夜になっても帰らないのは初めての経験だ。優しい彼女のことが、きつと心配している。何度も窓の外を見て、帰ってくるのを心待ち

にしているだろう。

それにきつと、里香子が誰よりも先に探すのはシュカの姿だろう。  
ならば彼が先頭に立つべきだ。

「お前が先頭だ、シュカ」

「……」

シュカはきつぱりと言い切るルーパリーの姿に、少し首を傾げる。  
その秘めた決意を知らぬままに。だが特に疑問を口にすることはなく、先に立って歩き出した。気が削がれていたという自覚はあるのだろう。だからこそ、ルーパリーが背後を任せるのを不安に思ったくらいにしか考えていないのかもしれない。

それでいい、と思う。そうでなければシュカは決して動かないだろう。

（世話の焼ける奴だ……）

先頭に向かうその姿を見て、思わず笑みを浮かべる。

里香子もシュカも、どちらもルーパリーにとって大切な存在だった。だからきつと、自分はずっとその幸せを願うだろう。

今朝はまた一段と寒さが厳しかった。

冷たい風が部屋の中を冷やさないように、里香子は窓の隙間に布をあてがう。この寒さの中で一晚過ごした彼らはきつと冷え切っているだろう。少しでも暖かい部屋で迎えてあげたかった。野菜ときのこで作ったシチューは、いつもよりかなり多めに作ってある。パンもたくさん用意しておいた。

もう一度調理室に戻り、料理を確認する。温め直すのはまだ早いだろう。

不安で落ち着かず、昨晚はほとんど眠れなかった。

どんなに心配はいらないと言われても、心が安まることはなかった。むしろ不安は時間が過ぎ去ることに積もっていく。

唇がまた、同じ言葉を刻む。

「早く帰ってきて……」

祈るような願いは、辺りが明るくなった頃によやく叶えられた。窓から外を見つめていた里香子は、見えてきた人影に立ち上がる。

「シュカさん……」

先頭に立っていたのは、誰よりも待ち望んでいた人。

子どもたちはまだ眠っている。里香子は走り出したいのを堪え、ゆつくりと建物の外へと向かった。

まだ静まりかえった家が見えてきた時、シュカが考えていたのはあの早朝の出来事だった。

何故、ルーパリーはあんなことを言い出したのだろう。

そして、里香子。

外見は間違いなくフォスターなのに、仲間たちとは何処か違う雰囲気を感じている女性。きつと今生きているフォスターとは誰とも繋がらない血筋だ。少なくとも知る限りでは、行方不明になったフ

オスターは誰もいない。

けれどあの日。

初めて彼女の手料理を食べた時に見た、あの涙。  
例えどんな生まれだろうと彼女は仲間であり、守っていくのだと決めた。

自分たちの境遇を思い、流してくれたあの涙にきつと偽りは無い。そしていつかは仲間の誰かと結婚し、本当の仲間になる日も来るだろう。そう思っていた。

お前がいいと思う。

それなのにルーパリーの言葉が、あれから何度も心の中に蘇る。  
彼には、魂の共有者がもし存在したらと考えたことは一度もない、とそう答えた。嘘を言っただけではない。その時までは本当にそうだったのだから。

けれどルーパリーのあの言葉が、心を騒がせた。

生涯、一族の守護者として生きると、そう決めていたのに。

「……おかえりなさい」

彼女が見えた。

きつと心配したのだろう。あまり眠れなかったような顔をして、それでも微笑んでいる里香子の姿がそこにあった。

初めて会った時を思い出す。箒手に、勇ましく挑んできたその姿を思い出して思わず笑みが浮かんだ。思えば最初から、ここにいるような大切に守られている少女たちとは違っていた。

黒髪の女性だったとはいえその腕を取ったのは、そんな彼女に惹かれていたからなのだろうか。

勇敢に挑んできた、あの姿。

透明な涙。

鮮やかな手つきで料理をしていた後ろ姿。

纏わり付く子どもたちを邪険にしたりせず、慈愛に満ちた顔で料理や裁縫を教えていた姿も。

一族の守護者として、生きる。

その誓いは、今もこの胸にある。けれど。ほんの少しだけ触れるくらいは、許されるのではないだろうか。

成人女性にしては小柄な里香子の、肩辺りにある黒髪に優しく触れる。

「……ただいま」

そしてそのままその傍を通り過ぎる。妹の姿が見えた。

「ミリィー。変わりはないかったか？」

「……うん。こっちは大丈夫。みんな無事？」

「ああ」

背後からおかえりなさい、と里香子の声がした。それに答える複数の男たちの声。

それを聞きながら、シユカは荷物を持って建物の中に入る。振り返らなかった。

（……お兄ちゃん？）

男たちが帰ってきた気配を感じて外に出てきたミリィーは、里香子のすぐ後ろにいた。

そこで見た兄の姿。

あんなに迷いのある顔は、初めて見た。あんなに優しい笑みも。そして、何処か寂しげな後ろ姿も。

「大丈夫だ」

優しく掛けられた声。振り返るとルーパリーが立っていた。

「俺がいる。だから大丈夫だ」

「……うん」

その言葉が何を指しているのか。この時はまだミリィーにはわからなかった。けれど頷くことに躊躇いはなかった。彼が大丈夫だと言っからには、きっと大丈夫なのだ。

## 1 - 17 二人きり

「すごい、あれだけあったのに全部なくなっちゃった」

かなりの量を作っておいた筈のシチューは、すべて綺麗になくなっていた。作る方としては、これだけ喜んで食べて貰えると嬉しい。里香子は後片付けをしながらにこにここと微笑んだ。

これを作っていた時は、胸を締め付ける不安に苛まれた夜だった。けれどももう不安は欠片もない。全員揃って無事に帰ってきてくれたのだから。

「さて、後片付けをしなきゃね」

水道もないし、初冬の水は指が痛くなるくらい冷たいが、大量に積まれていた食器を洗うのも苦にならない。

「あ、お水がもうないみたい。汲んでこなきゃ」

水桶を手にも外へ出た。

金色に染まった草が、山頂から吹く風に揺られてさわさわと音を奏でる。黄金に染まった世界は何度見ても壮観だった。もしこの世界の住人が紅に染まった向こうの紅葉を見たら、その鮮やかな色にやはり感動を覚えるのだろうか。

「あ……」

景色に見とれていたせいで空っぽの桶が風に煽られ、思わず手を離してしまった。風に乗ってころころと転がる桶を拾おうと、慌てて手を伸ばす。けれど急な坂道で急激に体勢を変えてしまったせいで、今度はバランスを崩す。

「きゃあっ」

どうしてこう落ちたり転がったりするのだろう。

「危ない！」

衝撃に備えて身体を固くするが、転がりかけていた里香子を片手で支えてくれた人がいた。

「本当に転がるのが好きなのか？ 危ないからあんまりひとりで歩

くな」

僅かに苦笑したような口調。でもそこには、案じるような響きが確かに宿っている。

どうしていつも、助けてくれるのは彼なのだろう。

里香子を片腕に抱き寄せたまま、足元に転がる水桶を拾い上げているのは、シュカだった。宝石のような瞳が、真っ直ぐに里香子を見つめる。

「あ、ありがとう」

俯くと、金色の野原の上に転がる赤い果実が目に入った。周囲に転がっていたのはリツカの実。子どもたちが好きなこの果実を、山に採りに行っていたのだろう。

「ああ、ごめんなさい」

慌ててその実を拾うと、シュカは水桶を持って歩き出す。

「それを頼む。子どもたちに食べさせてやってくれ」

「わ、私が行くから」

リツカの実を持ったまま慌てて後を追う。その気配を感じたのだろう。シュカは立ち止まった。

「……一緒に行くか？ その方が回数も少なくてすむ」

「い、行く」

二人きりになれるチャンスなど、この集団生活の中では二度と無いかもしれない。里香子は何度も頷いていた。

（すっごく、嬉しいかも……）

ここに来たばかりの頃は、顔も合わせることもすらなかった。それから少しずつ声を掛けることが出来るようになって。料理を褒めてくれたこともあった。気のせいかもしれないが、今日は特にいつもよりも優しく接してくれているように思う。

きつと迎えに出た自分は泣きそうな顔をしていたのだろう。幼い子どもにするように、優しく髪を撫でられたことを思い出す。

一度リツカの実を置きに戻り、それから水桶をひとつずつ持って

から森に向かって歩いた。

綺麗な水が流れている川まではそう遠くはない。けれどほんの少しの時間でも、一緒に歩けるだけで幸せだった。

「冬もここまで水を汲みに来るの？」

「いや、この辺りは雪が深くて近付けなくなる。だからもう少し下流の方へ行く」

下流といえば、里にも近い場所だろう。

つい最近まで里香子もその辺りに住んでいた筈だ。けれどもう、山から離れた場所は怖いと感じてしまう。

それはこの世界のことを深く知ったからか。それともこの心がもうフォスターになっているからなのだろうか。

「……やっぱり冬は厳しいよね。長期間保存出来る食糧を、少しでも多く作らないと」

食糧が確保出来れば、彼らが山を下りなければならぬ回数も減る。ただ空を見つめ、はやく朝が来るようにと祈る、あんな夜もなくなるかもしれない。

「私、頑張るからね」

決意を込めて力強く告げる。料理が好きで本当に良かったと改めて思う。皆の為に出来ることがある。それはとても嬉しいことだった。

ありがとう。助かる。

彼は静かな声でそう言ってくれた。

けれどその表情が少し寂しげに見えたのは、気のせいなのだろうか。

川で水を汲み、歩いてきた道を戻る。並んで歩ける時間も、もう僅かだ。

子どもたちの声が聞こえてくるようになったとき、ふと彼は立ち止まった。

「……シュカさん？」



「ひとつ、聞いてもいいか？」

その真摯な声に、こくりと頷いた。不安と期待が同時に過ぎ去っていく。

「あの村には、いつから住んでいたんだ？」

「……」

里香子は戸惑う。

どう答えるべきなのだろう。

外見もほとんど同じだが、自分はフォスターではない。それ以前に、この世界の者でもないのだ。

忘れていたのではない。

けれど彼らも仲間として扱ってくれていたし、里香子も彼らのことを深く知るにつれ、その痛みや歴史を共有してきた。ここでフォスターとして、生きていくつもりだった。

嘘は言いたくない。

けれど、フォスターではないと知れたらもうここには居られないのではないか。

不安が、言葉を自由にくれなかった。

「答えたくなければ、それでいい。ただ俺たちが知る以外に、生き残りがいるのか気になっただけだ」

続く沈黙、そして不安そうな里香子の表情に彼は何を思ったのだろう。答えることを強要せず、シユカは先程のように優しく黒髪に触れる。

「お前を連れて来たのは俺だ。フォスターのリーダーとして、同族は必ず守る。だからそんな顔をするな」

「……わ、私がもし、同族じゃないとしても？」

けれどこの優しさが、ますます里香子を追い詰めた。

絶対に口にしたくない言葉が、無意識に飛び出してしまふ。

「私がああ村に住まわせて貰っていたのは、ほんの数日なの。気が付いたらあんな近くの森に倒れていて、村に住んでいる老夫婦に助けて貰ったのよ。だから……」

「この国には、フォスターの血を引く者以外に黒髪はいないんだ。だからもし、記憶がないとしてもお前は同族だ。心配はいらない」  
記憶がないのではない。ただどう説明したらいいのかわからないのだ。

こことは異なる別の世界から来た。

そんなことを言って、信じて貰えるかどうか知らない。

信じて貰うところか。

自分でも少しずつ、元の世界の記憶があやふやになってきいている気がする。あれは夢なのだと、そう言われたら納得してしまうかもしれない。

私はどうしてここにいるの？

これからどうしたらいいの？

問う相手もない疑問が、ぐるぐると頭の中を駆け巡る。涙が溢れる。

水音がした。

足に冷たい水の感触。

せつかく汲んできた水を、こぼしてしまったようだ。けれどもうそれを顧みる余裕もない。

戸惑う気配を感じる。

彼にしてみれば、ただ他にもフォスターが生き残っているのではないかと思つて尋ねただけだ。何故こんなに泣いているのかもわからないに違いない。

「ごめんなさい。……私、迷惑ばかり……」

必死に声を振り絞って謝罪する。

「……大丈夫だ」

肩に温かい感覚。

あまりにも近く、耳元で聞こえる声。

怯え、不安に震える里香子の肩を、シュカが力強く抱き締めていた。

「シュカ……さん」

突然の抱擁だった。

けれど驚くよりも、その腕から伝わる温もりに、怯えた心が少し

ずつ宥められていく。

（温かい……）

優しい抱擁は、彼の心を何よりも伝えてくれた。縋り付くようにその背に腕を伸ばす。

（ここにいたい。あなたの傍に、いたい……）

けれど真実を伝えずにそうすることは出来ないだろう。この優しさを、裏切ることとは出来ない。例え追い出されたとしても、彼を欺くことは出来なかった。

「……信じて貰えないかも、しれない。でも聞いて欲しいの」

自分が住んでいた場所は、この世界とは違う場所であること。

向こうの世界で穴に落ちてしまい、気が付いたらこの世界の森の中に倒れていたこと。

そしてあまりにも世界観が異なることから、別の次元から来たかもしれないことまで。

彼の腕の中に寄り添ったまま、考えつくすべてを言葉にして彼に伝えた。

シユカは途中で言葉を挟むことなく、静かにそれを聞いてくれた。「俺たちは魔法には詳しくないが……。召還魔法というものがある、と聞いたことがある。だがかなり高度な魔法で、その辺の魔導師に使えるようなものじゃない筈だ。おそらく宮廷魔導師クラスの者だろう。だが、それだって簡単なものじゃない筈だ。……何の為に？」  
「え……。ま、魔法？」

そう言われて思い出す。ここは、魔法という力が存在する世界だったのだ。そして過去に、彼らはその力によって苦しめられてきたというのに。

シユカの傍にいたかった。

フォスターとして、彼らと一緒にここで生きていきたいと、そう思っていた。

小さな可愛い女の子たち。

まるで姉のように慕ってくれるミリィー。

親切にしてくれる男の人たち。

もうみんな家族のように大切な人たちだ。

ずっと一緒に暮らしたい。ここで、彼らの仲間として。

けれどそれが彼らを危険に晒す可能性が、ほんの僅かでもあるとしたら。

（私はここに、居てはいけないのかもしれない……）

この世界の状況を色々と知ってしまった今、山を下りるのは怖かった。黒髪をしているというだけで、どんな目に遭うかもわからない世界なのだ。

でも、彼が好きだから。この仲間が大切だから。これからみんなには、幸せになって欲しいから。

里香子は瞳を閉じて、シユカの腕に縋った。

この温もりを、忘れないように。

## 2 - 1 遺言

かたり、と物音がして目が覚めた。

いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

ここは王宮。王の住まう場所である。

生活をする空間で常に緊張を強いられるのは、苦痛だった。けれど部屋の外には衛兵がいるとはいえ、盟友のイドも忠臣のドリカも傍にいない今、もう少し用心するべきだ。

(……ここには敵が多すぎる)

窓から差し込んでくる光が、部屋の中を照らしている。まだ日が高い。そう長い間眠っていた訳ではないようだ。

そして視界に映った人影に気が付き、表情を険しくする。

「……ここで何をしている」

部屋の隅には、ひとりの女性が静かに座っていた。

大人びた顔立ちをしているが、細い手足はまだ成熟していない。

艶やかな茶色の巻き毛に、深緑の絹のドレスを身に纏っていた。緑色の瞳は、王の不機嫌な声にもまったく動じず、静かに彼を見つめている。

「お話があつたので伺いました」

少女には似合わぬ落ち着いた声が、その薄紅色に染まった唇から溢れた。

ここは私室ではなく、執務室だ。来客があつても不思議ではないが、よりによって彼女は一番力を持っているドリニティー公の愛娘だ。カインサーは不快さを隠そうともせず、目の前の少女を見つめる。

彼も即位したばかりの時は、多くの理想を掲げていた。国民全員が安心して暮らせるように、それを実現させる為に生涯を捧げようと決意していた。

だがそれを実行するには、あまりにも多くの障害があったのである。

亡き父王はどちらかといえば、自分の意見を述べるよりも周りの意見に耳を傾ける人だった。だが例え嘘を述べられたとしても、それを簡単に信じてしまう危うい面もあった。父を愚王だったとは思いたくないが、国王としてすべてを背負うには優しすぎたのかもしれない。そのせいで物心がついた時には、王宮は貴族達に完全に取り仕切られていたのだ。

自分達の利益しか考えない人間。この国の貴族は、まさにそんな存在である。一応、国王であるカインサーには従っているが、それも見せかけだろう。まだ若い王を彼等は心の底では侮っている。例えこの国が滅んだとしても、彼らは自分達の財産さえ無事ならば良いのだろう。

国内を良くするという目標以前に、まず彼等と戦わなければならなかった。

その貴族の筆頭が彼女の父ドリニティー公爵。まさに敵の象徴のような男だ。その男が溺愛する愛娘がこのシアという少女。母親は王族の血を引いている為に、現時点では自分の正妃候補でもある。だが周囲からどんな圧力を掛けられようと、それだけは受け入れるつもりはなかった。あの男が次期王位継承者の祖父になってしまえば、もうこの国は終わる。

「何の用だ？」

彼女自身には何も罪はないとわかっている。

わかつてはいても、国王としての立場から彼女と親しくするつもりはまったくなかった。

ドリニティー公爵令嬢シアは、国王の素っ気ない態度に臆した様子も見せず、不思議なほど大人びた声で、こう告げる。

「……異世界の女性を捜すのは、お止め下さい。この国の為を、思

うのならば」

「何処から、それを」

この言葉に素っ気ないだけだったカインサーの視線に、明らかに敵意が宿った。

「ドリニティー公爵に言われて来たのか？ その女性が見つければ王妃になれなくなる、とでも？」

だがその視線を難なく受け止め、彼女はそれを否定する。

「いいえ、父は何も知りません。知ったとしても、恐らく関心がないでしょう。父にとって関心があるのは、自分の地位と財産だけ。そういう人ですから」

父が娘を溺愛しているのならば、娘も父に親愛の情を持っていると無意識にそう思っていた。少なくとも、家族とはそういうものだと。だがシアはカインサーとほぼ同じ評価を、自分の父に付けたのである。

「わたしがここに来たことは誰も知りません。誰にも知られずに陛下とお話がしたかったのです。どうか異世界の女性を捜すのはお止め下さい。この国が滅びる前に」

「……」

淡々としていたシアの口調に、僅かに懇願の色が混じる。カインサーはそれに答えず、静かにシアを見つめた。

いくら大人びて見えても、彼女はまだ十七歳の筈だ。それに大切に育てられた公爵家のひとり娘である。イドが異世界からある女性を召還したというのは、一部の者しか知らない事実。それを年端もいかぬ少女が調べ上げ、誰にも相談せずに独断で話をしにきたのだと言う。

だがそれをここで詰問しても、彼女は何も言わないだろう。

カインサーは豪華な椅子にその背を預けた。その話をじっくりと聞けば、何かわかるかもしれない。

「まるでその女性が見つければ、この国が滅ぶような言い方だ。何故、そう思う？」



シアは無言のまま、ずっと大切そうに手にしていた本のようなものを差し出した。

「これは？」

用心しながらも受け取ると、見た目に反して軽々としていた。本ではない。

「わたしの母の日記です。母は、ミフアリ・ラリ様とも親しくして頂いたと聞きました」

ミフアリ・ラリは前王妃であり、カインサーの生母の名前だ。そしてこの異世界に関する予言を遺した人間でもある。

「きつと陛下が知らない真実も、そこに書き記されていると思います。どうかそれをお読み下さい。そうすればきつと、異世界の女性を捜すことがどんなに危険なのか、おわかりになると思います」

懇願するような声で、シアはそう告げると深々と頭を下げた。そしてそのまま衣擦れの音すら立てず、執務室を後にする。

ひとり残されたカインサーは、じつとその日記を見つめた。

「真実、だと……？」

## 2 - 2 真実

街が寝静まる深夜になっても、王宮にはまだ明かりが灯っていた。徹夜で見張りをする衛兵。いつでも主の要求に応えられるようにと、交代で起きている侍女たちもいる。広い王宮は静まりかえっているが、それでも多くの者が眠らずに朝を待っていた。

この王宮の主、セリドリー王国のカインサーもまだ眠ってはいなかった。

夜が更ける頃によく私室に戻った彼は、シアから渡された日記に目を通していた。そして、その傍にはもうひとりの姿。

この部屋に蝋燭は灯されていない。それなのにまるで真昼のように明るかった。王の私室のすべてを、死角がないように明るく照らしている。

「イド。これは、ここに書かれているのは事実なのか？」

その隣には、長い銀の髪をひとつに束ね、まるで自室にいるかのように寛いだ格好をしている魔導師の姿があった。この部屋の明るすぎる照明は、彼の魔法なのだろう。

「……ああ、そうだ。その通りだ」

「ならば彼女は、お前の？」

「召還に成功すれば、伝えるつもりだった。彼女をこの世界に呼び戻すのが、俺の使命だと思っていた。……だが、俺よりも魔力の強かった筈の父が、どうしてこの魔法を実行しなかったのか。それがずっと気懸かりだった。俺と同じくらい、いやむしろ俺よりも強く願っていた筈なのに」

二人の間にある机には、三つの日記が並べられていた。

カインサーの父である前王のもの。

そこには、母の遺言が記されていた。

運命の女性を妃としたとき、この国は大陸を制する力を持つだろう、と。

それが誰なのか、はっきりと記されてはいない。だが父はそれは他国の妨害に遭って失敗したと書き残している。その後は亡き母に対する言葉だけで、その件にはまったく触れていなかった。

次に、イドの父が遺した魔法書。

そこに記されていたのは、運命の女性は異世界にいて、そしてその次元を特定して探し出す方法が詳しく記されていた。

そして最後に、シアに渡された彼女の母の遺した日記。

彼女の言う真実が、そこには書き綴られていた。

すべては、二十四年前。

このセリドリー王国の前王が、ある高名な女魔導師を王妃として迎えたことから始まった。

一般的に女の魔導師は、結婚することはない。

それは出産によって魔力が相当量奪われてしまうからだ。力の強い魔導師の場合は奪われてしまう魔力の量も多大で、命に関わることもある。

前王と王妃の間には、ただ純粹なる愛があったのか。それとも、それは契約だったのか。

今となっては知る術もないが、王は女魔導師に求婚し、彼女もそれを受け入れた。遺した日記から察するに、少なくとも王は彼女を愛していたのだろう。

そしてそれから二年後、王妃は現王であるカインサー・ロド・セリドリーを産んだ。

それはかなりの難産で、結局王妃はその後回復することなく命を落とすが、その命と引き替えに産んだ息子を抱き、満足そうに微笑んで、こう言い残したという。

「私が産んだのは、ただのセリドリー王国の跡継ぎではない。この子は、大陸を統べる、偉大なる王となるだろう。けれど、それはこの子ひとりでは為し得ない。今から三年後、半身となる女性が王の血筋に産まれる。その娘を、次期王妃にするのだ。そうすれば我が

国は大陸を制し、太陽の沈まない王国のように永遠の繁栄を誇るだろう」

かしくてその予言通り、二年後に王の妹が次期王妃として定められた娘を妊娠した。

けれど他国にまで広がった王妃の予言を恐れた、ある国の呪術師によって呪いをかけられてしまう。そのせいで運命の娘は産まれることなく、異世界に飛ばされてしまったのだと言う。

だとしたら。

カインサーはまだ見ぬその女性を思う。

この世界で生まれなかったとはいえ、彼女は異なる世界の人間とは言えない。

もし妨害に遭わなければ王家の直系の娘として、ドリニティー公爵の娘であるシアよりもずっと正妃に相応しい身分だった筈だ。もし母の予言がなくとも、きっとそうだったに違いない。

そんな女性を何故、シアは探すと言ったのだろう。しかも国が滅びる、などと。

ここに記されている過去を知った今、彼女の発言をただの戯れ言として聞き流すことは出来なくなっていた。

けれどその意図が掴めず、カインサーはイドに問う。

「魔法を構築しておきながら、それを実行しなかった父も懸念を感じていたのかもしれない。それが何なのか。……俺に考えられることは、ひとつだけだ」

イドの指が、日記のある一部分を指し示す。そこにはシアの母が書き遺した言葉があった。

他国の呪術師、と。

翌朝。

カインサーはイドに頼み、ドリニティー公爵家の者には誰ひとり知られないようにしてシアを呼び出した。

あれからも思案を重ね、カインサーもイドも一睡もしないままだった。だが身支度をきっちりと整え、執務室で彼女が訪れるのを待った。

ほどなく、イドが彼女を連れて来た。

艶やかな茶色の髪を結び上げ薄紅色のドレスを纏った彼女も、早朝にも関わらず身だしなみを完璧に整えていた。カインサーはその手に、預かった彼女の母の日記を返す。

「イドが、他国の呪術師がまた彼女を狙うのではないかと懸念していた。もしくはその身に転生しても消えない呪いをかけられているのではないか、と」

シアはこくり、と頷く。真摯な瞳だった。

「……わたしは、とても身近に呪術師を知っています。彼らの呪いがどれほど恐ろしいか、よく知っています」

それはドリニティー公爵が呪術師を雇っていると告げたのも同然だった。けれど今はそれを追求する時ではない。カインサーはただ頷いた。

## 2 - 3 夕陽

窓から見える空は、真っ赤に染まっていた。

建物の周りに干した洗濯物を取り込みながら、里香子はその夕陽に見惚れていた。

「綺麗……」

金色に染まった草原が朱色を帯びる。

その景色はとても神秘的で、そして壮絶だった。

夕陽というものはとても美しいにも関わらず、時には物悲しく見える場合がある。里香子も少しずつ闇に染まっていく朱金の大地を見つめ、切ないような気持ちになって目を細めた。

けれど景色に気を取られすぎた。洗濯物を落としそうになって慌てて手を伸ばす。

「あっ……」

風に煽られて空に舞い上がるシーツを必死に追う。すると。

「危ないぞ」

背後からの声。里香子の背を支えてくれたのが誰なのか、振り返って確認するまでもなかった。

「おかえりなさい」

「本当にお前は目を離すと、落ちたり転がったりするからな」

「そんなにいつも、転がってる訳じゃないし……」

子どものように拗ねてみせても、彼はただ苦笑するだけだ。

あの日の夜。

仲間が大切だからこそ、里香子はここを離れようとした。もし魔導師が自分を探しに来たりしたら、この隠れ村も危険に晒されてしまう。それだけではどうしても嫌だった。

決行は皆が寝静まっているだろう、夜明け前。

別れも告げずに離れるのはつらかったけれど、直接別れを告げる  
勇氣はなくて。

まだ闇の残滓が残る空の下、ひとりで山を下りるべく外へ出たの  
だが。

ルーパリーが振り返り、さわやかに笑う。

「あ、里香子。おはよう。水汲みはもうしてあるぞ」

まだ周囲は薄暗いというのに数名の男たちはもう起きていて、薪  
を割ったり水を汲んだりしていたのだ。

「お、おはよう……。す、すぐにパンを焼くから、待っててね……」  
それから数回挑戦するも、何故かいつも誰かは起きている。昼間  
はミリーや子どもたちがずっと一緒に、ここ数日間、ひとりにな  
る時間がまったくなかった。

あれほど強かった決意も、日にちが過ぎるとどうしても薄れてき  
てしまう。それに村は何事もなく平和だった。その平和が緊急性を  
失わせ、いつしか冬を越える為の準備に熱中してしまっていた。こ  
ちらの方が余程切実なのかもしれない。

「里香子」

シュカはその背中に手を添えたまま、彼女の名を呼んだ。

「話がある。少し、いいか？」

こくりと頷く。間近で見つめる彼の紫の瞳は、とても真剣だった。

シュカに手を取られたまま、少し山の中を歩いた。子どもたちに  
聞こえる場所では、話にくいのだろうか。生い茂った木々は赤く  
燃える夕陽の光さえ遮り、少し薄暗い。ひとりならば怖くて歩けな  
いかもしれない。

里香子は、目の前を歩くシュカの背中を見つめた。

彼は仲間たちを守るリーダーだ。その為に何かを決断したのかも  
しれない。

どうして言われる前に出て行かなかったのだろう。少しずつ後悔が胸を満たしていく。直接別れを言われるのはつらいから、誰にも告げずに出て行こうとしていたのに。

繋がれたままの手。この温もりに、あの日の抱擁を思い出す。それを思い出にこの地を去ればよかったと思う気持ちと、離れたくないという相反する気持ちに翻弄される。

泣き出しそうになったその時、ふいに風が吹き抜けた。

顔を上げると、森の終わりが見えた。

唐突に生い茂った木々が姿を消し、その代わりに現れたのは金色の波。

消えようとしている太陽の赤い光が、シュカの横顔を照らしている。

「もう沈むけどな。ここから見る夕陽が、一番好きなんだ」

穏やかな声でそう言つと、シュカは里香子の手を離して金色に染まった草の上に座った。

「……とっても綺麗」

その傍に寄り添うようにして座る。

「ずっと話がしたかったんだが、少し忙しくてな。今日までルーパリーやミリイーに頼んで、見張って貰っていた。思い詰めた様子だったから」

「え……」

思いがけない言葉に、その紫の瞳を見つめる。

「最初に言っておく。俺は、必ず守ると言ってお前を連れて来た。

その約束を破る気はまったくない。だからそれを信じてくれないか？」

ゆつくりと、小さな子どもに言い聞かせるかのような声。その優しい口調に、張り詰めていた心が解けていく。

「でも私はフォスターじゃない……」

「自分からフォスターだと名乗った訳じゃない。俺が、あの村で平和に暮らしてきたお前を、こんな不自由な山の中に連れて来たんだ。



責任は俺にある。だからここに居てくれ。俺たちも里香子には、随分と助けられている」

でも、と口にした言葉と同時に、涙が頬を伝う。守ると言ってくれた。

ここに居て欲しいと言ってくれた。助けられている、とも言ってくれた。

仲間たちと一緒に助け合う暮らしを、不自由だなんて思ったこともない。

「でも私を召還したっていう魔導師が、探しているかもしれない。ここに来てしまうかもしれない。みんなを危険に晒すくらいなら、私……」

こんなに切ない気持ちになったことは、元の世界にいた時だって一度もなかった。心がすべて砕け散りそうな痛み。

## 2 - 4 光

「俺たちは元々追われている。盗賊だからな。生きる為、仲間を守る為とはいえ、許される行為ではないだろう。いつか、裁きを受ける日が来る。それは覚悟している」

赤い光を背に、シユカはそう呟く。眩しい夕陽のせいで影が深まり、彼がどんな表情でその言葉を口にしたのかわからなかった。

初めて出逢ったとき、泥棒と叫んだことを思い出して里香子は俯いた。

けれどあの時は知らなかった。

彼らがどんな境遇で暮らしているか、知らなかったから。

「召還魔法かもしれないというのも、俺の予測でしかないからな。だが、もし誰かが意図的に里香子をこの世界に呼び出したのだとしたら、そいつは里香子を元の世界に戻す方法も知っているかもしれない。もし生まれ育った場所に帰りたと思うならば……」

元の場所。

生まれ育ったあの国。

中島里香子として生きてきた、二十年間が蘇る。

「私の生まれた国は、とても平和だったの。今思えばとても恵まれていた。水汲みなんてしたこともなかったし、食べ物だって欲しい物がすぐに手に入った」

どんなに便利な暮らしをしていたか、ここに来て初めて思い知った。もし帰ることが出来たら、日々の生活に感謝することが出来るだろう。

「……確かにあの世界は私の生まれた故郷だし、二十年分の思い出もある。でもね、もう両親もいないし、親しい友も恋人もいなかった。忙しさに紛れて気が付かなかったかもしれないけれど、きつと私、寂しかった」

けれどここには、一緒に生きていく仲間がいる。必要だと言って

くれる人がいる。

「帰りたくない訳じゃない。でも私はここに居たい。みんなと一緒に生きていきたい」

それでも一緒にいられない。彼らの安全を思うならば。

だから苦しい。だから、こんなにも切ないのだ。

里香子が目の前で泣いている。

便利で安全な場所で生まれ育ったという彼女。

だとしたら、こんな山奥での暮らしは本当に不便だったに違いない、

それなのに、いつも楽しそうに笑っていた。

子どもたちの面倒を見ながら、母親のいない彼女たちに色々と教えてくれた。料理もとても上手で、彼女がここに来てから食事の時間を楽しみにしている者も多い。

彼女は俺たちの境遇を哀れんで空から降臨した女神のようだ、とそう言ったのは誰だったか。

さすがに夢見がちなその言葉に苦笑する者もいたが、それでも里香子の存在が希望の光となっていた事実は誰も否定しないだろう。

光。

そう、彼女の周りにはいつも明るい光があった。そして罪に手を染め、もう闇の中でしか生きられない自分たちにも、惜しみなくその光を分け与えてくれた。

だからこそ、彼女にフォスターではないと聞かされてもそんなに驚きはなかった。彼女から感じる明るい光は、もう自分たちには失われてしまったものだったから。そしてきっとこれからフォスターの将来を背負う子どもたちには、今何よりも必要なものだろう。

仲間たちの身の安全も大切だが、子どもたちの未来も、同じくら

い大切だ。

「里香子」

シュカは選ぶ言葉に惑う。

彼女はフォスターにとって必要な人間なのだ。どうしたらそれを上手く伝えられるだろう。

「もし、この世界に生きると決めてくれたのなら、俺たちと一緒に生きてはくれないか。こんな山奥での不自由な暮らしだ。苦勞することも多いだろう。危険もあるかもしれない。けれど俺が、必ず守る。守るから」

苦勞はしても、それでも幸せを感じられるように。もうこんな涙を流すことがないように。

「……シュカさん」

里香子の頬にもう涙の跡はなく、薄紅色に染まっている。潤んだままの瞳で、そっと呟く。

「それって、プロポーズみたいだよ……」

思わず口にしてしまった後に我に返り、里香子はシュカの紫水晶のような透明な瞳を見上げる。すると彼もまた、動揺したような瞳で里香子を見つめていた。

ほんの数瞬、交わされた視線。

それからどちらともなく笑い出した。吹き抜ける風に乗って、笑い声が空へと昇って行く。

「帰ろうか」

「うん」

戸惑いは、まだ心の中に少しだけ存在していた。

けれど一緒に居たいと言った。そしてシュカは必要だと言ってくれた。

仲間たちを守ると言ってくれた。

だから彼を信じよう。好きな人を信じられないのは、あまりにも悲しいから。

「本当はルーパリーは朝がすごく苦手なんだ」

「え、そうなの？ ものすごくさわやかな顔をしていたよ？」

それを聞いてシユカは声を上げて笑う。それは怖いな、と呟いて、  
つらい思いをした。

何度泣いたかわからない。

けれどシユカにすべてを伝えて、彼との距離もかなり近付いた。  
前を歩く彼の手を、そっと掴んでみる。

「また転がると悪いからな」

少し悪戯っぽい笑みを浮べて、シユカは里香子の手を取ってくれ  
る。

振り返った。

目にしたのは、赤く燃える夕陽。

そして金色に光る草原。

きっとこの二つの景色を、忘れることはないだろう。

## 2 - 5 夜が明ける

里香子が帰ってきた。

シユカに手を取られ、少し嬉しそうに微笑んでいる。里香子を気遣いながら歩くシユカの顔も穏やかそうで。どう見てもお互い好意があるようにしか見えない。

その様子を窓から見つめていたミリィーは、傍にいる背の高い大男を見上げた。

「……私。てつきり里香子さんは、ルーパリーさんに好意を持っているんじゃないかと思ってた」

ルーパリーはただ静かに里香子とシユカを見つめている。

「好きだったんでしょう？」

「里香子を嫌いな男なんていないだろう」

兄であるシユカが、今までどんなに苦勞をしてきたか知っている。だから、兄に寄り添う相手が出来たのは嬉しかった。けれど、ルーパリーだけではない。里香子を好きな男は他にもたくさんいるのだ。

彼らとの関係がどうなってしまうのか。今まで助け合い、共に暮らしてきた関係が壊れたりはしないだろうか。それがミリィーには心配だった。

視線を前に向けたまま、ルーパリーは静かに口を開いた。

「俺が、俺達が里香子に惹かれているのは、ただ黒髪の女性だからという単純な理由なんかじゃない」

「……うん。わかる気がする」  
頷く。

この隔離された山奥の暮らしの中に、笑い声が響くようになったのは彼女が来てからだ。

明るくて、前向きで。里香子が傍にいと、空気まで穏やかに変

化するかのようで。

「彼女の明るい笑顔に、俺達がどれだけ救われたか」

その声には、里香子に対する深い想いが宿っていた。そう、彼もこんなにも里香子を愛していたのだ。

「ここだけの話、もし里香子を選んだのがシユカじゃなかったら、諦めたりはしないだろうな。俺だけじゃなくて、あいつらも」

それでも里香子の傍にいるシユカを見て、彼は優しく笑う。

「シユカがどれだけ必死に、俺達が生きていけるようにしてくれたのか知っている。いつだって自分よりも俺たちを優先してくれた。確かに里香子は大切だが、俺にとってはシユカも同じくらい大事なんだ。二人が幸せになってくれるなら、こんなに嬉しい事はない。俺だけじゃない。あいつらも、シユカならいい。そう思っている」

ルーパリーの言葉に、ミリーは瞳が潤むのを感じていた。

今日の食べ物にも困るような、山奥での不自由な暮らし。

人目を避けて隠れ住むような暮らしに、どうして自分たちばかりこんなに迫害されなければならないのかと、悔しく思った日もあった。町でなんの不安もなく暮らしている同じ年頃の少女達を、訳もなく憎く思った日もあった。

けれどここに暮らす人たちは、とても優しい。

自分以外の誰かの幸せを、こんなにも祈る事が出来るのだから。

（私、ここに生まれて良かった……）

その優しい人達と共に暮らせることを、彼らの仲間として生まれたことを、初めてミリーは感謝した。

頬を伝う涙。潤んだ視界の先には、寄り添う二人の姿。

どうか、二人がずっと一緒に居られますように。

兄の為に、そして大好きな里香子の為に、ミリーも瞳を閉じて祈りを捧げた。

この数日間続いた習慣で、里香子は夜が明ける頃に目を覚ました。外を見ると、ほんのりと明るくなっている。もう一度寝直そうかと少し悩み、思い直して起き上がる。

着替えをして髪の毛を丁寧に梳かし、音を立てないようにそつと部屋を出た。

早朝の澄んだ空気。ひんやりとした冷気が身体を包み込んだ。冬は確実に近付いているのだろう。

「食糧の確保をもう少し急がないとね……」

水桶を手にして外に出る。

「里香子」

すると背後から声を掛けられた。振り向くと、シユカの姿。大量に集めた薪を建物のすぐ傍にある小屋に積む作業をしていたようだ。もちろん、冬に備えてだろう。

「随分早いね」

「早起きだな」

目が合うとほぼ同時に同じような言葉を口にし、里香子は思わず微笑んだ。

昨日までは、こんなに穏やかな時間が過ごせるなんて考えもしなかったのに。

「俺はこの時間帯が好きなんだ」

シユカが浮かべる笑みも、最初会ったときには想像も出来なかったくらい柔らかい。

「この静けさも、澄んだ空気も」

「うん。そうだね。とつても気持ちがいいね」

連れだって水汲みに歩くこの光景も、もしかしたら毎朝恒例になるかもしれない。集団生活の中、二人きりになれるチャンスはなかなか貴重だ。

（毎日早起しなきゃ……）

それに集団の中ではなかなか、彼の穏やかな表情を見る機会は少ないだろう。



皆の前では彼は常にリーダーであり、すべきことも多い。

でも今だけは、二人きりで。

里香子は目の前を歩くシユカの左手にそつと右手を滑り込ませる。彼は振り向きもせず、それでも壊れ物を扱うかのように優しく握り返してくれた。

幸せな気分になって、里香子は微笑む。今はこれだけで充分だった。

## 2 - 6 償うべき罪

目の前に報告書が積まれている。

セリドリー国王カインは手を伸ばしてそれを取り、素早く目を通していく。

「呪術師。我が国にはあまり縁がないようだが、他国では呪術師絡みと思われる事件がこんなにあるのだな」

その隣にいるのは銀髪の魔導師イド。

「そうだな。しかも魔法を使ってむやみに人を傷付けたら罪になるのと違い、法による規制がない。幸いまだ国内には蔓延していないようだから、この国のようになる前に法律で規制するべきだろう」

だが、国内で犯罪が起きた前例のない法律を持ち込むのは、容易ではないだろう。

「ここにリストリア王国で起きた事件の事例があります。他国とはいえ、これほどの被害が出た事件ならば規制するのは当然かと思われます」

いつもならばイドと二人きりのこの部屋に、今はもうひとりの姿があった。

美しく着飾った貴族の少女。ドリニティー公爵の娘シアだった。

艶やかな茶色の巻き毛を結い上げ、その髪を飾るのは花をモチーフとした髪飾り。それには煌めく宝石が贅沢に使われている。同様に、ほっそりとした白い首元には瞳の色と同じ見事な緑玉の首飾り。その豪華さと比べて、細い身体を包む薄紅色の絹のドレスはシンプルだ。けれどそのシンプルさが、若い少女の美しさを引き立てている。

何故彼女が、王であるカインサーの私室に入ること許されているのか。

それはシアが、カインサーとイドが探してる異世界の女性の捜索をやめるようにと嘆願したあの日のことがきっかけだった。

異世界から呼び出した女性を捜さないように、と言うシアに、カインサーは頷かなかった。

「彼女は、元々この国の王族に生まれていた筈の女性だ。それをどこにいるかもわからないまま放っておくことは出来ない。呪いをかけられているのならば、尚更だ」

事実を知った今、カインサーにとって彼女は単なる異世界から来た女性ではなかった。

けれどシアは言う。

「……ミフアリ・ラリ様は偉大な魔導師でした。そのお名前は、国外にも広く知れ渡っているでしょう。そして遺された予言もまた、大陸中に知れ渡っているのです。何故、彼女が生まれる前に呪いをかけられてしまったのか。それは」

「……母上の予言を恐れた他国の差し金、だったな」

「そうです。そしてその予言は、今も各国から恐れられているのです。我が国が大陸を制するということは、他国にとっては侵略されて国を奪われること。……今度こそ呪法だけではすまないでしょう」

まだ二十四年前の歴史は過去に埋もれてはいない。もしカインサーが予言の女性を正妃にすれば、近隣の国が共謀してこの国を孤立させる恐れがある。孤立させるだけならばまだ良い。最悪の場合、戦火に包まれる場合すらある。

それを考えてシアは言ったのだ。この国が滅ぶ、と。

「……父が術式を完成されながらも実行しなかったのは、彼女の身を安全を考えてのことだったのか」

二度と会えない世界でも、生きてくれているのならそれでいい。きつとそう思い、会いたい気持ちを堪えたに違いない。

「それなのに俺が、この世界に……」

カインサーもイドも、既に両親を亡くしている。当時のことを知る者は、すでにほとんどいない。その限られた情報の中では、彼女の命が危険に晒される可能性を、この国を更に危険な状態にしてし

まう可能性を見いだすことが出来なかった。

「いや。それを実行するように命令したのは、俺だ。体力をすべて使わせる程の無茶をさせて、その上……」

荒れ果てた国内に気を取られ、外交にまで気が回らずにいた。王たる者、すべてに意識を向けていなければならないというのに。

「いいえ。陛下が野心からではなく、真にこの国を思っていたからだとわかっています」

年齢に似合わぬ落ち着いた声で淡々と話していたシアが、慈愛すら感じさせる穏やかな表情で、カインサーを見つめる。

「腐敗しているのはこの国ではなく、上層部の貴族たち。そして父が、その筆頭であることもわかっています。でもわたしは、この国を愛している。この国を良くしたいと戦っておられる陛下の、お力になれば。そう思っています」

この状況下で、信頼できる味方は数える程しかない。人手不足は視野の狭さに繋がり、また同じような過ちを犯してしまう危険性もある。けれど彼女はドレニティー公爵の愛娘なのだ。

何処まで信用していいのだろう。

「だがそれは、君の父上であるドリニティー公爵を追い詰めることになる。それでもカインサーと共に戦うと？」

イドが静かに尋ねる。彼女の言葉は真摯だった。それが虚構ではないと彼は感じていた。けれど不安なのはその覚悟。

父親を追い詰める。それを、いくらこの国の為とはいえまだ十七歳の少女に出来るのだろうか。

「……父は五年前、罪を犯しました。わたしはまだ子どもでしたが、今でもその光景を忘れることが出来ません」

白い頬に涙が伝う。声は冷静なまま、けれど彼女の緑色の瞳には、涙が溢れていた。

「この国の貴族として、ひとりの魔導師として。何よりも人間として許されることはありません。わたしは父が許せない。罪を償って欲しいと、そう思っています」

そして彼女は語り出した。

五年前。まだ無邪気な子どもだった彼女は、新しく移り住んだ屋敷をこっそりと抜け出した。父が新しく領土にした土地は王都から少し離れた、自然の豊かな美しい場所だった。

そこで出逢った同世代の少女。珍しい髪の色をしていたが、とても可愛らしくて優しい子だった。初めて、年の近い少女と一緒に遊んだ。初めて出来た友達だった。

また明日も一緒に遊ぼう。そう約束したのに。

「この子は、黒い髪をしていました。フォスターの少女だったので」

フォスター。

それは今はもうない国の民を指す言葉。もうこの国の一部になっているとはいえ、他では見られない珍しい黒い髪をしているので、見ただけですぐにフォスターだとわかる。

「五年前まではただ静かに暮らしていたフォスターが何故、姿を消したのか。何故、盗賊と成り果てしまったのか。原因はすべてわたしの父にあります。父は、友達を捜して森の近くまで歩いて行つたわたしの目の前で、彼女たちを虐殺したのです」

## 2 - 7 策略

多い茂った金色の草に隠れて見た、地獄のような景色。

その恐ろしい光景は今でも時折蘇り、シアを苦しめる。

「父が、フォスターを嫌っていたのは知っていました。それが自分の領土に住んでいることに、かなりの不快感を持っていたことも。けれどまさか、あんなにひどいことをするなんて」

父は、自分がすぐ近くの草むらに潜んでいたことを知らなかっただろう。きっと今でも知らないままに違いない。

「あの時の悪魔のような顔を、忘れることは出来ません。目の前で繰り広げられた惨劇も。父は罪を償うべきです。わたしが、証言します」

その事件が王都に伝わることはなかったのだろう。カインサーもイドも、初めて聞く惨劇にただ言葉を失った。

残されたフォスターたちは、一方的な虐殺にどれほどの怒りを覚えただろう。そしてその犯人が何の処罰もなくのうのうと生きているのを見て、どれほどこの国に失望したのだろう。

「これほどの非道が罷り通るこの国を変えたいと思いました。そして今はもうこの国の民である筈のフォスターが、迫害されることのない国になって欲しいと。たった一日だけでも、名前も知らなくとも、彼女はわたしの友達でした。彼女の魂が安らかに眠れるように、わたしは父と戦いたいです」

少女が心に受けた傷は、血の繋がった父親よりも、たった一日だけの友を選ぶほど深かったのだろうか。いや、同世代の友人を持つことが難しい貴族の娘にとって、同じような年頃の少女と思いきり遊んだことはきっと宝物のように大切な思い出だったに違いない。

その決意を疑うことなど、もう出来なかった。それにその罪が明らかになれば、ドリニティー公爵は確実に裁かれるだろう。

そしてこの日から、三人の戦いは始まった。

ドリニティー公爵との戦いは、長期に及ぶだろう。それにフォスター側からの証言も必要になる。彼らとの接触方法を探りつつ、どうやって彼を追いつめていくかを慎重に探っていくことになるだろう。

異世界から呼び出した女性の搜索は、続行することになった。

もうこちらの世界に呼び戻してしまった以上、そのまま放置しておくことも出来ない。彼女は自分の運命も、呪いをかけられていることも知らないのだから。

シアは危険だと言い続けたが、イドが納得しなかった。

結局、搜索は極秘に行うこと、予言の女性を捜しているとは一切他言しないことを条件に、シアも同意した。彼女が恐れているのは、その存在が他国に知れ渡ってしまうことだ。それさえ避けられるのなら、異を唱え続けたりはしなかった。

だが取り敢えず今は、大きな動きは出来ない。すでに大々的に搜索を開始してしまった以上、世間の関心が薄れるまで少し時間をおかなければならぬだろう。

その間に彼女に掛けられた呪いを解除する方法を探そうとイドが提案し、こうして呪術師に関する事例を集めていた。その中で呪術の恐ろしさを知り、それを制限する法律が何もないことに気が付いた。そしてそれを導入すべく話し合いを進めていたのである。

「ではこのリストリア王国の事例を元に、提案書を作成します。そうですね、明日には」

書類を整理するシアが、その仕事に不釣り合いな程着飾っているのには理由がある。表向きは、王宮の茶会に出席することになっているからだ。娘を正妃にしたいという野望を捨てていないドリニティー公にとっては好都合らしく、毎回美しく着飾って送り出してくる。

彼女がその裏で、父の失脚を願っているとも知らず。

(……あの男も哀れだな)

けれど彼女を王宮に招くことで、王が異世界の女性を諦めて王妃選びに入ったという噂も既に流れている。時折本当の茶会を開き、彼女以外の上位貴族の娘も招いていた。それによって自分の娘を正妃にしたい貴族同士の競争感を煽り、彼らの団結力を弱める目的もある。

策略と駆け引きに満ちた世界。

それでもまだ勝算があるだけ、戦う意志も沸いてくる。

カインサーは空を見上げた。

高く澄んだ青い空。

今、彼女は何処にいるのだろう。

里香子は調理室で夕食の準備をしていた。

長い黒髪をきつちりと束ね、余った布で作ったエプロンをして楽しげに料理をしている。

リコーンの実を茹でて、裏ごしをする。鍋に移して牛乳を加えて混ぜ、ゆつくりとかき混ぜた。

パンは木の実を混ぜて香ばしさを増した。バターももちろん手作りだ。それにリツカの実で作ったジャム。甘いジャムは子どもたちだけではなく、男たちにも意外に好評だった。鶏肉は小麦粉を付けて唐揚げに。里香子の周囲には小さな子どもたちがいて、一生懸命にお皿を並べたり里香子の手元を覗き込んだりしている。

「さあて、出来た。熱いから気を付けてね。……あれ、リンちゃん  
は？」

子どもがひとり足りないことに気が付き、周囲を見渡す。少女たちは大抵いつも一緒にいる。ひとりで単独行動をすることなどほとんどなかった。

「……部屋で寝てる。頭が痛いって」



具合が悪いのだろうか。里香子は心配になり、針仕事を終えてちようど入ってきたミリーに後を頼み、彼女の部屋へ向かった。

「昨日は随分寒かったから。もし風邪を引いたら大変だわ……」

怪我の手当ならばともかく、山奥に隠れ住む彼らには、病氣に対する術がほとんどなかった。

部屋の中を覗くと、まだ七歳のリンファは眠っている様子だった。起こさないようにそつと、額に手を当てる。

(……熱い)

どうやら熱があるようだ。里香子は慌てて調理室に戻り、水瓶から冷たい水を汲みだして布を浸す。

「里香子さん？」

食事の用意をしていたミリーが顔を出す。

「リンちゃんか風邪を引いたみたい。熱があるの。私がついてるから、先にご飯食べて」

水に浸した布を固く絞り、額に当てる。

「お姉ちゃん……」

里香子は高熱に喘ぐ少女の小さな手を握りながら、唇を噛み締めた。食事は女性が優先的に配られるが、育ち盛りの子供達にはそれでも充分な量ではない。栄養不足の体では抵抗力も落ちてしまっているだろう。

「大丈夫。ゆっくり休んで」

黒髪を優しく撫でると、リンファは安心したように瞳を閉じた。吹き荒れる風が窓をがたと揺らした。視線を向けると、外はもう暗闇に包まれている。今夜も冷えるかもしれない。暖炉の火を少し強くして、汗をかいたときの為に着替えを用意した。

「里香子さん」

しばらく眠っている少女を見つめていると、背後から小さな声が出た。ミリーがそっと顔を出す。

「リンファは……」

「大丈夫よ。たぶん風邪だから。温かくしてゆっくり休んでいればすぐに良くなるわ」

里香子の力強い言葉に、ミリーは安心したように笑みを浮かべる。

「よかった。私が代わるから、里香子さんもお飯食べてきて。もうすぐお兄ちゃんも戻ると思うし」

その申し出に素直に頷く。自分だけならば一食くらい抜いても平気だが、シユカは放っておくと自分から食事をしようとしのないのだから、大切な仲間の少女が寝込んでいると聞けば、それどころではなくなってしまうだろう。

ミリーに後を任せ、里香子は廊下に出た。ひやりとした冷たい空気。部屋に戻ってシヨールを肩に掛け、調理室へ戻る。ミリー

は後片付けもすべて終えてから来たようだ。きちんと整理された部屋の中には誰もいなかったが、まだ空気はほんのりと温かい。

明かりを灯し、スープとパンを軽く温め直して器に盛る。鶏肉は熱い鍋の中に入っていたので、そのまま大皿に入れた。

夕食の準備が整い、明日の朝食の下拵えが済んでも、彼はまだ帰ってこない。

立ち上がり、窓を開けて外を覗き込んだ。

目の前に広がるのは明かりひとつない、深遠の闇に支配された森。その中に浮かび上がるのは、半分に割られたかのような白い月。

もし太陽がいたのなら弱々しく浮かび上がるだけの月も、暗闇の中ではまるで女王のように燦然と輝いている。

どこからか聞こえる鳥の声。

呼びかけるように鳴いているその声に、里香子は耳を傾けた。誰を呼んでいるのだろう。

その悲しげな鳴き声は、普段はあまり考えないようにしている不安を不意打ちのように浮かび上がらせた。この空だけではなく、心にも闇が押し寄せてくる。

（今回は風邪だったから、何とか出来た。でも、もし大きな病気や手当のしようがない程の怪我人が出たら……）

それは薄氷の上に暮らしているかのように、脆いものかもしれない。

「大丈夫、大丈夫よ……」

まるで自分自身に言い聞かせるかのように、何度も呟く。

きつとこの月のせいだ。

今日の月の光は、あまりにも綺麗だったから。

「里香子？」

不安に震える心に、待ち望んだ声が響いてきたのはその時だった。窓の外を見ると、森から帰ってきたらしいシユカの姿がそこにある。透明な輝きを宿す紫の瞳が、真っ直ぐに里香子を見つめていた。

「シユカさん」

名前を呼ぶ。それは、希望を呼び寄せる呪文のような言葉。

この世界は安全な場所ではない。だからこの世界に生きると決めたのは、戦うと決めたのと同じだろう。それは武力による戦いではなく。

運命に屈せずに、生きる努力を、幸せになる努力をすることだ。

（そうよ、私が不安になってどうするの）

出来ることは少ないかもしれない。平和な場所でぬくぬくと育った自分は足手纏いかもしれない。

でも、願ったのだ。

一緒にいたい、と。彼と一緒に生きていきたい、と。

「どうした？ 何かあったのか？」

「リンちゃんか風邪を引いちゃったの。でも、大丈夫」  
笑みを作る。

「大丈夫よ。私が絶対に、治してみせるんだから」

翌日になると手当てが効いたのか熱も下がり、ようやく食欲も出るようになってきた。

もう心配ないだろう。

「よかったあ……」

里香子の隣に座っていたミリィが、涙で潤んだ瞳でそう呟く。  
その横顔を見つめながら、里香子は考えていた。これからもっと寒くなっていく。食糧も確保するのが難しくなっていくだろう。近隣の村だってそんな裕福ではないし、常に蓄えがたくさんある訳ではないだろう。生きる為の略奪が、他の者の命を奪ってしまうかもしれない。自分達が生きるだけで精一杯。その言葉は嘘や偽りではないと、里香子にも理解出来る。そして、彼らがこんな生活をしなければならぬのは、この領土を支配している領主のせいだということも。

けれど村に暮らす人達にも生活があつて、それを理不尽に奪われれば恨んだり憎んだりするだろう。それが更に差別を加速させる。

悲しい負の連鎖だ。

断ち切る術は、ないのだろうか。

今までの歴史がある。そして、それに至った理由がある。性急にすべてを解決しようと思うのは、無理なのかもしれない。

「でも何か考えなきゃいけないわ。このままじゃ……」

いずれ遠くない時期に、破滅が訪れる。

それを思うのは、最初にこの世界に飛ばされた時よりも恐ろしかった。

（シュカさん）

ふと、彼の顔が浮かんだ。フォスターを率いてきたという彼は、いつもこんな気持ちでいるのだろうか。背後に迫り来る破滅から、仲間たちを守ろうと。

## 2 - 9 小春日和

里香子は立ち上がった。

彼だつて色々と考えているに違いない。誰よりも彼こそが、この事態を何とかしたいと思っっているのだろう。

「里香子さん？」

「ごめんなさい、朝食はもう出来てるから」

廊下に出る。そしてそのまま外へ飛び出す。

「里香子？」

すれ違ったルーパリーが、その勢いに驚いたように声を掛けた。

「どうかしたのか？ リンは？」

「あ、ごめんなさい。リンちゃんはまだ大丈夫。熱も下がったし」  
緊張を含んだ声に慌てて立ち止まる。

「そうか」

ルーパリーはその様子に優しく微笑んだ。その笑顔で、里香子は彼の自分に対する心情の変化を悟った。まるで妹を見るかのような穏やかで優しい笑み。ミリーに接しているかのようだ。

「シユカなら裏にいるんじゃないかな」

「あ、ありがとう……」

慌てて誰の所に向かったのかを見透かされて、頬をほんのりと紅色に染める。

「里香子」

恥ずかしさに足早に立ち去ろうとした。けれどルーパリーは、走り去ろうとする彼女をもう一度引き留める。

「あいつは生まれたときから、魂の共有者となるべきパートナーが存在しなかった。そういう人間は、一族の守護者としてリーダーになるんだ。危険を引き受け、仲間たちが安全に暮らせるように」

「ルーパリーさん……」

何か大切なことを告げられている気がして、里香子は彼に向き直

った。見上げる程に大きい彼の、優しさを感じさせる瞳を見つめる。  
「でも今は、あいつだけじゃない。パートナーのいない男は大勢いる。……俺もそのひとりだ。だからもう、何もかも背負う必要はないんだ。ひとりでは抱えきれない荷物でも、二人、三人で持てば何とかなる。きつとな」

里香子がシユカに伝えたかったこと。それは今まさに、ルーパリーが口にした言葉だった。

「うん。私もそう思う」

それを彼の本当の仲間であるルーパリーが言ってくれた。それがとても嬉しい。

「ルーパリーさんのパートナーって、どんな人だったの？」

思わず口にしてから、後悔する。まだ癒えていない傷に触れるかもしれないと。

けれど彼は笑みを絶やさない。

「五年前はまだ子どもだったから、ゆつくりと話をすることもなかったな。生きていれば十七歳。ミリーと同じ年だ。真っ直ぐで綺麗な黒髪をした、優しい子だったよ」

「……ごめんなさい」

「いや、いいんだ。普段はこの話を誰もしようとしない。でもそれじゃあ、いつまでたっても傷は癒えない。里香子が来てからよく思うんだ。俺たちには、もう少し違う生き方もあったのかもしれないって」

遠くを見つめているかのような瞳。彼が見ているのは、もう戻ることのない遠い過去なのだろうか。

「ルーパリーさん……」

「シユカを頼む。あいつもきっと、里香子に惹かれてる。一族のしがらみや運命なんてねじ伏せてやりたくなくなるくらい、夢中にさせてやれ」

「む、夢中って」

頬が染まるのを自覚して、慌てて顔を手で覆い隠す。

「無理ですよ、私なんか。全然可愛くないし……」

「里香子は可愛いぞ。俺も一時期、夢中になりかけたくらいだから」

あまりにもさりげなく告げられた言葉に、赤面していたことも忘れて見上げた。交わされる視線。彼の瞳はあくまでも優しい。

「あいつを頼む」

再び告げられた言葉に、今度は真摯に頷いた。

その騒動が起こったのは、それから数日後。まるで春のように暖かい日だった。

その暖かい陽射しに惹かれ、里香子は洗濯物を持って外に出ていた。吹く風も、いつもの冬の気配を感じさせる風ではない。

（こういうのって、小春日和って言うんだっけ？）

真っ白なシャツが穏やかな風に靡く。里香子は少し微笑んだ。

もう里香子の頭には、元の世界も自分を召還したという魔導師も存在していないと同じだった。

自分の望んだ場所で、生きていける幸せ。ただそれだけ。

洗濯物をすべて干し終え、空になった籠を手にかの中へ戻ろうとすると、からん、と乾いた音が反対側から響いた。その音に誘われるように、里香子はその方向へ向かう。

「シュカさん……」

そこにいたのはシュカだった。

少し伸びた黒髪を無造作に束ね、暖かい陽射しに上着を脱ぎ捨てている。

冬の準備なのだろう。厳しい自然に痛んだ建物の修繕をしていた。どう言葉を掛けたらよいかわからずに、ただその後ろ姿を見つめる。



## 2 - 10 まだ見ぬ春

「里香子？」

その気配に気が付いたシユカが振り向く。

「どうした？」

「洗濯をしていたの。今日はとても良い天気ね」

「そうだな」

シユカの瞳が、天へと向けられる。高く青い空には無数の白い雲。風に流れてどんどん姿を変えていく。

先日のルーパリーとの会話を思い出して、里香子は小さな溜息を付く。

彼の幸せを願う気持ちはルーパリーにも負けない。けれど彼の一番大切なものは仲間。それはどんなに愛してもきつと変わらない。

一族よりも恋を選ぶ人ではない。わかっている。

わかっているのに少し寂しく思うのは、やはり異世界の価値観で恋愛をしようとしているからなのだろうか。

けれどその溜息を、彼は疲れていると思ったのか。自分の肩ほどの位置にある里香子の黒髪を優しく撫でる。

「いつも苦勞させて、すまないな」

不意打ちだった。

（そ、そんな長年連れ添った夫婦みたいな……）

頬を染めながらも、まるで大好きな飼い主に撫でられている猫のような気分になって、里香子は瞳を細めた。彼にとって大切なならばそれは自分にとっても大切なもの。今は二人で、力を合わせて守ることが出来たらそれでいい。

これから先。そう、厳しい冬が終わり、春が訪れる頃には。

冬を乗り切った安堵で、きっと彼の心も和むだろう。子どもたちも少しずつ大きくなっていく。それから考えればいい。それまでは、心も彼と一緒に寄り添って困難に立ち向かおう。

春。

まだ見ぬその季節を思う。自然に満ち溢れているこの場所の春は、きつと美しいだろう。

だが、その静かな時間も長くは続かなかった。

「シユカ！」

顔色を変えたルーパリーが、裏庭に駆け込んできた。

「どうした？」

その様子を見て、非常事態だと悟ったのだろう。シユカの顔が瞬時に険しくなる。

「さつき見廻りに行っていたコラド達が戻ったんだが。麓に見慣れぬ男たちの姿があったらしい。遠目に見ただけだから確証はないが、その中に魔導師らしき姿があったと……」

「魔導師？」

シユカの警戒が、緊張が、触れ合っていた里香子に直接伝わる。不安になって彼を見上げた。

「大丈夫だ」

宥めるように里香子の背を優しく撫で、けれど厳しい表情のまま、シユカはルーパリーに告げる。

「とにかくすぐに全員を集める。何が目的かわからないが、用心した方がいい。女たちとその相手の男たちをあの部屋の一番奥へ。里香子もだ」

「シユカ。お前はとうするんだ」

「魔導師がいるとちょっと厄介だからな。例の仕掛けを作動させてくる」

仕掛けとは何だろう。疑問に思ったが、この緊迫した状況の中ではそれを尋ねる事も出来ない。

「わかった。……気を付けろよ」

「ああ」

シユカの手が、里香子から離れる。

思わずそれを追うように、手を伸ばした。

「里香子？」

「あ。ご、ごめんなさい」

心細そうに、服の裾を掴んだ里香子の手を、彼は握り締めた。

「ルーパリーが傍にいる。だから心配ない」

「ううん。私は大丈夫。ただ……」

ルーパリーは、シユカを見上げる里香子の潤んだ瞳を見つめていた。そう、彼女は自分のことを不安に思っているのではない。

（何故、気付かない……）

溜息が漏れる。里香子は、シユカの身を案じているのだ。

その心配そうな瞳、そして縋る腕。青ざめた頬。すべて、彼の為だというのに。

「大丈夫。仕掛けそのものは大がかりなものではないよ。魔導師の探索魔法避けた。レリコの葉というものがあってね。それは、微弱だが魔力を遮る力があるんだ。そのレリコの葉を編み上げて作った縄を、森の中に張り巡らせるだけだ。むしろ、こっちに残る俺の方が重労働だよ」

少し大袈裟にそう言うと、ようやく里香子の顔が緩んだ。

だが作業は単純だが、麓近くまで行く必要がある。その魔導師に遭遇する危険もある。だが、それを里香子に告げる必要はない。不安にさせてしまうだけだ。

「気を付けてね」

その言葉に頷き、シユカは走り去っていった。

「俺達も行こう。色々と準備がある」

そのまま里香子の手を引いて、建物の中へと入った。そこには、シユカを除いた全員が集まっていた。

ルーパリーは全員がいるのを確認すると、少し小さめの斧を取り出す。そして、一番奥の部屋にある壁に向かってそれを振りかざした。

「この奥に、隠し部屋があるの。私達が入った後、また壁を修復し

て入り口を隠すのよ」

ミリイーが説明をしてくれる。彼女は小さな女の子達にそれぞれの荷物を持たせ、ルーパリーが開けた小さな穴から次々と中へ入るように指示していた。

「里香子さんもこれを持って中に入ってね。水と食糧よ。ちょっと暗くて狭いけど、子供たちが声を上げたりしないように見ていて欲しいの」

手渡されたものを持って、里香子も促されるままに壁の奥へと入る。灯りはなく、昼なのに薄暗い。だが思っていた以上に中は広かった。六畳くらいはあるだろうか。床には防音の為か、それとも防寒の為か、乾いた布が敷き詰められていた。一番奥に小さな子供たち。そして年齢順に並んで、最後に里香子。その周囲を守るかのように、少女たちの未来の夫である男たちが座った。

## 2 - 11 希望なき未来

ミリィーは何度も荷物を持って往復している。水や食糧、そして防寒の為の毛布や衣服のようだ。

「これで全部ね。全員いる？ 大丈夫？」

人数を数え、確認したミリィーは。

「何があっても、何が聞こえても、絶対に声を出したら駄目よ。大丈夫。ここは安全だからね」

そう告げると、隠し部屋から出て行つた。

「ルーパリーさん。ここをお願いします」

「わかった」

その会話を最後に、外部からの光が遮断された。新たな板をかぶせ、釘を打つ音が響き渡る。更に、その上から防寒の為に壁に貼っていた布を被せているようだ。

「……ミリィーさん、は？」

ぼつりと呟いた里香子の声に応えたのは、ある男性の声。暗すぎて、それが誰なのかわからなかった。

「女がひとりもないのは不自然だから、彼女が残ることになっている。前々から、こういう時はそうしようと決められているんだ」

いつも彼等は、覚悟をしているのだ。何かあった時にどう動けばいいのか。どうすれば、生き残れるのか。

「大丈夫」

壁の向こう側から、ミリィーの囁きが聞こえてきた。

「でも」

「そんなに心配しないで。少し大袈裟だけれど、万が一の事を考えただけ。お兄ちゃんもすぐ戻ってくるし、そうしたら出られるからね」

ミリィーの声は明るかった。その声に、里香子もようやく落ち着きを取り戻していく。

（そうよね。まだ何かあるって決まった訳じゃないんだし）  
もう二度と、五年前のような悲劇が起きないように。

仲間と別れたシュカは、ひとり山道を下っていた。

道らしい道はほとんどないというのに、まるで平地を歩いているのと変わらない速度だった。鬱蒼とした暗い森の合間から点在する民家が見えてきたところで、彼は立ち止まった。

慎重に、周囲の気配を探る。まだ人の気配は感じない。だが気配を感じる場所まで近付くのは危険だった。

この辺りでいいだろう。そう判断したシュカは、背負っていた縄を下ろす。レリコの葉を使った探索の魔法避けの仕掛けだ。それを木に登って地面から高い位置に張り巡らせる。二力所。三力所。

あまり一点に集中させると、かえってその方向が怪しまれるから、まったく関係のない場所にも何個か設置しておく。

だがそれが何処まで有効なのか、魔力を持たない彼らにはわからない。魔導師の実力もかなり個人差があると聞いている。単に森に迷い込んだ冒険者のような者ならば、大して驚異ではないが、それが王宮の魔導師、しかも異世界から一人の女性を召還する事すら出来る力の持ち主だとしたら話は別だ。

それでも、打てる手はすべて打っておくべきだろう。仕掛けを設置し終えて、迂回しつつ里香子の待つ家へと帰ろうとする。

「……誰か」  
だが。

不意に聞こえてきた声にシュカは立ち止まった。まだ若い女性の声だろうか。それは今にも途切れそうに弱々しい。

それでも用心の為に腰の剣を抜きながら、その声の方向へ歩いていく。

「助けて……」

声は崖の下からだ。姿勢を低くしてそつと覗き込むと、ひとりの少女が崖から突き出すようにして生えた木に、必死に捕まっている。この辺りは深い森のせいで視界が悪く、覆い茂った草むらのせいで崖があることもわからなかったのだろう。

そつと覗き込むと、陽光を反射して煌めく金色の髪。馴染みのないその色に、瞳を細めた。彼女のしがみついている場所はそう遠くない。もし男なら、腕の力だけで這い上がることが出来るだろう。

気配を感じたのか。必死にしがみついていた茶色の髪をした女性が顔をあげる。その顔を見た途端、シユカは思わず手を伸ばしていた。その姿は妹のミリーと同じ年くらいの少女だったからだ。

差し伸べた腕に、必死にしがみつく茶髪の少女。その身体は細くて軽く、大して力もいらずに助け出すことが出来た。

「ありがとうございます。助かりました……」

俯いたまま、彼女は震える声で必死に言葉を紡ぐ。だがその装いは村娘のものではなさそうだ。動きやすさを考慮しているが、上等な絹の布地。美しく磨かれた茶色の巻き毛。

（貴族の娘か）

助けなければよかった、とまでは思わないが、関わりたくない人種だ。まだ立つことも出来ない少女を置いて、シユカはその場を去ろうとする。きつと向こうも関わりたくはあるまい。

忌まわしき黒髪の人間などと。

「ま、待つて……ください……」

だがその少女は、まだふらつく足取りで必死に後を追ってきた。

「お願いです、少し話を聞いて下さい。……フォスターの方でしょう?」

魔導師の気配を感じた者がいる。まだ少女とはいえ、この土地にいる貴族の娘ならばあの男と関係がある者かもしれない。油断をするのは危険だ。

けれど今は仲間と離れ、ひとりきりでいるという身軽さが、シユカを立ち止まらせる。彼女の口調からして、ただ助けて貰った礼を

言いたい訳ではなさそうだ。

「フォスターに、何の用だ」

そのまま彼女の言葉に耳を貸さずに立ち去れば、何も変わらなかつただろう。この国も、彼らの生き方も。それは急激な変化もなく、つかの間の平和は得られる代わりに、少しずつ終焉に向かっていく希望なき未来だったかもしれない。



### 3 - 1 接触

ほんの少し前まで春のように暖かく注いでいた陽射しは、急に心変わりしたかのようにその姿を変えてしまっていた。強い風にどんどん流れていく灰色の雲の切れ間から垣間見える光は白く、風も次第に冷たくなっていく。

少女とシュカは向かい合っていた。

茶色の髪の少女は真正面から宝玉のような紫の瞳に見つめられ、気圧されたように口を閉ざす。それでもまだ力の入らない足を必死に踏み止めて、彼に向き直った。

「これを持っていた人のことを、ご存知ですか？」

上等の絹に包み、大切そうに懐に入れていたものを彼女は取り出した。シュカが目を向けると、そこにあったのは古いネックレス。金や銀細工ではない。複雑に編み込んだ綺麗な色の紐の先に、木彫りの彫刻があった。鷹と鳶のような紋様。

「……これは、フィーナの」

思わず口にしたのは、五年前に殺されてしまった少女の名前。見覚えのある紋様だった。

フォスターの女性は婚約者が決まると、相手の家に代々伝わる紋様のネックレスを、婚約者の母親から渡される。鷹と鳶の紋様は、彼がよく知る相手の家に伝わっていたものだった。

何故それを、貴族の令嬢らしきこの少女が持っているのか。

「……フィーナ。彼女は、フィーナという名前だったんですね……」

彼女の緑色の瞳から、涙がこぼれ落ちた。

その名前を知って、心から喜んでいいる。そう感じさせる涙だった。

「わたしは、シアと言います」

絹のドレスが汚れることも気にせず、地面に座った茶色の髪の少女はそう名乗った。

「本当は五日後に来たかったのですが、家を抜け出すチャンスが今日しかなかったものでこの森に来ました。何処にあるかはわかりませんが、きつとこの山の何処かに彼女が眠っていると、そう思ったのです」

五日後。

それは彼女たちの命日となった、忌まわしき日。

シアと名乗った少女から離れた場所に、同じように座っていたシユカはその言葉に俯く。

もう六年目になろうとしているのだと、気が付いて。

「けれどすっかり道に迷ってしまつて。木が途切れた場所に行けば、道を見つけられるかもしれないと飛び出したら……」

そこは森の切れ間ではなく、崖だった。

「助けて頂いてありがとうございます。フォスターの方に助けて頂けるとは、思ってもいませんでした」

丁寧に頭を下げる様子から、シユカは目を反らした。

「これは五年前、わたしの友人に預かったものです。とても大切なものだけれど、明日も遊ぼうっていう約束の印だと言って。わたしは初めて出来た友に夢中になり、離れたくないと散々泣いて困らせてしまつたのです」

「……」

懐かしむように、手のひらに乗せたネックレスを見つめるシアと名乗った少女。

五年前までは、女や子どもたちも普通に麓まで出て畑を耕したりしていた。出逢う可能性がまっただなかつた訳ではない。

けれどあの頃から、いやもつとずっと前から、フォスターに対する差別は存在していた。いかに子どもとはいえ、友人になれることなどあるのだろうか。

シユカの警戒を感じ取つたのだろう。彼女は少し寂しげに言葉を続ける。

「本当は、ただ彼女の冥福を祈る為にここに来たのですが……。フ

オスターの方と接触することが出来たのは、彼女の魂が導いてくれたからかもしれません。本来ならば、許可なくわたしの一存で話すことは許されないことでしょう。けれど、わたしはこの機会を逃したくない」

ただ悲しげに、寂しげに話していた彼女の瞳が、まるで雨が降った後の森のように輝いた。そこに感じられるのは、強い意志。

「彼女を殺したのは、わたしの父です」

それは憎しみすら感じさせる声。

「ですがわたしにとっては父というよりも先に、わたしの大切な友人とその家族を殺害した殺戮者です」

父といっても顔を合わせる機会などほとんどなかった、と彼女は言う。

「わたしは昔、父にとっては何の価値もない娘でした。美しい姉といつも比べられ、部屋にこもりがちで。そんな時に出逢った友は、わたしにとっては何よりも大切な宝だった……」

自慢の姉は流行病で、婚約者が決まる前に死んでしまった。

そして年頃になったシアは周囲が驚くほど美しく成長し、父の態度が突然変わる。

けれどどんなに優しくされても、褒められても嬉しくなどなかった。亡くなった姉の形見の宝石まで持ち出して自分を着飾ろうとする父に、嫌悪しか覚えなかった。

それでも父に対して従順な娘を演じ続けてきたのは、いつか彼女の仇を取りたいと思い続けていたから。

「……陛下は、この国の在り方を変えようと戦っておられます。自分たちの利益しか考えない貴族を排除し、真に国民の為の国を作ろうと。どんな階級のどんな人間でも、犯した罪は償わなければならぬ。どうかその為に、力を貸して欲しいのです」

頬に冷たい雫を感じた。

見上げると、晴れ渡っていた空は姿を消し、周囲は薄暗くなっている。天はあの明るい太陽が姿を隠してしまうと、まったく違った顔を見せる。

「……雨、か」

ぽつぽつと降り続ける冷たい雨。その雫を全身で浴びながら、それでもシユカはその場から動かなかった。

その手には、フィーナの形見となった古いネックレス。雨に濡れないように、そつと布で包み込む。これを彼に託したあの金の髪の少女の姿は、もうなかった。

明確な返事を、彼女は求めなかった。

ただ自分の想いと王宮の今の状況を語り、考えてみて欲しいと告げて去っていった。

### 3 - 2 雷鳴

雨は次第に強さを増していく。

容赦なく降り続ける雨が身体を冷やす。けれどそれを顧みることもなく、シュカはただ立ち尽くしていた。

山の暮らしの状況は、年々厳しくなっていく。

今の王が、彼女の言うように誠実な人物なのだとしたら。あの罪を暴いて償わせ、この国を正しい方向へと導いてくれるのなら。少しは自分たちの生き方も変わってくるのだろうか。

山奥で凍えるような暮らしではなく。食糧も薬も少なく、ちょっとした病で命を落としてしまうような生活から仲間を救えるのだろうか。だとしたら彼女たちに協力し、あの事件の首謀者に罪を償わせる為に動くのが正しいのか。

そう、彼女が言っていたように。

罪は償わなくてはならない。どんな階級の、どんな人間だとしても。

(……罪)

泥棒、と初めて出逢ったときに里香子が叫んだ言葉が蘇る。生きる為とはいえ、罪を犯してきたのは自分も同じなのだ。もし、彼らが裁かれこの国が平和で平等な世界になったとしても。

罪を償わずに、フォスターがその世界に受け入れられることはない。自分たちが害した者もまた、この国に住まう人間なのだから。

彼が裁かれるのなら。

自分たちもまた、裁かれなければならない。

それでこそ、平等で平和な世界。

(里香子……)

その時、シュカが思い浮かべたのは、ただ里香子の笑顔だけだっ

た。

今まで共に生きてきた仲間や、たったひとりの妹であるミリィーではなく。

どこまでも明るく優しい、彼女の笑顔だけ。

初めて出逢った、あの時。いくら黒髪の女性だったとはいえ、村で平和に暮らしていた彼女をあんなにも強引に連れてきた。本当はあの時からもう、惹かれていたのかもしれない。自分でも気付かなくなままに。

不自由な山奥の暮らしに不満も言わず、それどころか力になりた  
いと、会えてよかったと言ってくれた。誰にも渡したくない。ずつと彼女の傍で、一緒に生きたい。

愛しているのだと。

それに気付いたのが、こんな状況になってしまってからだとは。

鬱蒼とした森が、次第に暗闇に同化していく。随分長い間、考  
え込んでいたらしい。

仲間たちは心配しているだろう。何かあったのかと、不安に思っ  
ているに違いない。すぐにでも戻らなければならない。そう思っ  
ているのに身体は動かず、シユカはそのまま立ち尽くしていた。

罪を犯したのは、フォスターでも一部の者だけ。女たちや、その  
相手と決まっている男たちには罪はない。いやあの女性が言うよう  
に、この国の王が誠実な男なのだとしたら。他の男たちもそう重い  
罪にはならないのかもしれない。そうしなければ生きていけない事  
情があったのだから。

だが誰も裁かれずに終わる事は出来ないだろう。確かに被害を受  
けた者はいるのだ。  
ならば。

フォスターのリーダーであつた自分が、裁かれるべきなのだろう。  
そうすれば、すべてうまくいく。もう仲間たちは山奥に隠れ住むよ  
うな暮らしからは開放されるかもしれない。

覚悟は、いつだってあつた。仲間たちを生かす為ならば、何だっ

てやってきた。それなのに。

里香子。

その手を、放さなければならぬのだろうか。  
今になって愛していると気付いても、もう遅すぎる。一緒に生きることは許されないのだ。

ふと。

誰よりも仲間を思つて生きてきたシュカの心に影が生じる。

今のやりとりを、仲間達は誰も知らない。何も言わなければ。何も知らせなければ。例え厳しい生活だとしても、仲間たちとそして里香子と一緒に生きることが出来る。きっとこの冬さえ乗り切れば、まだなんとか暮らしていける筈だ、と。

雷鳴が、轟く。

暗い空に走る凄烈な光。その厳しく美しい光が、彼をその暗い影から呼び覚ました。

「俺は……」

天を仰ぐ。

雷鳴は彼を裁くかのように、高らかに鳴り響く。

「今、何を」

紡がれる言葉は、普段の彼からは想像も出来ない程、弱々しい。  
大切な仲間を守る為に生きてきた。

それが自分の使命であり、生きていく理由だった。それを放棄してどんな顔で里香子の前に立とうというのか。愛するということのか。厳しい生活の中、薬が手に入らないばかりに死んでいった仲間。そして何よりも五年前、まるで獣を狩るかのように追い立てられ、無残に殺されていった女たち。その無念を、今ようやく晴らせるかもしれないというのに。

まるで呪文のように、繰り返す。シュカは、里香子の名前を呼ぶ。彼女の笑顔。そして、強さを思い出すと勇気が沸いてくる気がした。もしこの先、共に生きることが出来ないとしても。

それでも、彼女を愛するに相応しい男でありたい。愛されるに相

応しい、男でありたいと。

雷鳴の中、シュカは真つ直ぐに前を見据えた。

手のひらの中の、古びたネックレス。

彼の婚約者だったひとに返して欲しいと、彼女は言った。けれど今これを彼に返すことは出来ない。

今のやりとりを、仲間たちに告げる気はなかった。聞いた話から察するに、王といえども絶対的な立場にいるわけではないようだ。王が失脚し、彼女の父がこの国を牛耳る可能性もまったくない訳ではないだろう。希望を知らなければ、失望することもない。

だから彼らを知るのは、すべてが良い方向に向かつてからで良い。「ごめんな、フィーナ。後で必ず、ルーパリーに渡すから」

まだ時間は残されている。その間に精一杯伝えよう。どれだけ、里香子の優しさに癒されてきたか。その強さに、励まされてきたか。そしてどれだけ、愛しているのか。

だから今は帰ろう。彼女の元へ。

シュカは山道を登る。一度だけ、振り向き。

そしてその後はもう振り向かず、雷鳴の轟く中、仲間たちが待つ場所へと走り出した。



### 3 - 3 黒の魔導師

だが、彼が立ち去ったその後に。

周囲に同化するように姿を消していた男が、ずっと現れた。

雷鳴轟く雨の中、その身体はまったく濡れていない。全身を覆い隠す漆黒のローブ。

魔導師だ。

シユカの向かった先を探るように見つめていたが、彼が事前に仕掛けておいた探索除けのレリコの葉がそれを妨害する。魔導師は無理にそれを探ろうとせず、興味を失ったように視線を反らした。そしてそのまま、姿を消す。

残されたのは、静寂。

その壮大な建物は、その大きさと豪華さで見る者を威圧するかのよう、そびえ立っていた。

自然を徹底的に排除した敷地内に、緑はまったく見当たらない。隅々まで石畳が敷き詰められ、これほど大きな屋敷ならば、本来あるべき庭園の場所には大きな魔方陣が描かれていた。その隣には魔導師の実技訓練所が設けられている。屋敷内の警備に当たっている者も魔導師ばかりだった。

屋敷の主ドリニティー公爵ゼネレスは、目の前に跪いた魔導師の報告に不機嫌そうに頷く。

「シアが、そんなことを。王宮に上げたのは間違いだったかもしれない」

忌々しげにそう言う公爵は、重々しい緋色のローブを身に纏っていた。もう初老とも言える年だが、他を圧倒するかのような威圧感を放っている。短い茶色の髪に、緑色の瞳は娘であるシアと同じ。

「娘を部屋に閉じ込めておけ。外部との接触も一切禁止しろ。実の父親を陥れようとするような娘だ、もう容赦は必要ない。抵抗するようななら少々痛めつけても構わん。だが、わしの唯一の娘であることには変わりはない。顔や身体に傷は付けるな」

はい、と漆黒のローブを纏った魔導師が返答する。その声は若い男性のものだった。

「それにしてもあの忌々しいフォスターのせいで、あの若造に陥れられるところだったとはな。そしてあいつらがまだわしの領土に住んでいたとは……」

苛立つ公爵が放つ魔力で、空気がぴりぴりと震える。だが漆黒のローブを纏った魔導師は、そんな攻撃的な魔力にもまったく動揺せず、その場に平伏し続けている。

「ローダ」

公爵は男の名を呼んだ。

「カインサーがどんな手を打とうと、証言もなしにわしを断罪することは出来ないだろう。そんなことをすれば他の貴族たちに冤罪だと騒がれるからな。ならば、証言する者を消せば良い。娘はもう外には出さない。残りは……」

野心に燃える緑色の瞳が、山の方角へと向けられた。

「あの忌まわしきフォスターを、完全に消し去ってしまえばいい。皆殺しにしろ」

「……承知しました」

返答を残し、ローダの姿は掻き消すように消え去る。

ようやく満足げに笑みを浮かべた公爵は、次期国王は誰がいいかと考えを巡らせていた。

若年の王は操るにはちょうど良かったが、あの青年は凡庸だった前王とは違う。出来るならば今のうちに退位させてしまった方が都合が良いだろう。そして次の王に娘を嫁がせる。

（それまでにあの娘を従順にさせておかなければな……）

いざとなれば魔法で意志を奪ってしまえばいい。必要なのは余計

なことを考える意志ではなく、自分の血を引くその身体だ。  
そうすれば遅くとも五年後には、この国は自分のものになる。  
欲に取り憑かれた男は、昏い笑みを浮べていた。

もうどのくらいの時間が経ったのだろうか。

暗い部屋の中で、里香子はきつく両手を握り締めていた。  
シユカが帰って来たら、すぐにわかる。ミリイーもすぐに知らせ  
てくれると言っていた。

それなのに、まだ彼女はこない。帰ってきていないのだろうか。  
雷鳴が轟く。

窓がないので外の様子はわからないが、屋根に当たる音で激しい  
雨が降っているのがわかる。

敵と出逢ってしまったのだろうか。それとも天気が悪いから様子  
を見ているのだろうか。

（お願い。どうか、無事で……）

腕に縋り付いてきた小さな手が震えている。子供たちもまた、不  
安を感じているのだろう。自分の不安を押し隠して微笑む。小声で  
大丈夫よ、と囁いた。

きつと大丈夫。

自分に言い聞かせるように、里香子は繰り返す。

そのとき、誰かが隣接している部屋に入ってきた気配がした。

「……里香子さん」

小さな声。ミリイーだ。

「もう大丈夫みたいだから、ここ開けるね。お兄ちゃん、帰ってき  
たから」

待ち望んでいたその言葉。だが大丈夫だと言いながらも、ミリイ  
ーの声は少し固い。何かあったのだろうか。

男たちが先に出る。子供たちを次に出し、最後に里香子が隠し部

屋から出た。

「シユカさんは？」

「奥でまだルーパリーさんと話してるわ。先にご飯の支度をした方がいいかも」

何の話だろう。気になったが、彼が帰ってきてくれたのなら、もう不安になる必要はない。

「そうね。今日は寒いから暖かいスープを作ろうかな。水を汲んでくるね」

「あ、私が行く。すごい天気だし」

大丈夫、と里香子は水桶を持って出口へと向かった。

その日の食事は、いつも以上に賑やかだった。

ほんの少し前まで、誰もが不安をそれぞれの胸に抱いていたというのに。いや、だからこそ必要以上に陽気に振る舞ったのだろうか。それでも笑い声の響く食卓は、決して豪華ではない食事でも楽しく明るいものにしてくれた。

（みんなが笑い合っていれば何とかなる気がしてくるよね）

緊張して疲れただろう子どもたちを、今日は早めに休ませるようにとミリーに頼み、里香子は残って後片付けをしていた。水は冷たいが、わざわざお湯を沸かそうとは思わなかった。これくらいで音を上げていたら、冬は越せないだろう。

食器を綺麗に洗い、少し傾いた食器棚にしまい込む。ふと机に目をやれば、一人分だけ残っている食事。

（シユカさん、まだ戻らないのかな……）

一度帰ってきたにも関わらず、彼は念の為に反対側も見てくる、と言いつつ残してすぐに見張りに出てしまった。帰ってきたばかりなのだから自分が行く、とルーパリーは引き留めたが、それを振り切るようにして行ってしまったのだ。

調理室は入り口近くにあり、彼が帰ってきたらすぐにわかる。それまでここで待とうと、里香子は針仕事を持ってきて机に座った。

蝋燭の炎が隙間風に吹かれる度に、壁に広がった影がゆらゆらと揺れる。この頼りない灯で過ごす夜にも随分慣れた。暗闇に囲まれた夜は少し怖くて、そして安らぎを感じる。こうしていると向こうで過ごしていたまるで昼間のように明るい夜が、夢の世界のようだ。そのままどれくらい時間が過ぎただろう。

机に出したままの一人分の食事はすっかり冷え切り、針仕事をする指先も震える。外を見上げると、宵闇に反するような白い羽根がふわふわと舞っていた。

「あ……。雪？」

冷たい雨は、いつしか雪に変わっていた。きっと初雪だろう。この雪の中、彼は何をしているのだろう。どこにいるのだろう。たったひとりで。

針仕事を籠にしまい、里香子は外套を取り出した。蠟燭を吹き消し、代わりにランプに灯を灯す。

何処にいるか、わからない。

けれど探さないと彼はもう戻ってこないような気がした。

里香子は外套を羽織り、ランプを手に外に出る。雪が混じる風が、その細い身体を叩きのめそうと襲いかかってくる。けれど里香子は、俯かなかった。ただ前を見据えて、もうすっかりと馴染んだ山道を迷いのない足取りで歩いていく。

もっと雪が降ればいい、と初めて思った。

降り続ける雪に、すべてが埋もれてしまえばいい、と。

この白い雪が降り積もり、その白さで罪も消えてしまえばいい。愚かだとはわかっていても、手を伸ばさずにはいられなかった。

けれど雪は、すべてを拒絶するかのように冷たくて。

逃げるように家を出てきたのは、あれほど強く決意したにも関わらず、仲間や彼女の顔を見ることが出来なかったからだ。

こんなにも自分は、弱かったのだろうか。

常に先頭に立ち、どんな困難も絶対に退けてみせると戦ってきたフォスターのリーダーとしての自分は、何処に行ってしまったのだろう。

もしこれから先、一族よりも里香子の姿が先に思い浮かぶようなことがあれば。

不意に蘇ったのは、ルーパリーの言葉。

この言葉を聞いたのは、いつのことだったか。

そう、確かにあの時、自分たちもまた裁かれなければならないと思った時に浮かんだのは、里香子の笑顔だった。

人を、誰かを愛するということは、引き替えに何かを手放すことなのか。例えば何よりも仲間を優先し、必ず守るのだと誓った固い決意を。

もちろん仲間を大切に思う気持ちは変わらない。ただ何も知らなかったあの頃とは違い、僅かに躊躇う気持ちが存在する。それだけだ。

もう少しだけ雪の中で頭を冷やしたら帰ろう。そう思い、空から舞い落ちる雪を見つめる。

「やっと、見つけた」

そんな中で不意に与えられた温もり。

背後からそっと抱きついてきたのは、里香子だった。

凍えた腕に添えられた優しい手。彼女は目に涙を溜めながらも、それでも明るく笑顔を作っていた。

「よかった、見つかった。雪はどんどん積もるし、道はわからなくなるし、どうしようかと思ったよ」

赤くなった頬。外套の上に降り積もった雪。どれだけの時間、この悪天候の中を彷徨ったのだろう。けれど触れた腕は、何故かとても温かくて。

言葉には出来ないこの想いがすべてわかつているかのように、寄り添ってくれる。その温もりが、どれだけ優しく心を癒してくれるのか、彼女は知っているのだろうか。

そしてその優しさは、シユカの闘志を静かに蘇らせた。

そう、戦いは終わったのではない。これから始まるのだ。一族の存続が、これからの遣り取りに懸っている。

仲間とそして彼女を守る為に戦う。罪に苛まれるのは、すべてが終わった後でいい。

「里香子」

自分を抱き締める小柄な身体の、凍える背中を撫でる。

「帰ろうか。俺たちの家に」

どんなに冷たい雪が降ったとしても、手を繋げば温もりを感じる  
ことが出来る。その温もりが戦う意志になる。

このときに彼女が追ってきてくれなかったら、ここで戦う意志を  
固めることが出来なかった。これから来る、厳しい試練を迎え撃つ  
ことが出来なかったかも知れない。



### 3 - 5 湖のような

闇が意志を持って動いたかのように見えた。

鬱蒼とした森の、夜の闇は深い。常人ならば手探りでしか動けないだろう暗闇の中、黒衣の魔導師がまるで光の下を歩くかのような迷いのない足取りで、歩いて行く。土の上に残された足跡が、かろうじて彼が闇そのものではなく、生身の人間だと証明していた。

昼間、太陽の光を浴びた地面は雪がそのままの姿で留まることを許さず、液体に変えてその中に吸収してしまっていた。けれど、吹く風に晒され続けた樹木は冷え切っていて、枝の間に白い雪が消えずに降り積もっている。それはシユカが配置したレリコの葉の上にも積もり、探索魔法避けとしての効果をなくしてしまう。

黒衣の魔導師は、周囲をゆっくりと見渡した。かすかに光るその掌。発動された、魔法。

「……あそこか」

そして彼はある一点の方向へ、迷わずに真っ直ぐ歩いて行く。主の命令は、山に隠れ住む民の抹殺。迅速に、そして決して証拠を残さずに実行しなければならぬ。

主の敵であるセリドリー国王の傍には、あの男がいる。

他を凌駕する魔力を持つ、銀の魔導師。公爵令嬢からの連絡がないことで、既に異変を感じているだろう。

一力所に集まっている人間を全滅させるには大きな魔法で薙ぎ払ってしまうのが一番確実だが、それを彼が、銀の魔導師が見過ごすことはないだろう。王都のみならず、国内ならば魔力絡みの不審な事件があれば、彼はすぐに感知する。

（さすがあの方の血を引いているだけある……）

彼の父は、偉大な魔導師だった。

彼ほど魔法という力を理解し、効率良く行使している者はいない。

今後もきつと現れないだろう。もし彼が今も健在ならば、主であるドリニティー公爵も大人しく王家に忠誠を誓っていたに違いない。主もまた魔導師であるが故に、あまりにも規格外なその力を充分に理解していた。

だがどんなに優れた力を持っていたとしても、彼はもういない。どんなに強い人間でも、死者になってしまえば生まれたばかりの赤子よりも無力だ。

ゆつくりと坂道を登る。

目的地に住む彼らもまた、無力な存在になろうとしている。

異変を感じたのは、里香子の方が先だった。

「……」

ぞくりと背筋を這うような悪寒。まるで肉食獣の鋭い瞳に射貫かれ、動けなくなる獲物のように。

「……どうした？」

先に行くシュカが振り返る。真っ青な顔で震えている里香子に気が付き、慌てて走り寄ってきた。

「気分が悪いのか？」

差し出した手が握った、里香子の小さな掌は震えていた。言葉を発することも出来ないその様子に、シュカは跪き里香子を支えるように寄り添う。尋常ではない様子に座らせて休ませようとするが、彼女はまるで子どものように激しく首を振って立ち上がるようにする。

「里香子？」

「魔導師が……。みんなが、危ない……」

途切れ途切れに伝えられた言葉。シュカは紫色の瞳を見開く。

「急がないと。間に合わなくなる……」

それだけ告げると、走り出した。

溶けた雪でぬかるんだ道。山道に慣れた者さえ足を取られる悪路

を、里香子はまるで誰かに導かれるかのようにどんどん走っていく。シユカは重ねて問うような真似はせず、その後を追った。

一瞬だけ、里香子の瞳が輝いたように見えたのは、気のせいだったのだろうか。

古びた建物は、もう静かに眠りにつこうとしていた。

見張りの為に起きていたルーパリーは、里香子の姿がないことに気が付いて調理室へと向かった。そこに残された一人分の食事。そして里香子の外套とランプがなくなっている。

「……シユカを探しに行ったのか？」

窓を開けて外を見ると、雪こそやんでいるものの、空は闇と暗雲が支配し月どころか星さえ見えない夜だ。しかも道はぬかるみ、冷たい外気は外套を羽織っていても容赦なくその身を苛むだろう。

そんな中、シユカの身を案じて夜の闇に飛び出していったのか。

ほんの少しだけ彼が羨ましく感じたのは、里香子の深い愛情に感動したからだろう。

まるで包み込むように深く愛する彼女の愛は、底のない湖のようだ。きつとどんなことがあっても、その湖は決して干上がることはないのだろう。

ルーパリーは調理室の蝋燭に火を灯し、冷え切って帰ってくるだろう二人の為に、暖炉に火を入れた。使ってしまった分の薪は、明日シユカに集めさせればいいだろう。

闇に灯る赤い光を見つめながら思い出したのは、もう失われた婚約者のことだった。

非業の死を遂げたとき、彼女はまだ十二歳だった。

その時は幼くて、妹のようにしか見ることが出来なかったけれど。生きていれば誰よりも大切に思い、愛する存在になっていただろう。「フイーナ」

五年もの間、一度も口にする事のなかった名前を、呟く。  
「……生きていれば、お前はどんな女性になったのだろうな」  
どうして人は、叶うことのない未来を夢見てしまうのだろう。ど  
うして叶うことはない、分かり切っているのに願うのか。  
自嘲の笑みを振り切るように、燃えさかる炎の中に薪を放り込ん  
だ。

### 3 - 6 炎の蛇

誰かが歩いてくるような気配を感じたのは、その時だった。

里香子たちが帰ってきたのかと思ったが、足音はひとつだけ。シユカと出逢えず帰ってきたのだろうか。それともシユカが、里香子が探しに行ったと知らずに真っ直ぐに帰ってきたのか。もしシユカがひとりならば、里香子を捜しに行った方がいいだろう。そう思い、ルーパリーは外へ出る。

だがそこに立っていたのは、闇を纏ったひとりの見慣れぬ男。その黒い服装は、魔導師のものだろうか。

「誰だ？」

問うまでもなく、溢れ出る殺気が言葉よりも雄弁にすべてを物語っている。

それでも声を掛けたのは、中にいる仲間たちにこの異変を伝えることを願って。まだ起きている男もいるだろう。ミリーもいる。

それは加勢を期待していたのではなく、子どもたちを裏口から逃がす為だ。

「……強力な魔法が使えたなら、苦しまずにすんだかもしれない。だが虐げられて生きる苦痛に比べれば一瞬だ。すぐに、楽になる……」

見張りをしていたので剣は身に付けていたが、それでもいつも使う大剣と比べると威力は落ちる。それでも素手よりはいいだろう、とルーパリーは剣を構えた。

どうせ魔導師相手に剣など通じない。それなのに何故、剣を抜くのか。

それは、意志。

戦うという、強い意志の現れだった。

「楽になることなど、最初から望んでいない」  
生きることが出来なかった仲間がいる。

幼い子どもを残したまま死んでいった母親。結婚式を間近に控えていた若い乙女。

それぞれに夢見ていた未来があっただろう。

彼女たちの為にも、生きなければならない。子どもたちを生かさなければならないのだ。

この騒ぎに、ミリィーは気が付いただろうか。子どもたちを連れて行ってくれるだろうか。そして里香子とシュカは。

剣を構えながら問答するのは、時間稼ぎをする為に。

だが黒衣の魔導師はルーパリーではなく、ひっそりと静まりかえっている建物に向かって手を掲げた。その掌から炎が生まれる。建物は木造であり、川までは遠い。ほんの小さな炎が致命傷になる恐れもある。

「！」

ルーパリーは背後にある建物を庇おうと、その前に飛び出す。だがその掌から生み出されたものは、小さな炎などではなかった。

地を這う、炎を纏った蛇。その大きさは小さな子どもの身長くらいはあるだろう。動きを止めようと剣を繰り出すが、蛇はまるで炎そのもののように実体がない。土が焼ける匂いを撒き散らしながら、炎の蛇は建物の壁を這い上がる。

「……っ」

蛇は屋根の上にまで楽々と到達し、たちまち炎は広がった。ルーパリーは走った。こうなっては目の前の魔導師よりも、中にいる仲間を助けるのが先だ。

建物の中に駆け込むルーパリーの姿を見て、黒衣の魔導師は僅かに笑みを浮かべた。

「この程度ならば燃え尽きてしまえば、自然の炎と区別がつかないだろう。証拠も証人も、残らない。……これで、終わりだ」

手を振ると、炎の蛇はたちまち消え去る。だがすでに建物に燃え移った炎は、消えることなく勢いを増していく。そしてその上から結界を張り出口を塞ぐと、黒衣の魔導師は瞳を細めて目の前の惨状

を見つめた。

目の前で剣を構えていた黒髪の男は、決意に満ちた瞳をしていた。適わないとわかっている。けれどそれで仲間を逃がす時間が作れるのなら、死ぬことも恐れないだろう。

あの瞳をしている者は厄介だ。捨て身ほど怖いものはない。だからこそ仲間を先に攻撃した。彼ならば必ず戻ると思ったからだ。

そして予想通り彼は、仲間を助ける為に燃えさかる炎の中に駆け戻った。この結界は並の魔導師には破れない。まして魔法に対して何の抵抗も持たないフォスターならば尚更だ。

後はすべてを見届けるだけ。

黒衣の魔導師は、燃え盛る炎にその身を紅に染めながら、炎がすべてを飲み込んでいく光景を表情を変えることなく見つめていた。

ふと顔を上げると、視線の先が赤に染まっていた。

それはいつか見たあの夕陽のように美しいものではなく、不吉な昏い赤。

「ああ……」

それが何かを認識したとき、里香子は力なく地面に膝を付いていた。

焼ける木の匂い。炎はまるで天を目指すかのように高く昇って行く。その勢いは、こんなに離れていても息苦しく感じるくらいだ。

遅かったのかもしれない。

もう立ち上がる気力もなく、その場に蹲る。燃えていく。みんなで大切にしてきた家も、一生懸命蓄えた食糧も、何よりも大切な仲間さえ。炎はすべてを灰にしてしまう。

「里香子」

その時、背後から追いついたシユカの声がした。地面に倒れ伏すようにして座り込んでいる里香子に気が付き、走り寄ってくる。

「どうした？　気分が悪いのか？」

そうして異様な気配を感じて里香子の視線の先を辿り、その惨状を目の当たりにする。

シュカは一瞬も躊躇わなかった。

里香子をその場に残し、勢いを増す炎に駆け寄る。その前に佇んでいる魔導師の存在には気が付かずに。

仲間を、妹の名を呼びながらほとんど焼け落ちた扉に手を掛けた。炎は新たな獲物も燃やし尽くそうと、その手を更に伸ばしていく。仲間の安否に気を取られているシュカは、肌を焼く炎にも構わずに扉を強引に押し開けようとする。けれど魔法で封じられている扉は、どんなに力を込めても動かなかった。



### 3 - 7 銀の光

荒れ狂う暴君と化した炎は、シユカにも襲いかかる。焼け落ちて崩れる柱。その姿が、紅に飲まれて見えなくなってしまう。

「いやあっ」

あまりの惨劇に思考さえ凍てついたかのように蹲ったままだった里香子は、それを見て悲鳴を上げた。彼の名を呼び続けながら、自らも炎の中に飛び込まんばかりに走り寄る。

「……女か？ もうひとりいたようだな」

その悲鳴は静かにそれを見守っていた黒衣の魔導師に、彼女の存在を気付かせてしまう。彼は視線を声の聞こえた方へと向け、走り寄る小柄な黒髪の女性を見つけた。

最後のひとりだ。

手を掲げる。そこに宿るのは、炎の蛇。赤い光が里香子を照らし出す。

その背に向けて、炎が迸った。

紅蓮は彼女も飲み込み、すべてが終わる。その筈だった。けれど。

不意に、黒と赤に彩られていた世界に光が射した。

それは銀の眩い光。その光に守られた里香子が、ゆっくりと振り返る。

「……何だと？」

黒衣の魔導師の瞳に、初めて動揺の色が浮かんた。

彼女に触れた途端、炎の蛇はまるで彫刻になったかのように、燃え盛る炎の形すら残したままで凍りついた。光はどんどんと強くなり、まるで真昼のよう。里香子の身に宿る光は、やがて弾けるかのように、霧散した。

里香子は、ゆっくりと瞳を開いた。眩い光は消えても、銀はまだ煌めいている。

両手を見つめた。自分の記憶にあったよりも、白くて細い手。

「シュカさん。助けなきゃ……」

唇から溢れ出た声も、聞き慣れた自分の声とは違っていた。心地良く響く、高くて綺麗なソプラノの声。里香子は首を傾げる。肩にさらりと流れた銀は、腰まで長く伸びた美しい銀の髪だった。

彼女はまだ知らない。

その姿がすっかり変わってしまったことに。

銀細工の女神像のような美しい姿は、この世界で生まれる筈だった自分の、本来の姿であることを。そして身体の中から溢れ出てくるこの力が、この国に名を残す偉大な魔導師であった本来の父親から、受け継がれた魔力であることも。

それはどちらにも生まれる前に掛けられた呪術で、封じられていたものだった。

それを里香子は愛する人と仲間を助けたいと心から切望し、その強い意志の力で呪術を自ら解呪したのだ。

けれどまだ今は何も知らず、けれど知らないまま、シュカを助けたようにした。

彼女には見えていた。

炎の中に倒れ伏すシュカの姿。そして、建物の中で身を寄せ合って苦しむ仲間たちの姿が。

「今、助けに行くから。待っていて」

里香子は燃え盛る炎を見つめる。

ただそれだけで、狂ったように燃えていた炎は、まるで幻だったかのように一瞬で消え失せた。銀の美しい髪を靡かせて、里香子は走る。

「シュカさん」

その白い手足が、絹のように美しい髪が炭で汚れることも厭わず、

里香子は倒れていたシュカを抱き上げる。愛しげにその頬に触れると、痛々しい火傷の痕が跡形もなく消え去った。最初から存在していなかったかのように、完璧に。それと同時に、建物の中にいた仲間たちも安全な場所に移動させていた。もちろん彼らの怪我もひとつ残らず消え去っている。

「馬鹿な。こんなことが、出来る筈が……」

目の前で繰り広げられた奇跡に、そして突然姿を変えたその女性の持つ、あまりにも圧倒的な魔力に、黒衣の魔導師は途切れ途切れの言葉を発することしか出来なかった。有り得ない。彼の頭はただその一言で埋め尽くされてしまう。

こんなに凄まじい魔力は、見たことがない。彼女が言葉を発する度に、空気まで震えるかのような。国一番の魔導師と言われている王の側近、銀の魔導師イドをも凌ぐだろう。

「銀の魔導師……。そうか、お前が」

確かにその繊細で美しい容貌は、彼によく似ている。

あのイドの父親でもある偉大な魔導師の血を引き、前王の妹を母に持つ。

カインサーの母親が予言した、彼の運命の女性。

「召還は失敗したと聞いていたが……。まさかこんな所にいたとはな。確かにその力を手に入れば、大陸など容易に支配出来るだろう」

それだけの力を、彼女はその美しい身体の中に秘めている。

皮肉にもドリニティー公爵の下した命令が、この国に紛れていたこの女性を見つけ出してしまった。これだけ強い魔力を抑えもせずには放っているのだ。銀の魔導師はすぐにここに来て、そして彼女を見つけるだろう。

そしてあっさりと決着が付くことはないかもしれないが、この女性を手にした国王に彼が適うことはないだろう。

ドリニティー公爵の命運はもう、尽きている。

沈むとわかりきっている船に乗り続ける程、彼に忠誠を誓っている訳ではなかった。幸い、彼女の意識は仲間たちに向いている。

黒衣の魔導師は闇にその姿を同化させ、そしてゆっくりと消えていった。

### 3 - 8 接触

何かが割れる音がした。

誰かが慌てて駆け寄る音。何かを指示する声。色々な音が周囲で響いていたが、何ひとつ頭の中には入らなかった。

(……これは。この魔力は)

イドは、真夜中近くまでカインサーの私室にいた。

今までのこと、そしてこれからのこと。

何度も繰り返し語り合い、戦う意志と準備を重ねていたのだ。

となな時に感じ取ったのは、あまりにも大きな、大きすぎる魔力。これほどの力を持った者が、自分の父以外にこの世界に存在したのだろうか。

だが、彼女ならば。

真っ先に浮かんだのは、この世界に召還した筈のあの女性。それは次第に疑念から確信に変わっていく。

見つけたのだ。ようやく。

「イド」

身近で呼ばれた名前。腕を引かれて、ようやく視線を隣に向けた。カインサーだった。

「どうした？ 大丈夫か？」

見れば割れたのは持っていたカップだったようだ。繊細な紋様を描いていた美しい陶器が、足下で粉々になっている。

「すまない」

大きな破片をひとつ拾い上げると、左手を掲げる。淡い光が割れていた陶器をたちまち元の姿に戻した。後片付けをしようと駆けつけてきた侍女は、その様子に感嘆したように声を上げる。

「カインサー」

イドは立ち上がった。

「少し出掛けてくる。お前の運命を、見つけたかも知れない」

その言葉の意味を即座に理解したカインサーは、一瞬複雑そうな表情を浮かべる。その脳裏を過ぎったのは、公爵令嬢シアの言葉なのだろうか。

だが彼は即座に頷いた。

「わかった。気を付けろよ」

「ああ」

瞳を閉じてその魔力を感じ、そして迷うことなくその場所へ移動する。

暗闇の中、焼け焦げた木の匂いがした。

視線を巡らせると、無残に燃え尽きた建物が目に入る。山の中だろうか。随分と森が深いように感じる。その周りに座り込んでいる複数の人間。疲れ切った様子で互いに抱き合いながら、戸惑った視線をある一点に向けている。その視線の先を辿った。

イドはそこにととうとう、探し求めていた女性の姿を見つけ出す。

召還してからの期間だけではない。

父の遺した魔法書でその存在を知ってから、ずっと探し続けてきた。

何事もなく無事にこの世界に生まれれば、彼女は自分のたったひとりの妹になる筈だったのだから。父と、そして自分とも同じ長い銀色の髪。深い海のようなダークブルーの瞳は、記憶に残る母の優しい眼差しと同じ色をしている。

「エリセール……」

思わず言葉にしたのは、父が母と相談して決めたという、生まれてくる子どもの名前。本当に心から、その誕生を待ち望んでいたのだろう。

「！」

その声が聞こえたのだろう。

彼女は銀色の髪を揺らして、不安そうに周囲を見渡す。その細い

腕には、意識のない誰かを抱いていた。怯えるように、それでも守るように腕の中の身体を抱き締める。

ふと、その仕種に不安を感じた。

彼女をこの世界に召還してから、短くない時間が経ってしまったている。その間に他の誰かを愛してしまっている可能性もあるのかもしれない、と。

「く……。また魔導師か？」

建物の前に立ち尽くしていた者のひとりがこちらに気が付き、警戒心を剥き出しにして仲間を庇うように前に出た。背の高い黒髪の男だった。

（……黒髪？）

そしてようやく気が付く。ここにいた者たちは、全員が黒い髪をしていたことに。彼らはフォスターに間違いないだろう。

焼け落ちた建物。

そして彼の言葉。

イドは意識を集中させ、その場に残る魔力の残滓を探った。彼女から感じる魔力があまりにも大きすぎて容易ではなかったが、かすかに炎の魔力を感じることが出来る。彼らの住処が魔導師によって焼き払われたのは間違いないだろう。

「ここは……。ドレニティー公爵の領地、か」

更に意識を飛ばし、高い空からこの地形を見渡す。ドレニティー公爵もまた、力を持つ魔導師のひとり。彼女の強すぎる魔力を感じ取っただろう。その姿を彼に見られる前に、この場から移動しなければならぬ。

そして恐らくフォスターを襲撃させたのもドレニティー公爵だろう。彼らの存在が自らの地位を危うくすると、どうやって知ったのか。シアが彼に話すとは思わなかったが、思わぬ場所にスパイがいる可能性もある。だとしたら彼女も危険かもしれない。あるいはもう危機に陥っている可能性もある。

ようやく会うことが出来た妹と、協力者であるシア。そして証言者である彼らフォスターも、守らなければならない。

詳しい説明をしている時間はなかった。

「この場所は危険だ」

全部で何人いるだろう。イドはもう一度、周囲を見渡す。複数の人間を同時に転移させるには、かなりの魔力を使う。回復しきっていない今の身体で、それを成功させることが出来るだろうか。けれど今は、手段を選んでいる余裕はなかった。

「後で説明をする。すまないが、全員を移動させて貰う」

両手を広げる。妨害魔法はまだないようだ。イドは瞳を閉じて魔力を高めた。



### 3 - 9 眠れない夜

何処に移動するのが一番安全か。

カインサーは待っているだろう。けれど残念ながら王宮は、決して安全な場所ではない。

ここからも王宮からも遠く、妹にも彼らにも安全な場所が必要だった。

「……大丈夫だから」

不安に震えている幼い少女に、イドは微笑みかけた。こんなにも幼い少女が怯えなければならぬのが、今のこの国の状況。

変えなければならぬ。この国は生まれ変わらなければならぬのだ。

固い決意が、足りない体力を補う。光が暗闇を照らし、彼らの姿はその光に溶け込むようにして消えた。

その光があまりにも眩しくて、里香子はシュカを抱き締めたまま瞳を瞑っていた。

けれどあの炎のような恐ろしさは感じない。ただ暖かく、包み込むように優しい光。

突然目の前に現れた銀髪の魔導師は、里香子とシュカ、そしてフオスターたちも全員どこかへ移動させたようだ。

周囲を見渡すと、こんな季節にも関わらず美しい花が咲いているのが見えた。肌を撫でる風も暖かく感じる。どうやらここは美しい庭園の中ようだ。秋の少し寂しげな色の花が整然と並べられている。その手入れの行き届いた様子、そして豪華な噴水まで見える様子から、かなり高級な庭であることが感じられる。

その中にルーパリーやミリーイの姿も見えた。その無事な様子に、心から安堵する。

「何とか、無事に着いた、かな」

銀髪の魔導師はそう呟いた。額には汗が浮かんでいる。蒼白な顔色から察するに、相当の魔力を使ったのだろう。

「……あなたは」

自分の発する声に戸惑いながらも、里香子は彼を見つめた。

「あなたは、誰？　ここは何処なの？」

彼はどうやらただの魔導師ではなさそうだった。

銀色の髪に映える朱色のローブを纏い、整った綺麗な顔立ちは気品を感じさせた。身分の高い人間なのかもしれない。

「それに私のこの姿。どうして変わったの？　何かの魔法？」

焦燥から、里香子は質問を重ねる。触れてみた髪はいつのまにか腰に届くまで長く、色は彼と同じような銀色だった。声も変わっている。この姿をシユカが見たらどう思うだろう。

「俺は君たちの敵ではない。それだけは、わかって欲しい。最初からすべて説明するよ」

そんな里香子を宥めるかのように、彼は優しく告げた。その視線が里香子からフォスターたちへと移る。それを受け、警戒をあらわにしていたルーパリーは、仲間たちを庇うようにしながら鋭い視線で彼を見つめ返す。

「それを、信じる、と？」

彼が魔導師でなかったら、ここまで警戒することはなかったかもしれない。けれど彼らにしてみれば、魔導師に仲間を攻撃されたのは今日が初めてではない。五年前は多くの仲間を、そして今日はすべての仲間を失うところだったのだ。

その様子に、まずは彼らの警戒心を解くことが先だとイドは悟る。「君たちを襲った者と俺は、敵対する立場にある。俺たちの目的は……」

「……シアという女性から、聞いた」

けれどその時、目を覚ましたらしいシユカがゆっくりと身体を起こした。

イドは突然出てきたその名前に驚きながらも、黙ってその話に耳

を傾ける。もし彼が事情を知っているのなら、仲間である彼から説明して貰った方が彼らも納得出来るだろう。

シユカは視線をイドに、そしてルーパリーへと向け、それから最後に自分を抱き締めていた里香子を見つめる。その紫色の瞳が、その変わってしまった姿を見て僅かに驚愕の色を浮かべた。けれど彼は今はその姿について質問をすることはなく、目を覚ましたことに安堵して泣き出しそうなその頬を優しく撫でる。

「五年前、俺たちの仲間を殺した男は自分の父だと言っていた。そして、フォスターの友がいたと。彼女の仇を取るために、この国の在り方を変える為に力を貸して欲しい。そう言われた。その魔導師はきつと、あの女性の仲間なのだろう」

「シユカ、お前いつのまに……」

驚くルーパリーに黙っていたことを小さく謝罪し、シユカは懷から預かっていた形見を取り出し、彼に手渡した。

「彼女は嘘を言っているようには見えなかった。これを覚えているか？」

それを受け取った彼の顔が、たちまち強張る。

「忘れる筈が、ないだろう。俺がこれを忘れる筈が」

唇を噛み締めてそう言ったルーパリーの声は弱々しく震えていた。「あの日の前日、これをしていなかったフィーナに尋ねたら、一日だけ友人に貸したのだと、そう言われた。それがお前が会ったという女性なのか？」

シユカは頷く。

「きつとその話を、ドレニティーの手の者が聞いていたのだろう。身の危険を感じて君たちを魔導師に抹殺させようとした、と考えられる」

イドがそれに続けた。

だとしたら、シアは父によって幽閉されている恐れもある。助け出さなければならぬだろう。

完全に信じ切っている訳ではないだろうが、どうやら彼が敵では

ないらしいと伝わったのだろう。それを感じ取り、イドは続ける。

「俺の知る限りの事情は、すべて説明する。それにこちらから聞きたいことも多少ある。けれどその前に子どもたちを休ませた方がいい。まだ朝までは時間がある。この先の建物で休んでくれ。あそこには誰もいない」

里香子のお陰で怪我人は誰もいなかったが、疲労だけはどうにも出来ない。特に少女たちはもう限界のようだった。

話し合い、シュカとルーパリー、そして里香子の三人以外は、そこで休ませて貰うことにした。ミリーは残りたがったが、誰か子どもたちの面倒を見なければならぬ。シュカは里香子も休むように言ったが、承知しなかった。

この姿で、この状況で何もわからないまま眠ることは出来そうになかった。

### 3 - 10 運命とは

小さな建物と彼は言ったが、そこは充分に広くて美しい建物だった。

二階建ての白い建物は、周りをぐるりと美しい庭園に囲まれている。これほど広大でも、中にも外にも人の気配はまったくなかった。これほどの大きさにも関わらず、使用人もいないようだ。けれどその方が安心かもしれない。

それでもほんの少し警戒しながら、その中に入る。

魔導師である彼のものにしては、自然の光が充分に入るように工夫された空間である。そして広間から、あの庭園が見渡せた。夜の月に反射して輝く噴水の水の美しさに、里香子はしばし目を奪われる。

二階には複数の寝室があるらしく、ミリィたちはそちらへ向かった。

銀の魔導師に案内され、里香子たちは一階にあるひとつの部屋に入る。足を踏み入れると、暗い部屋にまるで電気をつけたかのような明かりが灯る。きっと彼の魔法なのだろう。蠟燭とは違い、その光は部屋の隅々まで昼間のように明るく照らしていた。

その明かりの中で、里香子は部屋を見渡す。広くゆったりとした部屋で、家具のようなものはまったくない。だが柱や窓枠などには見事な彫刻が施され、中央には座り心地の良さそうな椅子とテーブルが置いてあった。十人くらいは座れそうな大きな物だ。促され、里香子を中心にして両脇にシユカ、ルーパリーが座る。彼はちょうど三人の向かい側、里香子の真正面に座った。

「名乗るのが遅くなってしまったが、俺はイド。セリドリー国王力インサーの側近だ」

そしてイドと名乗った銀の魔導師は、視線を里香子に向ける。

「私は里香子です」

視線を受け、里香子は軽く頭を下げた。

「えっとこつちが、シユカとルーパリーです」

ルーパリーは俯いたまま、婚約者の形見だというネックレスを握り締めている。シユカは静かな瞳をして、イドを見つめていた。

「里香子」

不意に名前を呼ばれ、驚いて正面を見る。イドの翡翠のような瞳が、真つ直ぐに里香子を見つめていた。真摯なその瞳に、思わず身を固くする。衝撃的なことを言われるような予感があったのかもしれない。

「君を、この世界に呼び出したのは俺だ」

「え……」

だがそれは、想像以上の言葉だった。

どこから話せばいいか、とイドは少し躊躇いを見せる。里香子はただ言葉もなく彼を見つめた。

（この人が、私をこの世界に召還したというの？）

何の目的があつてそうしたのだろう。この変わり果てた姿も、彼がやったのだろうか。疑問は次々に沸いてくるが、何ひとつ言葉にすることが出来ない。

恐らく元の姿のままならば、ここまで動揺しなかったかもしれない。何を聞かされても隣にはシユカがいるし、仲間たちもいるのだから。そう信じていた。けれどこんなに変わり果てた姿では、それも難しいかもしれない。

自分の身に何が起こったのか。これからどうなってしまうのか。不安に蝕まれ、俯いた瞳には涙が滲む。

ひとりきりになっても戦えるのだろうか。この見知らぬ世界で。けれど。

「大丈夫か？」

耳元で小さく囁かれた声。顔を上げると、隣にいたシユカがいつもと変わらない優しい瞳で里香子を見つめていた。励ますように背に置かれた手は、とても温かい。

今までのように傍に居てくれるのだろうか。もう自分は、彼の大切なフォスターではなくなくなってしまったというのに。

でも、そうだとしたら。

シユカの紫色の瞳を見つめて頷き、里香子は真っ直ぐに前を向いた。

そうだとしたら、どんな過酷な運命が待ち受けていても、きっと戦える。

どんな話でも受け止めるつもりだった。

だから尋ねる。話の続きを促すために。

「どうして私を？」

イドは目の前の光景に、複雑な思いを抱く。

里香子の不安そうな様子は、傍にいた彼のほんの少しの慰めで簡単に吹き飛んだ。それどころか、今は何処か決意を感じさせる瞳をしている。

二人の親密さは、見ているだけで伝わった。けれど彼女の運命の相手はカインサーなのだ。彼と出逢った時、彼女は変わるのだろうか。それとも一度定まったその心は、決して変わることはないのだろうか。

運命とは、いったい何なのだろう。誰が決めたものなのだろう。

けれど今は、それ答えを出すことは誰にも出来ない。イドは迷いを振り切るかのように、彼女に向き直る。

「君はこの世界に生まれる筈だったんだ。それを生まれる前に呪術をかけられ、遠い異世界に飛ばされてしまった。君の父親は、そんな君を呼び戻そうとして召還のための魔法を研究していて。それを俺が受け継ぎ、実行したというのが理由だ」

「……私が、この世界、に？」

藍色の瞳を見開いて、彼女は傍に寄り添う男性を見上げる。

「私は元々この世界の人間、だったの？ どうして呪術なんて」

「……」

すべてを話すと、約束した。だが寄り添い合う二人を目の前にして、どうして前王妃の遺言をこの場で伝えることは出来るだろう。やっと会うことが出来た、たったひとりの妹。その顔が曇るのは、やはりつらい。けれど。

（カインサー……）

主であり、大切な友でもあるカインサー。孤独に戦い続けるその姿が思い浮かび、同時に罪悪感が沸き起こる。これでは彼の為ではなく自分の為に、生き別れた妹を捜し出す為にその命令を利用して召還をしたことになってしまう。

「現王カインサーの生母である前王妃が、ある予言を遺した。その予言のせいで、君は呪術をかけられ、この世界から追われたんだ」



### 3 - 1 1 それぞれの夜（1）

随分長い間、話を聞いていたようだ。

あてがわれた部屋の片隅で、里香子は柔らかなベッドに腰を掛け、ぼんやりと窓の外を見ていた。

今日は眠れそうになかった。

夜明けにはまだ早い、それでも外の景色は少しずつ明るくなってきている。薄暗い光の下に見える、手入れが行き届いた美しい庭を見つめる。

この建物は、里香子の母であつた女性が気に入つて住んでいた場所だとイドは言っていた。だから好きに使つてよいと。けれど彼が何故、この場所を管理していたのだろう。もうすでに亡くなつてしまつていた両親という人たちと、彼も何か関わりがあるのだろうか。「まさか、私がね……」

鏡に映つた姿を見て、溜息を付く。どれほど強く決意を固めても、長い話の末に語られた事実の前には無力だった。銀色の長い髪に縁取られた、綺麗すぎる顔。何度見ても、まったく見知らぬ他人が映つているとしか考えることが出来なかった。けれどこれが本当の自分の姿だと彼は言う。この姿と魔法の力を、呪術によって封じられていたのだと。確かにこの姿になつてから、この世界をもっと身近に感じていた。魔法という力も、恐らく使おうと思えば自在に使えるだろう。けれど里香子は、それはもう二度と使うまいと決意していた。

今の自分が消えてしまうような気がして。

日本で二十年間暮らしてきた自分は何だったのだろうか。この世界に来てからも、フォスターの人たちと出会い、シュカを愛してきた自分は、何処へ行くのだろうか。例え魂は同じでも、姿が変わつてしまつたように少しずつ意識も変化していくのではないだろうか。そう思うととても恐ろしかった。

「こんなの、嫌……。元の姿に戻してよ……」

鏡を乱暴にベッドの上に放り投げ、両手で顔を覆う。

あまりにも美しすぎる姿も、世界を掌中に出来るほどの巨大な力も、王族のひとりという高貴な身分も、何ひとつ欲しくなどなかった。

運命の相手だと言われた、カインサーというこの国の王もきつと立派な人物なのだろう。

フォスターの協力によって敵を排除することが出来たのなら、もうどんな人も犯罪を犯さなければ生きていけないような国にはしないと彼は約束してくれたという。今までフォスターが犯してきた罪に対しても、そうしなければ生きていけない状況だったこと、そして死者はひとりもいなかったことを配慮して、そうするべき状況を作ってしまった国の責任とする。被害のあった村には最大限の保障をするとイドは告げた。里香子を最初に保護してくれたあの村も、それで冬を越すことが出来るだろう。それに対してはとも感謝していた。きっと彼は崇高な志を持っている賢王なのだろう。だからこそ、正義の為の力を欲したのだろうか。

けれど彼の傍で王妃となって生きるよりも、あの山で苦勞しながらも互いに助けて合って、シュカと一緒に生きていきたくったのに、それももう、叶わない夢なのだろうか。

頬を伝う涙すら厭わしくて、里香子はそのまま瞳を閉じた。何も見えないように。

里香子がほんの少し前まで見つめていた庭園で、シュカはひとり月を見上げていた。

空が明るくなるにつれて、月は少しずつその存在感を失っていく。

誰もいない夜の庭園に、噴水の水音だけが響き渡っていた。少し

長い黒髪を揺らす風は、こんな時期にも関わらず冷たくはない。魔法という移動手段を持たないフォスターの行動範囲は狭い。同じ国の中でもこんなに違うものだと、初めて知った。薄紫の花びらが風に舞い、噴水に落ちる。水の流れに飲まれて浮いたり沈んだりするそれを、指を水に浸して掬い取った。

長い一日だった。

里香子が居てくれなかったら、こうして月を見上げている自分は今もいなかっただろう。魔法はいつも理不尽なほど強い力で、すべてを奪い去る。それに対抗する術を持たない自分たちは、この大陸では永遠に弱者のままなのだろうか。

噴水の中央に飾られている彫刻が月の光で銀色に輝き、その色は里香子を思い出させた。

あれほど美しい女性は、見たことがなかった。人間とはあそこまでの美を造り出せるのだろうか。封印されていたという、その姿と力。解放したのは、自分たちを助けたいと強く願ってくれたからだとかかっている。それに彼女が異世界から来たということも、フォスターではないということもシユカは既に知っていた。だから里香子の姿が変わったとしても、たいした問題ではなかった。どんな姿になったとしても里香子は里香子であり、その魂は変わらない。そしてどんなに二人を取り巻く状況が変わっても身分という差がついても、彼女の心が変わらない限り、愛する心にも変わりはない。

ただひとつ、気になったのは運命の相手だという、この国の王。生まれる前から定められた、運命の伴侶。それはきっとフォスターの、魂の共有者に相当するものなのかもしれない。

フォスターに関して言えば、魂の共有者がいる相手を愛するのは禁忌だった。例え結ばれなくとも、愛するだけで一族から追放される厳しい掟。イドという銀髪の魔導師の話を聞き終えた時、ルーパリーも少し慰めるような口調でこう言っていた。

運命の相手が既にいるのなら、仕方がないな。

「仕方がない、か」

聞く者のいない呟きに宿る、憤り。

このまま運命だという言葉で彼女を諦めれば、すべて収まるのだろうか。王に協力すれば仲間の仇を取ることも出来る。今よりも生活は穏やかになるだろう。ならば今まで通り一族を守り、生涯その守護者としてこれから生きていくのだろうか。今まで一度も疑問に思ったことのない人生。

けれどそれを選んだ時、もう隣に里香子の姿はないだろう。それを思うとき、世界のすべてが色を失う。こんなにも深く彼女を愛していたのだと、今更ながら思い知る。

運命に、どれほどの力があるというのだろう。

フォスターであることよりも、彼女を愛したいというこの気持ちすら、変えることが出来ないというのに。これからは今までよりも穏やかに暮らせるとはいえ、何よりも大切にしてきた仲間たちを裏切る行為かもしれないというのに、抑えられない。こんなに激しい思いが自分の中に宿っていたのだ。

一族か、彼女か。今問われれば、きつと迷わず答えるだろう。

### 3 - 12 それぞれの夜(2)

シュカは立ち上がった。

静まりかえっている建物の中に、灯りのついている部屋がふたつ。ひとつは里香子が向かった部屋だ。今日一日だけであまりにも多くの出来事が、まるで嵐のように襲いかかってきた。きっと眠れずに過ごしているのだろう。

真っ直ぐに、その部屋の庭園に面している窓へ向かった。

「……里香子？」

窓は開いたままだった。高級そうなカーテンが、やんわりと吹く風に煽られて舞っている。それに手を掛けて払うと、部屋の中の様子が見えた。そこは大きな鏡や衣装棚、そして化粧台などが置いてあり、元々女性のために作られている部屋のようだ。すべて白で統一されていて、花の彫刻が施されている。奥にはレースのカーテンで仕切られた大きなベッド。そこに、里香子の姿があった。

俯き、両手で額を覆っている。震える小さな肩。かすかに聞こえる嗚咽。投げ捨てたかのように、乱暴に置かれた鏡。世界に絶望したかのような痛ましい姿に、思わず窓から部屋の中に入る。

「里香子」

レースのカーテンを押しやり、震えている肩に手を掛ける。びくりと身体を震わせた里香子は、それがシュカであると悟ると、その胸の中に飛び込んできた。

「シュカさん……シュカさん……」

泣きながら自分の名前を繰り返すその姿に、心が痛む。

生まれ育った世界から突然呼び出され、事情はあったとしても何もわからないまま放置されていた。そしてフォスターと同じ姿をしていたばかりに、人里離れた山奥で隠れ住まなければならなくなった。育ってきた場所とは違う世界で、何故この世界に来たのかもわからないまま。

苦労しただろう。つらいこともあったに違いない。けれど里香子はいいつも笑顔で、健気に頑張っていた。

そんな彼女に、運命は更に重荷を背負わせようとしているのか。細い背中に、腕を回す。力を込めたら壊してしまうそうな気がして、優しく抱き締めた。

「私、こんな姿は嫌……。呪術だなんて言われても、私は今まで二十年間、あの姿で生きてきたのよ。みんなと一緒にの方がよかった……」

抱き締められ、その腕から伝わる温もりに少し安心したのだろうか。里香子は感情のままに言葉を紡ぐ。溢れる涙を拭おうともせず

に。

「どんな姿になっても、里香子は里香子だ」

腕にさらりと流れる銀の髪に触れる。馴染みのない色。けれどとても綺麗だと思った。

「本当に？ 私のこと嫌いになったりしない？」

「ああ」

「……姿が変わってしまったように、心まで変わってしまうかもしれない。私が、里香子が消えてなくなってしまうようで、怖い……。ここにるのが、怖い」

里香子、と小さくその名前を呼ぶ。流れる涙をそっと拭った。

「もし五年前の事件の犯人が裁かれすべてが終わったら。海を越えて他の国に行ってみようか。ふたりで、誰も知らないところへ」

運命が追いかけてこないくらい、遠い場所へ。

彼女が元のように笑えるように。

「でも、いいの？ みんなと離れて……」

シユカがどれくらい仲間を大切にしていたか知っている里香子は、喜ぶよりも心配そうに彼を見る。

自分の幸せよりも、相手を思いやる。それが里香子という女性。彼女は何も変わってなどいない。

「王がああ男に勝つことが出来れば、俺たちの生活もかなり変わる

だろう。そうすればもう、俺がいなくても大丈夫だ」

そしてそれは、初めて自ら望んだ未来。

本当に、いいの？　と言う里香子の小さな呟きに、頷く。

「他の国には、もしかしたら黒髪の人がいっぱいいるかもね。私の育った国では、みんな黒髪だったのよ」

「そうなのか。……そうだな、他にもいるかもしれないな」

そのためには、まず王と協力してあの男に勝たなければならない。  
「私も、何が出来るかもわからないけど頑張る。今を乗り越えたら、幸せになれるってわかったから」

嬉しそうに笑う里香子。蘇った微笑みに、安堵を覚える。これからはずっと、この笑顔を守りながら生きていく。

「朝にはまだ遠い。少し、休んだ方がいい」

封印を打ち破り、秘められていた力を駆使したのだ。きっと身体も疲れているだろう。銀色の髪を優しく撫でて促すと、彼女は素直にそれに従った。

「……傍に居てくれる？」

「ああ。ずっとここにいます」

子どものように手を繋ぎ、里香子は瞳を閉じた。その白く小さな手を握りながら、シユカは窓から空を見上げた。

白く輝く月の光に、何故か不安を覚える。

里香子はきつともう大丈夫だ。笑うことが出来たのだから。仲間たちにも、これからはつらいことばかりではないに違いない。

それなのに、心の底から沸き上がるようなこの焦燥は何なのだろう。

不吉な予感を振り払うように首を振り、里香子の手を握った。色々なことがありすぎて、自分も少し疲れているのかもしれない。

### 3 - 13 それぞれの夜(3)

美しく磨かれた石を敷き詰めた床に、月の光に照らされた自分の姿が映り込んでいる。ゆつくりと音を立てないように廊下を歩いていたルーパリーは、人影に気が付いて足を止めた。

「ミリー？ どうした？ 眠れないのか？」

廊下に面している大きな窓の傍に佇んでいたのは、シュカの妹のミリーだった。

「子どもたちは？」

「大丈夫。みんなぐっすり眠っているわ。悪い夢も見えないみたい」

あの子たちは心配いらなから、とミリーは笑う。あれだけ恐ろしい目に遭ったというのに、子どもたちは騒がなかった。それに寢室を包んでいた優しい空気。まるで誰かに守られているように感じたのは気のせいなのだろうか。

「あんまり豪華な部屋だから、何だか寝付けなくて。本当にここは綺麗ね。何だか落ち着かない」

ちよつと居心地が悪いかも、と彼女は苦笑する。

「お話は終わったの？」

ああ、とルーパリーは頷き、ミリーの隣に並んでそこから見える美しい庭園を見つめた。

「……色々とありすぎて、何から話したらいいかわからないな」

幻想的な月の光に照らされる花。その美しさに、まるで夢を見ているかのような錯覚を覚える。あの火事で死んでしまった自分が、死の間際に見ている夢なのではないかと。

夢の中を漂っているような意識を引き戻したのは、すこし思い詰めたかのようなミリーの言葉。

「じゃあ聞きたいこと、質問してもいい？ 話せないことなら、無理に聞いたりしないから」



「わかった」

ミリィーは何から聞けばいいのか迷うかのように、一瞬だけ沈黙した。

「里香子さんは、今何処に？」

最初に尋ねたのは、彼女のこと。

変わってしまったその姿を見たときは、ルーパリーも本当に驚いた。けれど里香子はその力でみんなを助けてくれたのだ。だから感謝していたし、彼女も自分の運命をまったく知らなかったのだから「別室にいる。かなり動揺していたから、今夜はひとりになりたいんだろう」

衝撃の事実だった。彼女はフォスターではなかったのだ。それどころか、かなり身分の高い女性だったらしい。

まるで出逢ってからの方が、すべて幻となって消えてしまったかのような寂しさを覚えてしまう。シユカもどれだけ衝撃を受けただろう。

「お兄ちゃん？」

「シユカは、少し外の風に当たってくると言っていた」

仕方ないと、そう口にした時の彼の様子を思い出す。あの瞳があれほど強い光を放っているのを見たのは、初めてだった。きっと彼は何かを強く決意したのだ。それが何かは、なんとなくわかるような気がしていた。

「里香子さんが助けに来てくれたとき、私は女神さまかと思ったわ。私たちを哀れんで、天から降りて来て下さった女神さまかと」

それだけ神々しく美しかった彼女の姿。そしてその偉大な力で、死ぬ運命から自分たちを助けてくれた。

「きっとそうなのよ。里香子さんは私たちを助けるために、ここに来てくれたんだわ」

まるで祈るように両手を組み合わせ、ミリィーは瞳を閉じる。

「女神……か」

確かに彼女が来てから、良い出来事ばかりが続いている。そして

これからもきつとそうだろう。もし彼らの作戦が上手く行けば、もう隠れ住む必要もなくなるのだ。どれだけその日が来るのを待ち望んだだろう。このきつかけを作ってくれたのは、里香子だ。

「確かにそうかもしれないな」  
頷く。

けれど思う。果たして彼女自身は、幸せなのだろうか。

まだ朝は来ないのだろうか。

イドはゆっくりと握り締めていた掌を開く。随分力を込めて握っていたのだろう。指の関節が軋むように痛む。疲労した身体には頼にかかる髪さえ厭わしく、銀色の髪を乱暴に背後へ払った。

夢魔を寄せ付けないように守護魔法を発動させていたのは、フォスターの少女たちのためだ。火に包まれ、どれほど恐ろしい目に遭っただろう。夢の中まで苦しまなくてもいいように、イドは静かに祈っていた。けれど普段ならば無意識に作動することが出来る簡単な魔法でも、今の状態では多少の苦痛を伴う。体力がなかなか回復しないことに、少し苛立ちを感じていた。

もしかしたらこのまま回復しないのではないか。

父の最期の様子を思い出し、不安よりも焦燥が沸き上がる。

まだカインサーの戦いは始まったばかり。彼の本当の味方は自分しかないのだ。孤独な王を遺して死ぬ訳にはいかない。

そしてようやく会うことが出来た、里香子と名乗った妹。

前王妃の予言がなかったとしても、彼女にはカインサーの傍にいて欲しかった。

王宮にいる時でさえ緊張を強いられる彼の、安らぎになってくれたらと願っていた。そうなれば、自分がいなくなったとしても何の不安もなかったというのに。

もし確実に召還を成功させていたら、彼女はフォスターと出逢う

こともなく、あの紫色の瞳をしたフォスターと親しくなることもなかった。

自分の未熟さが、運命を狂わせてしまったのかもしれない。けれどまだ彼女は、一度も運命の相手であるカインサーに会っていない。会えばお互いに引き寄せられるのではないか。そうなって欲しい。

祈るような気持ちで、イドは瞳を閉じた。

もうすぐ朝が来る。

そうしたら、カインサーに報告に行こう。

運命の女性とフォスターを保護したこと。そしてドリニティー公爵が娘であるシアを監禁し、フォスターを襲わせたことも。

今日もきつと長い一日になるだろう。

### 3 - 14 早朝の王宮にて

遠く離れた王宮にも、ゆっくりと朝は訪れようとしていた。まだ人気も少ない。しんと静まりかえった冷たい空気の中を、国王カインサーは足早に歩いていった。

彼を先導しているのは、近衛騎士のドリ力だ。離れすぎないように、また王の背後にも気を遣いながら歩いて行く。王宮の一番隅の、誰も足を踏み入れないような古びた部屋の前で彼らは立ち止まった。ドリ力はすぐにその扉を開けようとはせず、用心深く中の気配を探っている。

(……王宮で、ここまでの警戒が必要とはな)

弱音が溜息と共にこぼれ落ちそうになり、カインサーは苦笑でそれを押さえつける。まだ道は遠い。けれど、確実に一歩ずつ進んでいるのだ。常に理想を掲げ、それに近付けるように努力を続ける。出来ないかもしれないと考えるのは、自分自身を鎖に繋ぐようなものだ。

「大丈夫。俺だけだ」

こちらの気配を感じたのだろう。中から声が聞こえる。この声が聞き慣れた腹心の魔導師イドのものだと確信したカインサーは、扉の前でドリ力を待たせ、ひとりでその中へ入る。

「イド。随分と早い時間に呼び出したものだな」

朝が訪れていたとはいえ、窓のない部屋は薄暗い。普段嗅ぐことのない埃と黴の匂いが、狭い部屋の中にゆっくりと漂っている。調度品はほとんどない。埃を被った大きな寝台がひとつと、布を被せられた家具が何個あるだけだ。

「この時間に、しかもこの場所ならば誰も来ないだろうと思ってな」  
王宮の入り口から一番遠いこの部屋を、訪れる者はいない。存在すら知られていないかもしれない、忘れられた場所。ここは何代か前の王妃の部屋だったと聞く。けれどこんなに狭い、しかも窓のな

い部屋に自分の妃を住ませた王がいたのだろうか。

部屋の中央に立っていたイドは、薄暗い部屋の中でも青白い顔をしている。まだ調子が戻らないのだろうか。けれどこんな埃だらけの部屋では座る場所もない。周囲を見渡した仕種でそれを察したのだろう。イドは大丈夫だ、と笑う。

「いくつか報告がある。良いものだけならよかったんだが」

「シアのことか？ 昨日から定時連絡が途絶えている」

カインサーは冷静だった。イドは頷く。

「どうやらひとりでフォスターに接触したらしい。それを見張っていたドリニティー公爵の手の者に見られていたようだ。恐らく自宅に軟禁されているだろう」

「……そうか」

彼女はいわば切り札だ。フォスターの証言だけではドリニティー公爵を告発することは出来ない。娘であるシアが証言するからこそ、それは成立するのだ。彼女が敵の手中にある今の状況は、カインサーにとってはかなり不利な状況だった。それにこちらの動きを彼が察したのであれば、もう手段を選ばない可能性もある。

だが彼はそれを、ほんの少し瞳を細めただけで受け止める。慎重に事を運ばなければならぬのは彼女もわかっていたはずだ。だがシアにもそれなりの想いがあって、父と敵対してこちら側に協力しているのだ。フォスターと接触したことを早急だと責めることは出来ないだろう。

「娘にも見張りをつけるとはな。それでも娘であるが故に、監禁されるだけで済んでいるのだろう。だがあの男のこと、娘の存在が本当に身の破滅に繋がるとわかればどう出るかわからない。早急に安全な場所に移す必要があるな。彼女が生きている限り、勝算はある」

だがドリニティー公爵の邸ともなれば、王宮に匹敵するほどの警備だろう。そこにどうやって侵入するか。さすがのイドでも難しい。それに失敗したときにカインサーの指示だとわかれば、彼は必ず厳しい追及をしてくるだろう。

「だが悪い知らせばかりじゃない。……例の女性もやっと見つかった」

イドはドレニティーの手の者がフォスターの隠れ住む村を襲ったこと、そしてそこで異世界から召還した女性を見つけたことだけを話した。

もうこれしか方法がないと、彼に無理をさせてまで異世界から呼び戻した女性。確かに召還には成功したはずなのに、その姿が見えないのは安易に力を欲した自分への戒めなのかと思い始めていた時だった。シアからの忠告、他国の反応も気になっていた。

「そうか。見つかったのか」

それでも見つかったと聞くと心が騒ぐ。

だが見つかった女性はイドにとっても会うことのなかった妹だというのに、その表情は晴れやかではない。思い詰めたような顔をして、視線を反らした。

「イド？」

「……いや、彼女は今日中に王都に連れてこようと思っている。シアが接触したフォスターも一緒に。彼女が話した内容はすべて、向こうに伝わっていると考えてもいいだろう。どんな話をしたのか詳しく聞いたほうがいい。王宮に連れて来るのはさすがに危険だろうから、父が好んで使っていた別宅へ連れて行くつもりだ」

「そうだな。今日の夕方、いや深夜には俺もそこへ向かう。これからのことも決めなければならぬだろう」

一番の問題は、シアをどう救出するかだ。彼女がフォスターにどんな話をしたのかも気に掛かる。

「……陛下、そろそろお時間が」

ちょうどその時、見張りをしていた扉の向こうのドリカが遠慮がちに声を掛けてくる。

「わかった。イド、すまないが話はまた後だ。お前は少し休め。また今夜にでも話をしよう」

頷く彼をその場に残し、カインサーは部屋を出る。暗い室内から

出ると、明るい陽光に一瞬視界を奪われた。

また一日が始まる。

カインサーは小さく溜息を付くと、ドリカに守られてその場を後にした。

決して事態は好転しておらず、むしろ悪化している。これからの道のりは困難を極めるだろう。それにも関わらず僅かながらも高揚を感じるのは、ようやく運命の相手だと予言された女性に会えるからなのか。いったいどんな女性なのだろう。

#### 4 - 1 白昼の幻

カインサーと対面した後、イドはすぐに里香子たちがいる邸へ戻った。自分の部屋として使っている場所へ、魔法で移動する。

すると邸の中には焼きたてのパンのような匂いが漂っていた。

一応倉庫には貯蓄された食糧はあるが、まだ侍女の手配はしていない筈だ。不思議に思っただけで厨房に移動する。

「あ、おはようございます」

そこには、里香子の姿があった。

すっきりとした身なり、腰まであった美しい銀色の髪はきつちりと結って纏められている。パンを切り分ける様子も手慣れていて、この世界に来てから覚えた訳ではなさそうだ。

「勝手にお借りしました。子どもたちがお腹がすいていたから」

彼女の傍にはひとり、フォスターがいる。ひとりだけ年上の、それでもまだまだ幼さを残す少女だ。彼女もイドを見るとにこりと微笑み、挨拶をした。

「朝食の手配が遅れてしまったな。昼からは侍女を呼んで準備させよう」

だが里香子は首を振った。

「いえ、ここを使わせて貰ってもよいのなら、私たちで出来ますから。それに知らない人がいると子どもたちが怖がるので」

慣れた手つきを見る限り、それを苦痛に思っている様子は微塵もない。むしろ楽しげだ。だからそれ以上言うことが出来ず、ただ話があるから朝食後に来て欲しいとだけ告げてイドはその場を離れた。彼女は私たち、と言った。

姿は変わっても、意識はやはりフォスターを仲間とと思っているまなのだろう。妹とはいえ、まったく違う環境どころか違う世界で育ったのだ。まして向こうは兄妹であることも知らない。仕方がない、とはいえその距離感に寂しさのようなものを感じてしまう。



頭を振ってその思いを吹き飛ばし、もうひとり目的の人物を捜し出す。二人を王都へ連れて行かなければならない。

里香子は瞳を閉じていた。緊張しているのかもしれない。隣にいるシユカを見上げる。彼は励ますように優しく微笑んでくれた。

（うん。……大丈夫）

イドに連れられて、里香子とシユカは王都に来ていた。

そのあまりの人の多さに、そして建物の美しさに里香子は驚いた。同じ国でもこんなにも違うのだ。美しく整備された街道。商店街の活気。綺麗な服を着た女性たち。白く美しい建物。

その立ち並ぶ建物のひとつに、イドは二人を案内した。

「すまないが、ここで待っていてくれ。部屋は好きに使ってくれてかまわない。夜にならないとカインサーは来られないから」

そして彼も忙しいのだろう。危険だから外には出ないように、また夜来ると言い残してその場を去った。

（……カインサー）

きつとそれが、この国の王の名前なのだろう。

小さくその名前を呟いてみる。不意に切ないような、悲しいような気持ちになって首を振った。会うのが怖い。

シユカの姿を探すと、彼は窓から外を眺めていた。この国の中心。里香子も寄り添うようにその隣に並び、同じ光景を見つめた。

煉瓦造りのような家が建ち並び、石畳を敷き詰めた道がその間を走っている。上から眺めると、その整然とした様子がはっきりとわかった。けれど緑が少ないわけでもなく、ところどころにまだ花を咲かせているのが見える。

「綺麗な町ね」

「……ああ、そうだな」

目の前の景色を瞳に映している彼は、何を思っているのだろう。

思考の海に沈んでいるかのような様子に、里香子はそつと傍を離れた。邸の中を見て回る。どうやらここは魔導師の家のようなのだ。

（あの人の家なのかな？）

そうだとしても、今は使っていない場所なのだろう。汚れてはいないが、どの部屋も人の気配は残っていない。その為に少し寂しげな印象を受ける。長い間留守だったようだ。

「この部屋は図書室、かな？」

その中にひとつだけ、人の気配が残っている部屋があった。本棚が部屋の壁に沿ってびっしりと並び、その高さは天上まで届いている。中には古そうな本がきちんと並べられていた。どうやら魔法に関する本ばかりのようだ。灯りはないが、天上の高い位置に窓がいくつもあり、太陽の光が注がれていてとても明るい。

興味を引かれて、里香子はその部屋の中に入った。本棚に手を伸ばし、その中の一冊を手取る。ぱらぱらと捲ると、本の間に挟まっていたらしい紙がひらりと舞い落ちた。

「あ……」

慌てて拾い上げようとして、その紙に触れる。すると、すつと部屋の温度が下がったような気がした。すると誰もいなかった筈の背後から、人の気配。けれど不思議に恐ろしさは感じない。里香子はゆっくりと振り向いた。

椅子に座っている女性が見える。

高貴な身分なのだろう。白のレースをあしらった豪華なドレスを身に纏い、金色の髪を結び上げずにそのまま垂らしている。ふわりとしたドレスでもわかる腹部の膨らみ。妊娠しているのだろう。とても美しい女性だった。嬉しさを隠しきれないように、そつと自らの腹部を抱く。

（名前はもう決めているの）

濃い青色の瞳が、背後を振り返る。そこには銀色の髪をした魔導師がいた。どことなくイドに似ているが、その表情は彼よりも鋭利さを感じる。けれど傍らにいる女性を見る瞳は、優しさと労りに満

ちていた。

（エリセールというの。どうかしら？ イドとエリセール。そしてあなた。私の宝物だわ）

幸せそうな顔をして微笑んだその姿が、ゆっくりと消えていく。

誰もいない部屋は元の静寂を取り戻した。里香子は呆然と、その場に立ち尽くす。

「今のは……」

拾い上げた紙。古い紙なのだろう。ゆっくりと開くと、そこには美しい筆跡で、ひとつの名前が綴られていた。

エリセール・リリナティ・ロドワール、と。

## 4 - 2 運命の足音

女性の深みのある青の瞳と、男性の銀髪は今の自分の姿によく似ていた。

古い紙にもう一度目を通す。

「もしかして、私の……」

だとしたらあの二人は、この世界での自分の両親なのだろうか。気が付くと涙が頬を伝っていた。とても幸せそうだった。とても嬉しそうだった。産まれることを、あんなにも楽しみに待ち望んでくれているのだ。

ありがとう。

里香子はその古い紙を抱き締める。

「……イド、とエリセール……？」

ふと思い出した言葉。

確かに母であろう女性はそう言っていた。あの愛しさに満ち溢れた言葉は、まだ耳に残っているかのようだ。

イド。それは自分をこの世界に呼んだという、銀色の髪をした魔導師の名前。

父と思われる男性は、彼にとってもよく似ていたと思う。

「まさか……」

もしかしたらこの国に、まだ生きている家族がいるのかもしれない。けれど、そうだとしたら何故彼は名乗らないのだろう。きっと何か理由があるのかもしれない。だから彼から言ってくれるまで、静かに待った方がいいだろう。

向こうの世界でも早くに両親と死に別れ、兄妹もなく育った里香子は肉親というものには縁が薄かった。もう一度、その紙を見つめる。

愛してくれていた。会えるのを楽しみにしてくれていた。そしてこの世界には、兄がいるかもしれない。

それはまるで、暗闇にひとつ明かりが灯ったような。

ここはただ単に、生まれる筈だった国。そう思っていた里香子の心を、その明かりは照らしてくれた。

愛しい、とその時里香子は思った。

この国が、とても愛しい。

綺麗な町並みを、赤い夕陽が自分の色に染めている。

まるで別世界のように整った町にも、山での生活と同じように一日は廻ってくるのだ。

シユカはぼんやりと、窓から見える景色を見つめていた。

田舎の村でさえ恵まれた暮らしに見えた。けれどこの窓から見える町の光景は、その村でさえ小さな存在だったと思い知るには充分だった。

整備された綺麗な道。

歩きやすいように石畳が敷き詰められ、雑草ひとつ生えていない。綺麗な服を着た女性や、子どもたち。

その顔には何の不安もないように見えた。笑顔が溢れている。

遠くに見える市場にはたくさんの野菜や果物が並び、手に入らない物はないように見える。

町の入り口や城門には、警備兵や騎士の姿。

これが貴族の暮らしだというのなら、それも仕方ないと思えただろう。彼らは違う種類の人間だ。今フオスターの仲間がいる場所も、元々は貴族の住んでいた場所。豪華なのは当然だと思っていた。けれどこの町に暮らしているのは、村よりは裕福かもしれないが普通の人間だ。

食べ物もなく寒さで震えている子どもたちの姿が浮かぶ。

葉がないために、高熱で喘ぐ苦しげな顔。人の気配に怯えて、それでも決して声は出さないように唇を噛み締める白い顔。

同じ国の、同じ種類の人間。それがどうしてここまで違うのか。ただフォスターとして生まれたというだけで。ただひとりの貴族が裁かれるだけで、本当にこの差は縮むのだろうか。

この町に生きている人に、罪はない。それはわかっている。彼らはただこの地に生まれたただだ。自分たちがフォスターに生まれたのと同じように。人は自ら生まれる場所を、選ぶことは出来ないのだから。ならばやはり、罪があるのはこの国か。

この町に、来なければよかった。

見なければ、知らなければ。憎む心を持たずにいられたのに。

シュカは瞳を閉じた。

この国に対する憎しみを消し去ろうとするように。

「シュカさん」

柔らかな声が聞こえた。里香子の声だ。

振り返ると姿は変わっても愛しいただひとりの女性が、そっと寄り添ってきた。

煌めく深い青色の瞳はまるで夢を見ているかのよう。銀色の髪も今は緋色に染まっていた。彼女を愛しいと思う心だけが、憎悪を消し去ってくれるような気がして。その華奢な肩に腕を回し、抱き締める。

この国が、愛しい。

この国が、憎い。

相反する感情を胸に抱きながら、それでも互いに対する思いにはただひとつの変化も、偽りもなく。抱き合う二人を、夕陽は少し悲しげに照らしていた。

もうすぐ、夜が来る。

運命がゆっくりと足音を響かせて、二人の元を訪れようとしている

た。

#### 4 - 3 偽りの言葉

長い一日だった。

執務室で書類に目を通していたカインサーは、窓の外がようやく暗くなってきたのを目にして、小さく溜息を付く。意識はもう随分と前から、手にしていた書類にはなかった。

薄暗くなってきた室内に、明かりを灯す。

今夜、自分のこれからの運命が決まる。そんな予感がカインサーにはあった。

ここは執務室ではなく、カインサーの私室だった。広い室内には誰もいない。

今日は体調が優れないので私室で仕事をすると偽り、部屋に籠もっている。だから今、この部屋の周辺にいるのは護衛のドリ力だけだ。イドによつて透視魔法を無効化する結界が張られている為、密偵の目も届かない。

常に誰かの視線が向けられ、密偵もどこに潜んでいるかわからない生活にも慣れていたが、たまにイドに頼んでこういう日を設けてもらうこともあった。常に張り詰めていてはかえって隙を作ってしまうからだ。

やがて闇はゆっくりと世界を覆い尽くす。

窓から見える町の明かりも疎らになってきた頃、カインサーは広がっていた書類を片付けた。そろそろイドがやってくるだろう。

この胸に宿っているのが不安か、それとも期待なのか。もう区別が付かなかった。ただ自分の運命が決まろうとしている。それだけが頭の中から消えなかった。

「カインサー」

それからしばらくして、イドは姿を現した。

だがその表情は暗い。顔色もあまり良くないように見える。

「どうした？ 何かあったのか？」



召還以来彼の体調はいつこうに良くならないが、今日はいつもよりも更に調子が悪そうに見える。氣遣う言葉を口にするカインサーに、イドは大丈夫だと笑みを作ってみせる。

「それよりも話しておかなければならないことがある。最初に言えばよかったんだが……」

言いにくいのか、何度も戸惑いながらイドが告げたのは。

これから会う二人、イドの妹の里香子という女性と、そしてフォスターのシュカという男との関係だった。

それは少なからず、カインサーに衝撃を与えた。イドが今まで言えずにいたのだろう。

呪術によって力と真の姿を封じられていた時に、彼女はそのシュカという男と出逢った。自分の運命を何も知らず、何故この世界にいるかもわからずに、不安だっただろう。

それを救ったのが彼だとしたら。

すぐに彼女を保護出来なかった。それは今更どんなに悔やんでも変えようのない現実。その事実がある以上、彼らに何を言えるというのだろう。

それでも亡き母の遺言は、懸命に戦い続けるカインサーの支えともなっていた。まだこちらには切り札がある。そう思うことが氣力にも繋がっていたのだ。

それも今、完全に絶たれたのだろうか。

押し込められていた不安は、あまりにも突然にカインサーの元へ押し寄せてきた。

このまま終わるのではないか。

自分は足掻くだけで、結局、何者にもなることが出来ずに。

この国は何ひとつ、変わらないのではないか。

「……すまない、俺が、俺がちゃんと召還を成功させていれば」  
けれど俯こうとした彼を思い留まらせたのは、苦渋に満ちたイドの声。

「そうすれば、きっとこんなことにはならなかった。俺がお前の運命を、変えてしまったのかもしれない……」

憔悴した様子。今にも倒れそうな顔色でイドは俯く。

その姿を目にして、落ち込んだ様子など微塵も見せる訳にはいかなかった。

「彼らはこの事実を知っているのか？」

「ああ。……隠しては置けないと思い、すべてを話した」

そうか、と頷いてみせる。何でもない報告を聞くように。

「それでも彼らが協力してくれるのなら、何の問題もない。シアの言うように外交の問題もあるからな。何よりも今は、あの男をどうするかだ」

幼馴染であり腹心の友。臣下というよりは同じ志を持った仲間。そんな仲間であるイドの前で、感情を偽ったのは初めてだった。今、自分が失ったもの。

それは感情を一切偽ることなく、本音で話すことが出来た場所。そこでは何の遠慮も配慮もなく、思うがままを口にすることが許されていた。

自分が置かれていた環境を考えれば、それはとても貴重な場所だったに違いない。

「もちろん、彼らもその点に関しては協力的だ。心配ない」

けれどその言葉を聞いた時のイドの顔に、隠しきれない安堵の色が見えたとき、カインサーは決して後悔はするまいと誓う。

彼が腹心の友であるからこそ、言葉。それを後悔するような男には、決してならないと。

「ならば彼らとも早々に話し合いをしなければならぬ。シアの身も心配だ。すぐに向かおう」

もし勝算がなかったとしても、これから全力で戦い抜く。ただそれだけだ。きっとこれが、新たに定められた自分の運命なのだろう。

何かを為すことが出来なくても、志半ばで力尽きようと。それが

たったひとりでの戦いだとしても。自分は全力で戦い抜いた。後悔はひとつもない。

そんな風に生きることが出来るならば、それで構わない。

(……里香子、か)

心の中だけでそつと呟いてみたのは、断ち切った運命の女性の名前。先程までの期待とは異なり、今は彼女と対面することが怖かった。

運命とは、どのくらいの強さで引き寄せるのだろう。

あがらうことの出来ない強い思いに、翻弄されることを恐れた。

けれど例え世界を手にするとはなくとも、愛した人と一緒に居られるのならば、彼女はきつと幸せになるだろう。王族とフォスタ―という身分の差も、彼女が異世界から召還されたイドの妹だと公開しなければ問題にならない。

彼女が自分で選んだ男性と幸せに生きることが出来るようにする。そうすることが、何もわからずこの地に放り出されてしまった彼女の償い。

「移動する」

イドの言葉に、カインサーはゆっくりと頷いた。

#### 4 - 4 銀の微笑

景色が変わった。

長い間人が住んでいなかった建物特有の、冷たい空気が身体を包む。薄暗い室内。明かりは、机の上に置かれているランプだけだ。

イドの魔法が部屋全体を明るく照らした。まるで昼間のように。部屋の中央に視線を向けると、その明かりに照らされた人影がふたつ、寄り添い合うようにして立っている。

ひとりは長い銀髪の美しい女性。

もうひとりは、黒髪の男性。

支え合うかのように寄り添うふたりは、静かな視線をこちらへと向けていた。

まず目に入ったのは、暗い部屋を皓々と照らし出す光に煌めく、美しい銀色の髪。

それはイドと同じ輝き。彼の血筋である証明。

深い青色の瞳が静かにこちらを見つめている。

細い肢体に身に付けているのは、シンプルな平服。それでも隠しきれないその美貌は、着飾ったら目も眩む程だろう。白く細い手は、隣にいる黒髪の男性の腕にしがみついていた。

（彼女が……）

魔導師の力を受け継がなかったカインサーにはわからないが、人を惹き付ける美貌に加えて、彼女にはこの国で最高の魔導師であるイドすら超える魔力を秘めているのだという。

まさにふたつとない秘宝のような存在。

それを普通の男が守れるのだろうか。カインサーは黒髪の男性へと意識を向ける。

この国の平均的な男性と比べるとそんなに大柄ではない。

けれどその身を包む雰囲気は、まさに百戦錬磨の傭兵のようだった。どれだけ死地をくぐり抜けてきたのだろう。だが鋭さだけでは

なく、覚悟のようなものを内に秘めているのを感じる。守るべき女性、守るべき仲間がいる。その為に決して屈しない。そんな覚悟だ。彼のような男が味方ならば、どんなに心強いだろう。

寄り添い合う二人は、まるで完成された絵画のように見える。一緒にいるのが当然であるかのように。

イドがあればほど躊躇いながら、それでも話さずにはいらなかったのがわかるようだ。何も知らずにこの光景を見たら、さすがに平静でいる自信はなかったかもしれない。たった一目見ただけなのに、彼女の姿は心の奥底に刻み込まれてしまったかのようだ。カインサーは王という立場からあまり深い信仰心は持たなかったが、女神がいるとしたらきっとあのような姿をしているのだろう。

小柄な彼女はほんの少し背伸びをして黒髪の男性に何かを囁き、そして微笑んだ。

その微笑み。

美しい花が咲く瞬間を目撃したのなら、きっとこんな気持ちになったに違いない。あがらう術もなく、心が惹き付けられる。

けれどイドの視線を感じ、カインサーは意識して視線を反らした。もし何も知らずに出逢っていたら、あの微笑みに魅せられるまま彼女を愛していたのかもしれない。

だが添い遂げることが出来るのなら安らぎになる愛も、片恋ならば負の感情しか生み出さないだろう。

いや、例え相愛になったとしても国王である限り、この戦いは終わらない。安息のない戦いの日々を、彼女にも強要することになってしまう。そして国王として即位した以上、国よりも大切な存在を作るわけにはいかないのだ。

それならば。それよりならば彼女だけを愛し、大切に出来る男が傍に置いた方が良い。

イドが召還に成功したとしても、きっとそう思っていた。彼に落ち度は何もない。これが最初から自分の運命だったのだ。けれど。

視界の隅で揺れる銀の影。

ほんの一時でいいからあの微笑みを自分にも向けて欲しいと、そう願う心はどうやったら完全に消え去ってくれるのだろうか。

シュカは、イドと共にこの場に現れた男を見つめた。

想像していたよりずっと若い。恐らく自分とそう変わらないに違いない。

背は高く、ルーパリーと同じくらいだろう。

彼とは違って痩身だが、鋭い双眸のせいで貧弱な印象はまったくなかった。その蒼い瞳に宿る色は、見た目の年齢よりも遙かに深く、そして鋭い。

短い金色の髪に、国王としての威厳を損なわない程度に装飾を控えた衣装。華美を好む貴族たちの中では浮いて見えるかもしれないけれどそこに、流されることのない彼の強固な意志を感じさせる。

森で出逢ったシアという女性もそうだった。彼もまた、固い信念を持って戦い続けているのだろう。

彼らのような者が、まだこの国にはいるのだ。それがとても小さな光だとしても、この国はまだ暗闇に包まれてはいない。

（そうか。この男が……）

里香子の、運命の相手なのか。

元から彼女を譲る気などまったくなかったが、それがつまらない男ではなく、彼のような者でよかったと、シュカは思う。

だが彼は意識して、里香子から視線を反らした。

興味がないのならば、わざわざ召還魔法を実行させることはないだろうに。

彼はただ静かにイドの話に静かに耳を傾けている。そしてイドにシアとの会話の詳しい内容を聞かれ、シュカもそれに答えた。

けれどイドが、ほんの少し視線を反らした時。彼は憂いを帯びた

眼差しを、里香子の居る方向に向ける。直接彼女を見ようとしない  
その視線に、彼の苦悩が見えた気がした。

瞳を反らした。

憎しみを持ち続けていられるような相手だったなら、罪悪感を持  
たずにいられたのかもしれない。

#### 4 - 5 闇の牢獄

里香子はシュカの腕に縋り付きながら、じっと彼らの話を聞いていた。話し合いは真剣で、そして長時間に渡っていた。

段々と夜が薄れてきたのを感じる。外は夜明けに近いのかもしれない。

（このひとが、王様なんだ……）

最初は緊張と恐怖で見ることが出来なかった存在も、長時間同じ部屋にいと少し馴染んでくるのだから不思議だ。里香子は視線を金色の髪をした王に向ける。

イドと同じくらいの年だろうか。若いが、王に相応しい威風堂々とした立派な人物のようだ。短い金色の髪に、蒼い双眸。まるでおとぎ話に出てくる王子様のような整った顔。けれどこの人こそ運命の人だと思うようなときめきは感じない。

彼も真剣な表情でイドやシュカと話し合いをしているが、あまりこちらには視線を向けない。政治的な話ばかりで、あの予言や運命を持ち出す様子もまったくなく、里香子は少し安堵する。

話し合いは敵の手の中にいる仲間の女性を、どうやって助け出すかということのようだ。

シュカの隣にいるイドを見上げた。彼の表情も真剣そのものだ。イドを見つめていると、ぼんやりと女性の姿が浮かぶような気がした。

茶色の髪をしたとても綺麗な女性。窓のない暗い部屋に押し込められているようだ。明かりひとつない暗闇で、彼女は両手で顔を覆って泣いている。そのあまりにも悲しげな姿。

手を差し伸べたくなった。

「……大丈夫だから」

彼女を慰めてあげたい。あの暗い牢獄のような部屋から出してあげたい。



いつのまにか里香子の意識は、その部屋にいる女性に向かっていった。

間近で聞こえたその声にシュカが振り返る。

どうした？ と問おうとした言葉は、掛けられることはなかった。ほんの一瞬前まで触れ合っていた筈の彼女の姿が消えている。

「里香子？」

シュカの緊迫した声にイドとカインサーも振り返る。彼の隣にいた筈の里香子の姿がない。

「……魔法を使ったのか」

その波動を感じ取ったイドの表情が険しくなる。

「魔法？」

「転移の魔法。けれど誰かに連れ去られたのではない。彼女自身が使った魔法なのだろう。けれど……」

彼女自身の意志がきちんと伴って発動したのではない。まだ目覚めたばかりの彼女の魔力は誰よりも強いが、不安定だ。

瞳をしっかりと閉じて、魔力の波動を辿る。彼女が無意識に考えたのは誰のことだろう。

暗い部屋。

閉ざされた牢獄に、一筋の光が射した。

闇に慣れた瞳にはあまりにも眩しくて、直視することが出来ない。

シアは瞳を閉ざした。それでも感じる銀色の煌めき。

光に焦がれた自分が見ている夢なのだろうか。それとも、自分の魂はこの牢獄から解放たれようとしているのだろうか。

確かめようとそつと瞳を開けてみると、そこには銀の女神がいた。流れるような銀色の髪はこんな闇の中でも煌めきを失っていない。肌はこの闇に反するかのように白く、深い色の瞳は慈愛を感じさせ

る。

（女神さまだわ……）

光に焦がれるかのように手を差し伸べる。銀の女神は穏やかに微笑んでその手を握る。

そして。

「……あれ、ここは何処？」

慌てたように周囲を見渡した。焦りを含んだ瞳が、シアを見つめる。

「あの……。私、何処に来ちゃったんでしょう……」

彼女は女神ではなく人間、しかも類い稀な強い魔力を持ちながらも制御することが出来ない様子だった。

「ここには確か、父が魔力を撥ね除ける結界を張ったはず。それをくぐり抜けてきたのね」

だとしたらそれは、あまりにも圧倒的な強い力だ。

けれど里香子と名乗った銀髪の恐ろしく綺麗な女性には、そんな様子は微塵も見せずにシアの隣にちょこんと腰を下ろすと、両手で膝を抱えた。

「うーん、これって魔法ってこと？ 二度と使わないって思ったんだけどな。でも無意識じゃ仕方ないのかな。心配してるよね。どうやって帰ろう……」

この牢獄から助け出してくれる救世主かと思ったが、どうやら違うようだ。

話をよくよく聞いてみると、自分を助け出す為の話し合いが行われ、彼女はそれに同席していたらしい。そこでの話に感化されてここまで跳んできたのだとすると、制御出来ない魔力というものは恐ろしいのだと思い知る。

思わぬ来客を、シアはじつくりと眺めた。美しい銀の髪。そしてこの魔力。

「もしかして、イド様の身内の方ですか？」

思い立った可能性を口にする、彼女は否定も肯定もせず、困っ

たように首を傾げる。

「そう、らしいけれど。私にはあまりよくわからなくて。この世界で育った訳じゃないし」

「！」

その言葉が意味する事実を、シアは知っていた。

（この方が、異世界から呼び寄せた……）

イドはとうとう見つけ出したのだ。カインサー王の、運命の女性を。

この比類なき美しさと力は、まさに彼に相応しいだろう。

シアは立ち上がった。

もう自らの迂闊さを嘆いてばかりではいけない。ここは父の邸。彼女にとっては危険な場所だ。力を欲してやまない父が、世界を支配出来る力を持つ女性が手の内にいると知れば黙っているはずがない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3555o/>

---

そして時は廻る

2011年10月7日18時34分発行